
ひとりヴァーチャルリアリティー

鰯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりヴァーチャルリアリティー

【Zコード】

Z0500V

【作者名】

鰯

【あらすじ】

行き当たりばったりで飛び込んだVR MMO。いきなり人の良さ
そのお兄さんたちに拉致され、ダンジョンに放り込まれました。
うつかり隠し部屋に閉じ込められ、更にこのゲームのウリ、疑似ト
リップイベント発動でログアウト不可ですって。ついてない主人公
が頑張ります。話の展開は非常に遅いです。7/27タイトル変更
爽快感は少なめで、勧善懲悪にはなっていないので、そういう方
話の流れが苦手な方はご注意ください。

下調べは必要

「ああああ、さみしいー」

壁に向かって咳いてみても、言葉は吸い込まれて消えてしまう。
いやいや、本当にさみしい。

もうかれこれ一週間ほど誰とも喋っていない。

一人が好きだなんて気取つてみたこともあつたけれど、やつぱり
誰かと会話したい。

むしろわたし以外が出す音を聞くだけでも満足してしまいそうだ。
それくらいわたしは、人に飢えている。

「どうしてこうなっちゃったんだろうなあ

すっかり癖になつた一人言を咳きながら、わたしは深い深いため
息をついた。

そもそもわたしは一人暮らしではないし、引きこもりてもいい。たまにサボることはあるけれど、大学にもちゃんと毎日通っているし、少ないながら友達もいる。

つまり、普通に生活すれば、毎日誰かと会話するのが当たり前のことだったのだ。

なのにわたしは、今、ひどく寂しい状況に置かれている。
入院とか監禁でもない。
いや、ある意味監禁でひとつにはいるのだけれど。

「うなつた原因は、わたし自身とひとつのVRMMOにあった。

リアルファンタジーという何の捻りも無いタイトルのそのゲームは、よくあるVRMMOのひとつだ、と思っていた。

エルフやドワーフみたいないろんな種族がいて、レベルはなくてスキルでそれぞれオリジナリティーを出していく類の。

剣と魔法の世界で、大まかな舞台設定はされているが具体的に魔王を倒す等の目標は無く、各自好きなように遊べる感じの。

良く言えば取つきやすく、悪く言えば平凡。

初めてVRMMOをプレイするには、手頃なゲームだと、わたしは迂闊にもそう判断してしまった。

わたしにはひとつ、悪い癖がある。

よく下調べせず、未知のものに手を出してしまつといふ癖が。
それで後悔することもあるけれど、しかし根回しがよく知つて
から対応するのには性に合わない。

勉強とか大学とか病院とか、自分の将来や健康に関することにつ
いては、割合慎重になりますけど。

でも娯楽、特にゲームについては前情報無しでプレイしたい、と
いうのが基本方針だ。

いきなり知らないことに出くわしてびっくりしたい。

育て方を失敗して、使えない雑魚キャラが出来るのもまた楽しそ
うだ。

反省したり後悔するのは、当たつて砕けてからでも遅くはない。
所詮は娯楽なのだ、失敗してもまた取り返せばいい。

そんな方針に従い、VRMMO用の機体と一緒にバッケージだけ
で普通っぽいと判断して購入したリアルファンタジーへと、公式H
Pもろくに確認せずに飛び込んでしまった。

もし過去に戻れるなら、是非わたしに忠告したい。

ちゃんと攻略サイト見てから来い、せめて公式HPに一通り目を通すだけでもいいからと。

ゲームとはいって、後悔してからじや遅すぎることもあるのだと。

普通のMMOはいくつかプレイしたことがある。
なので基本は同じだらうとビックリが甘く考へていたことは否定しない。

さらに舐めてかかつたくせに、初めての体験に興奮して冷静さを欠いていたことも認めよう。

キャラメイクの時に出てきたお姉さんのリアルさに、自分の思い通りにキャラを作れたことに、一々感激もした。
リアルファンタジーの世界に降り立つた時は、日に飛び込んでくるもの全てに感動して浮き足だつてもいた。

そんなわたしが、ゲームを初めていくらいもしないうちにあつれりとつまづいてしまったのは、当たり前すぎるほど の流れだったのかもしれない。

チユートリアルも受けずに街の中をあちこちキヨロキヨロ見て回つてゐるわたしは、分かりやすく初心者丸出しだつたらしい。
途中でやたらと人の良さそうな男性一人組に声をかけられた、と思つたらこきなじがしつと抱き上げられてしまつた。

あまりの展開に度肝を抜かれたわたしは、まともに反応する間もなく転移させられ、どこかのダンジョンにペいつと放り出されてしまつ。

鮮やかな早業に思わず感心してしまった程の手際の良さだつた。
すぐにログアウトするべきか迷つたけれど、二人は全く悪気が無

さとうな爽やかな笑顔を浮かべ、「街で待ってるから頑張って」と親指を立てられたので、じゃあ頑張つてみるかといらないやる気を出してしまった。

後から思えば、VRMMOに足を踏み入れたことによる興奮が悪い方に影響し、まともに頭が働いていなかつたのだろう。

ひとりとり残され妙なやる気に満ちたわたしは、そろそろり忍び足でダンジョンの中を歩いていった。

やたらと大きくて強そうな、リザードマンっぽい敵がウロウロしていく、うつかり見つかったらあっさり殺されてしまいそうだ。一応、痛みのフィードバックは殆ど感じないよう[に]設定したけれど、すぐ殺されて街に戻るのはなんとなく悔しい。

うまく敵をやり過ごして、無事に街まで帰りつきたい。

しかし、出口と思われる方向には敵が密集していて、とてもじゅまいけど見つからずに突破出来そうな感じではなかつた。

仕方なく、敵が居ない道を選んで進んでいく。

「げ、行き止まりー

しばらく歩いてたどり着いた先は、残念ながらどこにも繋がつていなかつた。

肉体的な疲れは無かつたけれど、がっかりして気が抜けてしまい
するするとその場に座り込む。

「ここに到つてでわたしはようやく落ち着きを取り戻し、迂闊すぎ
た自分の行動を反省し始めた。

調子に乗らず、置いていかないでと頼めば良かつた。

果たして拉致犯がその頼みを聞いてくれたかは分からぬが、目
的くらいは教えてもらえたかもしれないと思う。

一体わたしは何を頑張るつもりだつたんだろうと、考えるほどに
自分の間抜けさにため息が出る。

「覚悟決めて死に戻るかなあ」

いつまでも落ち込んでいてもしうがないと壁に手をつき腰をあ
げ、そのままの流れでなんとなしにペタペタ壁を触る。

ひんやりとした感触が伝わってきて、おおりアル、と地味に感動
していたら、いきなりガコツと音がして、眩しい光に包まれた。

「うわー

眩しそうに思わずキュッと目を瞑る。

明らかに何かの仕掛けが発動した様だったので、そのまま身を固くして来るかもしれない衝撃に備えたが、何も起らなかった。

しばらぐせうじていろと、ふと手に伝わってくる感触が、石でなくなつたような気がして、目を閉じたまま手を動かした。やつぱり、違う。

さつきまではざらざらしていたのに、すべすべに変わっている。無意識のうちに、手を別の位置に移動させていたんだろうか。恐る恐る目を開けてみると、そこは先ほどまでのダンジョンとは全く違う場所に変化していた。

「おおー隠し部屋めつけ」

木の壁に囲まれたその部屋は、さきまでの剥き出しの石の壁とは違ひ人工的で、まるでそこに誰かが住んでいるような雰囲気があった。

小さな机と、本棚、そしてベッドが備え付けられていて、あとはやたらと大きな箱がでんと置かれている。

しかし、窓や扉といった外と繋がるものは無い。

「ンンン」と一通り壁を叩いて回ってみたけれど、出口を見つからない。

どうやら閉じ込められてしまつたらしく。

「んー、どうしようかなー」

ベッドに腰掛け、すぐにログアウトするかどうか迷いつつ、ステータス画面を開いた瞬間、女人の声でアナウンスが流れた。

『只今より、疑似トリップイベントを開催します。
期間中、ログアウトは出来ません。
また、GMと連絡も取れませんので、谅め承ぐださー。
各宿屋において強制離脱は可能です。
それでは、よい二ヶ月をー!』

朗らかに告げられたその言葉と共に、表示されていたログアウトボタンがふつと消えてしまつ。

「ちよちよ、待って待つて！」

慌てて叫んでも、その言葉が誰かに届くことはなく。いきなりの急展開に動搖したわたしは、手当たり次第にステータス画面を開き、どこかにログアウトの手掛けりが残されていないかを探す。

そしてようやく見つけたヘルプを読んでわたしはがっくり肩を落とした。

リアルファンタジー一番の売り、疑似トリップイベント。

現実の六時間で三ヶ月分のプレイが出来、その間ログアウト不可であり、ゲームへの閉じ込められ体験が出来る。

外部との連絡は不可、何か予定がある人への措置として強制離脱システム有り。

また、外部の攻略サイト等への接続も不可。
内部の掲示板を利用した情報交換は可能。

「嘘でしょー」

ログアウトといつ手段を断たれて、完全に部屋に閉じ込められてしまつたわたしは、ひとつの決心をする。

次からばかりと下調べをします、と。

八方塞がりです

まずわたしは、ヘルプを熟読すること。

どこかにこの状況を打破するヒントがあるかもしれない、隅から隅まで舐めるように読んだ。

しかしそこはあくまで説明書程度のヘルプ。

具体的な閉じ込められた場所から出る方法なんて載っている訳もない。

全く関係の無さそうな項目も、もしかしたらと最後まで目を通したが、やはり何も見つからなかった。

ヘルプ以外で使えそうなのは、掲示板とチャットと、ゲーム内部のブログにフレンド通信くらいしか無さそうだ。

そのうちフレンド通信は、そもそも一人も知り合いが居ないので使えない。

まずは掲示板を覗いてみようと、ぼちぼちと画面を操作する。

ちなみにメニュー やステータス画面は全て目の前にふわふわ浮き上がるようになっていて、淡い光を纏った文字が踊る姿は地味に綺麗だった。

情報掲示板、という文字を見つけ、そこに触れると、ブブーと不正解の時に鳴らされるような音が響き、田の前にHラーの文字が浮き上がる。

「なんで、掲示板は使えるはずだよね」

首を捻り掲示板を開こうと挑戦してみるも、結果は全て同じ。何度試してもエラーしか出でこない。

もう一度ヘルプまで戻り、掲示板の項目を確認するけれど、原因もさっぱり分からぬ。

仕方なく掲示板は諦めて、次はチャットを覗いてみることにした。

チャットは誰でも参加出来るものと、決められた人しか使えないものがあるらしい。

誰でも参加出来るチャットは、荒れやすいから苦手だけど、そんな贅沢を言つてる場合でもない。

チャットの部屋の名前一覧がずらっと並んだページに辿り着き、しばらく迷つてから二番田くらいに入っているチャットに参加しようとその名前に触れる。

しかし画面が切り替わることはなく。代わりに再びあのブザー音

が聞こえてきた。

続いて浮かび上がるエラーの文字。

「なーんーでーっ」

くわづ、と思わず舌打ちして画面をぺしんと叩ひつしたが、手のひらは空を切り前につんのめつてこけそうになる。

そういえばこれは映像が浮かび上がっていただっけ、と思い出し、誰もいなけれど照れ笑いをして気恥ずかしさを誤魔化した。

さて、ここまで来れば、ブログもおそらく使えないだろう。
何の期待もせずに試してみれば、予想通りエラーが出た。

わたしの頼みの綱は、あつさり無くなってしまった。

これじゃいけないと焦ったわたしは、ぐあーっと意味もなく大声をあげ、勢いをつけて壁にぶつかってみるも、見た目より随分と頑丈な木の壁に簡単にぽんと跳ね返され、バランスを崩し床に尻餅をつく。

この様子では、壁を破壊して出るのも難しそうだ。

「あーほんとビリ」と

がつくり肩を落とし、そのまま床に仰向けになる。
このまま二ヶ月ここに居続けなきゃいけないのだろうか。
この静かで動くものが無い部屋に、たった一人わたしだけで、話
相手も無しに。

具体的な今後のこと想像をして、ぞわりと背筋が寒くなる。

わたしは首をぶんぶんと激しく振り、頭の中から怖い想像を追い
出した。

そもそも、完全な密室なんてバグでもない限り無いはずなのだ。
だからきっと、ここを出る方法はある。
入れるけど、出れないなんてある訳がない。
そうやってひとりしきり自分を励ましたあと、勢いをつけて立ち上
がり、手掛かりを探すべく改めて部屋の中を見回した。
一番気になるのはあの大きな箱だ。

箱の所まで歩いてゆき、その隣に並ぶ。

わたしの腰くらいの高さで、幅は両手を広げたよりちょっと小さ
いぐらいの正方形型のもの。

あからさまに何かありそうな様子が怪しい。

さつとあの中に、ここを出る方法が入っているに違いない。
そう期待しながら、箱の縁に手をかける。
が。

「あ、開かないーっ」

思いきり力を入れて引っ張ったのに、箱の蓋はぴくとも動いて
はくれなかつた。

鍵がかかっている訳でも、暗証番号がついてる訳でもないのに、
全く開く気配が無い。

もしや横にスライドして開けるのかと試してみたけれど、やっぱ
り動いてくれない。

げしげし乱暴に蹴つてみても、上に飛び乗つてジャンプしてみて
も、ひっくり返そうとしても、隙間すら出来ない。

全力でタックルしても変化がないのを確認し、とつあえずは諦め
ることにした。

箱にこだわらなくとも、この部屋にはもうひとつ怪しいものがあ
るのだ。

本棚にぎっしつつまつた、いかにも何かありそうな本の数々。
きっとあそこへ、何か参考になることが隠されているはず。
そうじやなあや困る。

今まで散々期待が外れて来たこともありて、嫌でも慎重になつたわたしは、本へと手を伸ばす前にまずはじつくり本棚を眺めることにした。

そんなに大きな本棚じゃないけれど、それでも五十冊くらいの本が収められている。

厚さや色もまちまちで、本当に“らしい”本棚だった。

そしてわたしはあることを発見する。

背表紙に書かれている文字に、読めるものと読めないものがあることを。

読めるものは、たつた一冊しかなかつたけれど、ようやく手がかりを見つけた気がして、少し興奮してしまつ。

どきどき高鳴る胸の鼓動を深呼吸で宥め、おそれおそれ一つの本に手を伸ばした。

タイトルは、『リアルファンタジーの歩き方・上』だ。

きつとこの部屋以外で見つけたのなら、氣にも留めなかつたに違いないタイトルのもの。

だけど今は、それが全てをどうにかする力を持つ、非常に有用で有り難い本のように思えていた。

本はあつた手にことなることが出来、そのことにやたらと感激しながら、ベッドへと腰かける。

そして過剰なほどに期待しながらページを捲ると、そこにはあった

のは。

ヘルプの内容がそつくりそのまま載っていた。
さつき、熟読したばかりの。

「なんでヘルプと同じなのよー」

思わず本を床に放り投げてしまったのは、しょうがないと思つ。期待させといてこれは無い。

いや勝手に期待しただけだけど、でもやつぱりこれは無い、あんまりだ。

ついでにもう一冊の方のタイトルは、『リアルファンタジーの歩き方・下』。

言つまでもなく、上巻に載つていないヘルプの内容がカバーされてこるようだった。

はあああ、と深く深くため息をついてベッドに横になる。

気力がごつそり削りとられてしまった。

田ぼしい手掛けりが全て空振りに終わってしまったのは痛い。あとわたしが出来ることと言えば。

「寝よっかな」

ふて寝することくらいだ。

ヘルプを読んで分かつたことだが、寝るのもスキルの一つだったりする。

スキルレベルが上がると、短い睡眠時間で体力と魔力が回復出来るようになり、ほんの少し体力が増えるらしい。

リアルファンタジーはスキル制で、スキルレベルが合計10000になるまでのスキルを選択出来る。

スキルは任意の行動を取ると発現し、以後それを育てるか育てないか選択出来るようになる。

上限がやたら多いようにも思えるが、そもそもスキルの数自体が五千個ほどあり、一つのスキルにつき最高500までレベルを上げられることを考えれば、最終的に選択出来るスキルの数はそこまで多くない。

その限られた中で睡眠スキルを選ぶのは、どう考へても愚策だろう。

おそらく使えないネタスキル。

普通なら絶対選ばないだらうもの。

だけど今のわたしに、選択肢なんて残されて無いのだ。

ぱちぱちと画面を操作して、翌日の八時にアラームをセットする。

これもヘルプに載っていた小技だ。

本来はゲームをやめる時間をセッティングしておいて、うつかりやりすぎのを防ぐために使うものらしいが、目覚ましとしても使えるとあつた。

ちなみに宿屋以外の場所で目覚ましをかけずに寝ると、睡眠時間はランダムになってしまふとか。

睡眠とはなかなかに面倒くさいスキルであるようだ。

「はあ、おやすみ、わたし」

自分自身へと声をかけてから、ゆっくり目を瞑る。
さすがはスキルになっているだけはあつた。
いろいろじぐじぎ思い悩む暇もなく、一分も経たないうちにわたしは深い眠りに落ちた。

スキルをゲット

「ピピピピピ、」という無機質なアラーム音で目が覚める。

「うはー」だなんて寝惚けることもなく、目覚めたばかりなのに頭は妙にはつきりしていた。

ゲームを始めてすぐ拉致され、閉じ込められてしまつたこと。それら全てがどうしようもなく現実であることが起きてすぐ思い出され、朝からずんと気が重くなる。

はあ、ともう癖になりかけているため息を溢してからベッドから身体を起こし、ふと視界の隅でメニューバーがちかちか光っていることに気がついた。

一体何だろう。

もしかして運営サイドからの連絡だろうか、なんて淡い希望を抱きつつ、メニューを開く。

開いた瞬間、スキルが発現しましたとのメッセージが目の前に飛び出した。

運営からの連絡じゃなかつたか、とがっかりはしたけれど、やっぱりなという思いもあつた。

スキルに心当たりはあつたので、さほど驚くこともなくステータスを開いて内容を確認すると、意外にも発現したスキルはひとつだけでは無かつた。

「空腹、ねえ」

スキル、空腹。

ヘルプでは紹介されていなかつたスキルだ。

そういうえば痛みのフィードバックをほぼ0にした時一緒に、空腹も感じないよう設定していたからすっかり存在を忘れていたが、このゲームには満腹度というステータスがある。

0になつても活動は出来るけど、全ステータスが一時的に減少してしまうらしい。

なので、現実と同じようにゲームの中でも定期的に食事をとる必要がある。

だけど残念ながら、この部屋に食べ物は無い。

昨日調べた感じでは、水すらも無さそうだった。

もしかするとあの箱の中身が食べ物なのかもしれないが、たとえそうであつても開けられない今のわたしには意味が無い。

つまりわたしは、ただでさえステータスが低いのに、空腹によつて更にそれが減少してしまうのだ。

それも、この部屋で過ごす時間が増える程に、その影響は大きくなるのだろう。

空腹スキルは、そんな空腹によるステータス減少を抑えてくれる
スキルらしい。

しかしこれは使えないネタスキルっぽい。

確かにステータスの減少を抑えてくれてはいるが、その量が微々
たるものすぎて、殆ど意味の無いものと化していた。

ここを出るとき、覚えているのがネタスキルばかりなんてことに
なってなきやいいなあと思いつつ、改めて自分のステータスを確認
する。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

体力：7 / 7 (11 / 11)

魔力：3 / 3 (5 / 5)

満腹度：48%

筋力：3 (5)
知力：3 (5)
耐性：3 (5)
精神：3 (5)
器用：3 (5)
速さ：3 (5)
運：3 (5)

空腹によりステータス30%減少

スキル

睡眠：15（睡眠時回復時間1・5%短縮）

空腹：1（空腹時ステータス0・1%上昇）

まだ一日も経っていないのに、睡眠がいきなり15になっていて少しびっくりしてしまう。

だけどよくよく考えてみれば、昨日から10時間ちょっと寝たし、ゲームの中でわざわざそんなに寝る人もいないだろうから、妥当な上がり方なのかもしない。

そして地味に体力が1上がっているのは、睡眠スキルの恩恵なんだろうけど、15もレベル上がって1だけなんてかなり微妙だと思う。

しかし今さらだけど、ステータスの振り分けももう少しきちんと考えれば良かったと後悔する。

キャラメイクでテンションが上がり、早くプレイしたくて特に何も考えず与えられたポイントを平均的に振つたけれど、こういうゲームではそれは下策だ。

全てが中途半端になってしまいがちになる。

わたしもそれは承知だったが、さうさと遊びたい気持ちを抑えられず、後からある程度は調整出来るだらうタ力をくくっていた。

我ながら、残念である。

せめて運にもうちょっと突っ込んでおけば、まだマシなことになつていたんじやないかなんて考えてしまつ。

そういうえば、と昨日投げ捨てた本に手をやる。

睡眠や空腹のスキルがあるんだから、読書関連のスキルがあつてもおかしくない。

昨日はぱりぱり流し読みしてやめたけど、きちんと読めば何かしらスキルが発現するんじやないだろうか。

どうせ出来ることも少ないし、暇潰しも兼ねて『リアルファンタジーの歩き方』を読むのも悪くない。

床に落ちた本を拾い上げ、ベッドに横になつたまま読み始める。内容はやっぱりヘルプと同じで日新しい情報はなかつたけれど、きちんと読もうとするとき故か文字が滑つてなかなか進められない。たつた5ページ読むのに、1時間近くもかかつてしまつた。

それなりに文章を読むのには慣れている筈なのに、おかしなことがあるもんだと首を捻る。

昨日流し読みした時はそれでもなかつた記憶があるので、と。

やたら時間がかかつたせいか、なんとなく目が疲れた気がして、休憩を挟むため本を横に置く。

するとメニューバーが見覚えのある感じで光っているのに気づいた。

少しだけわくわくしながらメニューを開くと、そこには予想していた通りのスキルが発現していた。

読書：1（読書力増加）
速読：1（読書速度増加）

初めての役立ちそうなスキルの発現に、思わず頬が緩む。
なかなか読み進められなかつたのは、速読スキルが関係したんだ
なあ、とふむふむ頷き納得する。

だけど、読書力の方はいまいちよく分からぬ。

読書速度とは別みたいだし、ぱっとすぐ思い当たるもののが無い。
またこれもネタなのかなあ、とあまり深く考えることはせず、新
しく発現したスキルを育てるべく、再び読書に取りかかつた。

残念ながら、劇的に読むスピードが速くなりはしなかつたけど、
それでも読み進めるうちに少しすつ読みやすくなつていくような気
がした。

ようやく上巻を読み終わった頃には、5時間程経過しており、ステータスもそこそこ上がっていた。

速読は10になり、ついでに知力も7になっていた。

ただ、満腹度が10%になつてステータスが50%減少したから、今の知力は3のままだつたけど。

空腹スキルも上がつてたけど、微々たる量だからあんまり意味をなしていなかつた。

下巻を読む前に、立ち上がり軽くストレッチをする。

肩が凝つたりはしていないけれど、そこは気分だ。

右、左と身体を捻つたついでに、何気なく本棚に目をやると、どこか違和感がある。

何がおかしいんだろ? と近づいてじりじり観察して、やっと気がつく。

背表紙の文字を読める本が、一冊だけ増えていた。

手にとる前に、大きく深呼吸をする。

初めて、確かな糸口を見つけた気がして、どきどきと胸が高鳴る。期待しちゃダメ、ただのヘルプの続きかもしれない。

そう自分にきつゝ言い聞かせて、ゆっくりその文字を田で巡つた。

『スキルあれこれ』と、そこには書いてあった。

ここから出る方法と直接関係はなさそうだけど、ヘルプには無かつた項目だ。

手に取つてパラパラ捲つてみると、どうやらスキルについて詳しく書かれたものだと分かる。

わたしは思わず、本をぎゅっと抱きしめる。

「うふ、うふふふ

るんると浮かれながら、今度はきちんと椅子に座り、机に向かつた。

部屋の真ん中にある箱を開けるのにも、何かスキルが必要なのだろ。

その手掛かりは、きっとこの中にあるはずだ。
部屋の中でわたしが今出来ることは、本を読むことだけなのだから、これが無関係とは考えにくい。

わたしは新しい発見があることを確信し、気合いを入れて表紙を捲つた。

『スキルあれこれ』は、そのタイトル通りスキルについてのあれこれが載っていた。

スキルは基本スキルと隠しスキルの一いつにが分類されるようで、本で紹介されているのは基本スキルの一二百種だけだ。全体の一割にも満たないけれど、しかし取得方法から主な効果まで丁寧に書かれていて、非常に面白い。

暇つぶしで仕方なく読んでいた『リアルファンタジーの歩き方』とは違い、時間を忘れてのめり込むように読んだ。

わたしが既に発現させたスキルも全て載っていて、ネタにしかならないと思っていたけれど、プレイスタイルによってはそこそこ使えるスキルになることも分かった。

効果がよく分からなかつた読書スキルは、この世界で本を読むためには非常に重要なスキルだということも知った。

本ごとにレベルが設定されていて、読書スキルがそのレベルに達しないと、わたしが確認した時のように文字がぼやけて読めなくならしく。

スキルレベルを上げる方法はただ一つ、いろんな本を読むことで、そのレベルで読めるギリギリレベルの本を、間を置いても構わないからきちんと最後まで読みきると一層効果的らしい。

ちなみに『リアルファンタジーの歩き方』は、スキル発現用のレベルの本で、いくら読んでも読書スキルのレベルが1以上に上がることは無いらしいので、下巻は読まないことにする。

種類豊富なスキルに心奪われつつ、ここから出るのに役立ちそうなものを優先的に探してゆく。

しかしこれだとピンとくるものがなかなか見つからない。

時空魔法なんていかにもどこかに転移できそうだけど、それを發現させる方法も育てる方法も今のわたしは持つてない。

基本的に魔法系のスキルを覚えるには、その魔法を生じさせる呪文が必要らしい。

その呪文は、誰かに又聞きするのでは意味を持たず、きちんと魔導書として形を為しているものを読んで覚えないと効力を發揮しないのだとか。

そして更に、上級の魔法になると、隠された条件を満たさないと覚えることが出来ないようだ。

本棚の中に何かしら魔導書が紛れ込んでいるかもしれないけれどまだ読むことが出来ない。

何より時空魔法なんていかにも難しそうなものを覚えられる条件をわたしが満たしているとは到底思えない。

それにわたしの今の魔力はたったの5、空腹のステータス減少の影響を考えたら更に少なく、時空魔法に限らず魔法全般、まともに使える気がしなかった。

他のスキルも検討してみたけれど、発現させる方法がなかつたり、上手い使い方が思い浮かばない。

なので基本に立ち返ることにした。

そもそもわたしは、例の箱を開けるスキルがあることを期待してこの本を読み始めたのだ。

それなのに多岐に渡ったスキルを用にして、一気にここを脱出する方法があるかもしないと期待が膨れあがり、浮かれてそれにばかり気をとられてしまったのだ。

しかし焦つても仕方がない。

あんなにあからさまに怪しい箱が用意されているのだ。

そこから攻めるのがきっと正攻法なんだと思う。

解錠がそれっぽいかな、と思つたけれど、箱に鍵はついていなかつた。

スキルの発現条件は、鍵を開けようとするなどだけじ、まずそれをクリア出来ないのでこれじゃあダメ。

他にも破壊といふなんとも豪快なスキルもあつたけど、スキルレベルが低いうちは無差別に対象を破壊することしか出来ないようなのでこれもダメ。

箱の中身まで破壊されてしまつたら、本末転倒だ。

いやでも、壁を破壊すればここから出られるかもしない。
しばらく破壊のスキルについて考える。

だけどやつぱりこれは駄目だという結論に達する。

この部屋の中に、破壊スキルを使用出来るものは少ない。スキルレベルを上げようとしても、すぐにその方法が無くなってしまう。

修復と併用すればいけるかもしれないけれど、壊しては直しを繰り返していくらものすごく心が荒みそうだ。

部屋の中で一人暴れ回る自分の姿を想像してみる。更に壊したものを持ちまちま修理し、また壊す姿を。非常にシユールな構図で、どう好意的に見たって危ない。破壊は最後の最後、どうしようも無くなつた時の手段として取つておくことにした。

他には他には、と読み進めていくと、ふと気になるスキルが目についた。

解析、というそのスキルは、対象の状態を詳しく分析できるものらしい。

いろんなスキルのことが載つてここの本は面白いけれど、現状を打破出来そうなものが見つからないので、正直ちょっと疲れ始めた。

そんな所で発見したこのスキル、発現の仕方も割と簡単で、何かを深く深く調べるだけでいいらしい。

ちょっと試してみると、非常にお手軽なものだった。

「よし、気分転換しよう」と

立ち上がり箱の前に向かい、前よりもっと念入りに調べる。
しつこく撫で回してみたり、自分の身体と比較して大体の長さを
算出してみたり、抱きついてみたり、頬擦りしてみたり、ついでと
ばかりに舐めて味も確認した。

三十分くらいそうして、本当にこれで合っているのかと疑問に思
い始めた頃、ようやく視界の隅が光った。

やり方が違つていなかつたことに安心しつつ、メニューを開いて
スキルを確認する。

解析：1（低レベルアイテムの名称判明）

うんうん、と頷き、本にもう一度目を通してスキルの使い方を確
認する。

「ええと、手を置いて集中して、“解析”と

それに従い、早速箱に解析をかけてみる。

するとちりんという鈴の音に似た効果音と共に、箱の上にぽわんと文字が浮かび上がった。

「なになに、知力の箱、か。

特性その他もろもろは不明つと」

さすがまだスキルレベル1だけあって、名前以外の詳しいことは何も分からなかつた。

しかし、いかにもそれっぽい名前^前が分かつたのは大きい。名前から考へるに、一定の知力があれば開くような仕組みになつている可能性が高い。

むしろこの名前で知力のステータスが関係していなかつたら、悪質すぎると思う。

幸いにも、速読が知力アップに関係のあるスキルだというのは昨

田のうちに分かっている。

ついでに読書も速読と同系統のスキルだから、レベルを上げれば知力にボーナスがつく可能性がある。

もう何冊か本を読んで、知力を上げれば箱を開けることが出来そうだ。

初日に試した時は開かなかつた。

あの時はおそらく空腹じやなかつた筈で、それでも開けられなかつたのだから、少なくとも6以上の知力が必要で、50%のステータス減少を考慮すると最低でも12までは知力をあげなきゃいけない。

結構な時間がかかりそうだ。

でも、可能性は見えた。

もしこれが全くの見当違いだつたら泣ける。

「よし、がんばるぞーっ！」

大声で氣合いを入ればしりと両手で頬を叩いてから、再び読書を再開する。

速読スキルは、出来るだけ速く読むように意識すると少しだけ上がりやすくなるとあったので、それも意識して。

『スキルあれこれ』は、『リアルファンタジーの歩き方』の一倍ほどの量があつたので、全てを読み終える頃には既に夜の10時を過ぎていた。

このまま徹夜してもいいけれど、せつかく睡眠スキルもあるし寝

ることにする。

何より精神的に疲れてしまった。

「おやすみー

誰にともなく囁き、わたしは終りを告げた。

落ち込むこともある

三日目。
起きてすぐにステータスをチェックする。
昨日は本を置いてすぐに寝てしまったから、確認するのを忘れていた。
本一冊を読んだのだから、割と上がっているに違いない、と期待していたのだけれど、結果はなかなか厳しいものだった。

速読レベルは17、読書レベルは6、そして知力は9。
一冊読んだのに、知力はたったの2しか上がっていないかった。
読書も知力が上がるスキルだということが、知力の上がり方からほぼ確定したのは嬉しいけれど。

半日費やしてこれは、ちょっと切ない。

補助系スキルは、攻撃や創作系に比べてステータス補正が少ないとは『スキルあれこれ』に書いてあつたけど、それでも実際体感するどがつかりしてしまつ。

「甘くない、なあ」

ひとしきり落ち込んでいじけた後、改めてステータス欄を眺める。知力が上がるスキルは微妙だったけれど、睡眠と空腹は順調に上がっていた。

睡眠は20で、空腹は18、ついでに体力と精神が1ずつ上昇している。

読書と睡眠のスキルレベルを取り替えたい。

無駄だと分かりながら、睡眠の横に表示されてる数字を読書のところへ動かそうとしてみたけれど、予想通り何にも起こってはくれなかつた。

「さて、頑張りますか」

ステータス画面を閉じ、ぐぐっと伸びをして立ち上がる。

本棚の前へ行き、じろじろ眺めると、読める本がかなり増えていることが分かる。

進歩したことが実感出来て、それは素直に嬉しい。

新たに読めるよつになつたのは五冊。

そのうち一冊は、タイトルからしてこの世界の神話を集めたものっぽい。

気分転換には良さそうだけど、今すぐ必要な知識では無さそうな

ので後回し。

後はモンスターについてと、ダンジョンについてと、隠しスキルについてのものだ。

少し迷つてから、『ダンジョンを楽しむ100の方法』を手にする。

最初はダンジョンとはどういうものか、から始まり、その歴史がちらちらと書かれている。

読み飛ばしたくなる気持ちを抑え、我慢しながら読むと、やがて具体的なダンジョンの特徴や罠の種類の説明に移っていく。そしてよつやく、わたしが知りたかった内容に辿り着いた。

『隠された部屋について

ダンジョンの中には、普通の方法では行くことが出来ない隠された部屋が存在することがあります。

部屋に入るには、決められた動作を行う必要があり、その動作はそれぞれの部屋によつて違います。

隠された部屋は、宝物庫になつていて、強敵が隠れています。罠がしかけられていたりと、様々な趣向が凝らされています。

共通しているのは、外へ出るにもまた決まった方法をとらねばならないということです。

敵ならば撃破する、宝物庫ならば全ての宝を手にする、など、一定の条件を満たすと、出口が現れます。

また、出口が現れるまでは、部屋では特別な通信以外は全て遮断されます。

なお、途中意識を外へ向けた場合、強制的に部屋から出されます。どうしても行き詰まってしまった場合は、意識を外へ向けてみるのも一つの手ではないでしょうか』

意識を外へ向けるとはおそらく、ログアウトのことだらう。

ああやつぱり、部屋に入つてすぐにログアウトしてくんだったと今さらながらに後悔するけど、もう遅い。

掲示板の類が使えない理由も分かつた。
特別な通信つて何だらう、運営からのお知らせとか、そういうことだらうか。

それならいよいよ、わたしはここを出るまで一人で過ぎたなきやいけないってことになる。

知らなかつたことが分かつたのは非常に有り難いけれど、明かされた情報について考えれば考えるほど落ち込んでいく。

出る方法があるつて分かつただけでも良かつたじやない、と自分を励ましてどうにか本を最後まで読み終え、ぺたりと床に寝転がつた。

「ち～みし～くなんか～な～い～ぞ～つと」

せめてもの景気付けにと、ふんふんと出鱈目の歌を口ずさむ。
気持ちを明るくしようと思つてのことだったのに、部屋に自分の
声が妙に響いて、音が無くなつた時の静けさが逆に寂しさを煽つて
しまう。

VR全般において、安全面から精神には一定以上の負荷がかから
ないようになつていて。

だから耐えられないくらい寂しい訳じやない。

まだ余裕だつてある。

だけどやつぱり、寂しいものは寂しい。

「ら～ら～ら～ら～」

しばりべ意味もなく適当に歌い続けていると、ぴかぴかと視界が
光る。

一体何だとのうのうとメニューを操作すると、また二つ新しい
スキルが発現していた。

歌唱：1（歌の効果発現率0・1%）

作曲：1（作曲力増加）

歌唱は『スキルあれこれ』に載っていたから知っている。
確か、歌で回復したりステータスあげたりと、一見すれば便利そ
うなスキルだつた。

だけど、歌そのものが何かしら効果を持つていないと歌つても意
味が無く、一曲歌い終わらないと効果が発揮されないらしいので、
使い勝手が悪そうだなあと思った記憶がある。

作曲は初めて見るけれど、自分で好きなように歌を作れるスキル
なのだろう。

レベルが上がつたらどうなるのか、いまいちよく分からぬけど。

微妙なスキルばかりどんどん増えてくなあ、と、改めてステータ
ス欄を開いて眺める。

名前：シトロネラ
性別：女

種族：人間

体力：6 / 6 (12 / 12)

魔力：2 / 2 (5 / 5)

満腹度：0 %

筋力：2 (5)

知力：5 (10)

耐性：2 (5)

精神：3 (7)

器用：2 (5)

速さ：2 (5)

運：2 (5)

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：20 (睡眠時回復時間2%短縮)

空腹：23 (空腹時ステータス2.3%上昇)

読書：8 (読書力増加)

速読：20 (読書速度増加)

解析：1 (低レベルアイテムの名称判明)

歌唱：1 (歌の効果発現率0.1%)

作曲：1 (作曲力増加)

三日で七つ、仮にスキルレベルを最大まで上げるとすると、二十九か選べないのに、もう半分くらい埋まりかけている。

仕方ないとはいえ、自分で好んで選んだものが一つも無いのがなんともやるせない。

だけど精神と知力が1ずつ上がっているのを確認して、ちょっとだけ気持ちが明るくなる。

知力は目標まであと少し。

まだ箱を開けるのに必要な知力が6だつて決まった訳じゃないけれど、解析1で名前が分かるくらいだから、そこまでの高レベルアイテムじゃない筈だ。

多く見積もつても10くらいだ、と信じている。

「がんばるぞ～え～いえ～いお～」

歌いながらよつこいらしょと起き上がり、新しい本を選ぶ。スキルを上げるためにも、あれこれ考えすぎて落ち込まないためにも、なるべく歌つているようにしようと思つ。

次に読むのは神話にしきり、あれこれ難しく考えずに楽に読めるものがいい。

新しく読める本はまた増えていたけれど、実用的なものっぽくて気分転換になりそうもない。

また新たな情報を見つけて、がっくり落ち込む可能性もけして低

くないのだから。

先ほど見つけていた二冊のうちのひとつ、『ノーステル神話』と書かれた本を引っ張り出し、床に寝そべって鼻歌を歌いながらページを捲つた。

むかしむかしこの世界は、ではじまる柔らかいお伽噺の語り口調の書き出しに心底ほっとし、しばし神話の世界へと意識を集中させた。

「相変わらず位置は不明でええっす」

ふざけた口調とは裏腹に、落ち込んだ顔で少年はがくっと頃垂れた。

とあるの酒場にて。

和気藹々と笑い声が絶えないその場所の一角で、どんよりと暗い雰囲気で落ち込むグループがいた。

「多分隠し部屋よねえ、それも、厄介なタイプの」

はあ、とため息をついたのは、赤いベリーシャードの大きな胸の美女。

非常に薄い服をまとい、ほぼ下着といつて差し支え無い恰好をし

ているが、褐色の肌によく引き締まつた身体は健康的で、あまりいやらしさはない。

加えて、巨人族の特徴である一メートルを超える体格のおかげで、美しいがそれ以上に恐ろしい印象を周りに与えている。

「あそこの隠し部屋は全部見つかってると想つてたんですがね、この間のアップデートでしょうか。
しかしこれだけ経つても戻つて来ないということは、別の可能性もあるかもしません」

迫力美女に続いてため息をついたのは、氣の弱そうな、エルフの青年。

全体的に線が細く、ともすれば女かと見紛つほどの優しげな風貌をしていた。

絹のような銀髪が、俯いた顔にさらさらと幾筋も零れ、物憂げな様子を更に演出している。

「あーほんとのほんとに一見さんぽかつたよねーどうしようかとフレンドもないよねえ、全然状況がわからんなあーい！」

一気にまくし立てたのは、最初の少年。

非常に小さく、床に届かない足を可愛らしくぶらぶらさせている。背中には虫のような羽が生えており、少年がフェアリーであることを示している。

幼子特有のあどけない風貌をしているが、思い悩む様子は大人のそれだった。

「まじ運が悪いよなあ、いや俺らが悪いんだけど、分かってるけど、でもやっぱり運、悪いよなあまじで」

天を仰いだまま呟いたのは黒髪の青年。

他の面々に比べたら、非常に地味で特徴が無い。

平均的な日本人の青年の風貌である。

あえて特徴をあげるとすれば、眼鏡をかけていることくらいだろうか。

彼らこそ、プレイヤー・シトロネラを拉致しダンジョンに放置した本人たちとその仲間であり、ギルド『愉快犯』のメンバーである。

ギルド『愉快犯』とは、その名の通り、プレイヤーノンプレイヤー問わず、様々なイタズラをしかけて遊ぶことを目的とした集団だ。例えば林檎の森の木を全て蜜柑の木に植え替えるとか、低レベルの狩り場に見た目だけ強そうなゴーレムを作つて放り込むとか、そんなくだらない悪戯を嬉々として行うのが彼ら、『愉快犯』の活動。彼らの行動は積極的に開示されており、遊びのためにリアルマネーをガンガンつぎ込むため、運営からは存在を黙認されていた。

何より、『禍根は残さない』というのがギルドの基本理念であり、彼らの悪戯の被害にあつたプレイヤーにはその被害を上回る補償が為されるので、プレイヤーの間では一種の娛樂イベントとして受け入れられていた。

新人プレイヤーの拉致は、そんな彼らの遊びの一つだつた。

何のスキルも持つていかない新人プレイヤーを適当なダンジョンに放り込み、どれくらいの時間で街に戻つてくるか、賭ける。

一般プレイヤーからも広く賭けの参加者を募集し、大々的に行う。公式ページにも攻略ページにも、イベントとして記載されており、回避方法も併せて載つているため、全く知らずターゲットにされる新人プレイヤーは極めて少ない。

賭けが終了した後は、新人プレイヤーに対して至れり尽くせりのフォローが為されるので、キャラの育成に利用されることが多く、また、全ての新人プレイヤーに対して行われる訳では無いので、攻略ページには“このイベントに遭遇出来たらラッキー”とまで書かれている。

この遊びが一番他プレイヤーに対する被害が大きく悪質なものなのだが、さほど大きなトラブルも起こらなかつたので、いつの間にか定着してしまつていた。

だから、油断していたといえどもそうなる。

彼らはまさか、こんな事態になるとは想像もしていなかつた。

新人プレイヤーのシトロネラが一日経つても、一日経つても街へ戻つて来ないことで、ギルドへの風当たりは一気に強くなつた。大々的に賭けを行なつていたため、事情が他のプレイヤー達に広まるのは一瞬だつた。

なんとなく囁き立ててゐる輩はそのうち静かになるだらうが、眞剣に腹をたててゐる人間はそうはいかない。

特に以前からこのイベントだけはやめたほうが良いと忠告していいた大手ギルドのトップが、その腹を立ててゐる面子の中には非常に痛かつた。

ギルドは、嘗て無い危機に立たされてゐる。

そして、彼ら自身も大きなショックを受けていた。
所詮悪ふざけ、許される範囲での遊びの筈だつた。
なのに、何も知らない新人プレイヤーを最悪の状況に送り込んでしまつてゐる。

彼らはけして悪人ではない。

悪戯をして遊ぶけれど、他人を心底困らせる絶望の底に突き落として喜ぶような趣味は無かつた。

それ故に、罪悪感に苛まれている。

「ちやんと、じゅぢゅんのやつ」と、聞いてねばよかつた

しょんぼり呟いたのは、少年。

「おちやんと」言つるのは彼らに忠告を繰り返していた大手ギルドのトップのことで、少年は特に彼になついていた。

今回のことでのフレンドリストから少年を含む『愉快犯』のメンバーの名前は削除されており、その事実も少年を酷く落ち込ませていた。

他のメンバーもその言葉に同意し、更に深く頃垂れる。

「今さら後悔しても遅いです。

どうにか、彼女を助ける方法を考えましょ」

エルフの青年が弱々しく提案し、ぼそぼそと弱々しい声で、思いつく方法をお互いに出し合っていく。

しかし、彼らはなまじ長くリアルファンタジーをプレイしてきたからこそ、分かっているのだ。

彼女、シトロネラからの働きかけが無いこと、ビリジョウも無っことを。

フレンドリストに登録している相手なり、隠し部屋のような通信が出来ない場所にいても連絡を取り合える。

そうすれば、隠し部屋攻略のアドバイスも出来る。
しかし、所在地の分からぬ相手にフレンド申請を送ること出来ない。

逆なら可能なのだが、シトロネラは彼らの名前を知らない。
スキルで名前もステータスも全て隠した状態で、彼女を拐つたのだから。

「とりあえず、あのダンジョンの探索続けるしか無いな」

はあ、とため息をついて、地味な青年が席を立つと、他の三人もそれに続いて店を出た。

皆無言のまま、街の外へと向かう。

途中、ちくちくと視線が突き刺さる。じそこそと交わされる言葉に好意的なもの少なく、ただでさえ沈んだ彼らの気持ちは更に落ちていく。

その中に、ひときわ厳しい顔をした男がいた。

視線に彼らが気づくと、くるりと踵を返して立ち去ってしまう。

「いやがや……」

少年はその背中をじっと見つめ、ぐっと拳を握りしめる。
彼の人こそが、少年が一番嫌われたくない相手だった。

少年は唇を噛み、何かに堪えるような表情を見せた後、キッと正面を見つめ、足早に歩を進める。

急に歩くスピードを早めた少年に、仲間達は慌ててついていく。

「じつったよ」

追いついた黒髪の青年が言葉少なめに問うと、少年が自嘲気味に微笑んでみせた。

「ボクね、ぜつたいに、いおぢやんに許してもいいの。
また仕方ないなって笑つてもらひの。
でも今のまんまじやだめなの、あの子助けなきゃ、いおぢやん許
してくんない」

だから、と先を続けよつとした少年の言葉を遮り、黒髪の青年が
にこりと笑つてぐつと親指を立てた。

「助けようぜ、俺たちで。
課金アイテムもガンガン突つ込むか。
いつそあのダンジョンの改造すつか？」

な、と軽薄に笑つてみせた青年に、強ばっていた少年の顔が微か

に緩む。

「もひ、ちゅうとは眞面目にやりなさい」

「本当に、レオン、貴方つて人は」

遅れて二人に追いついた美女とエルフの青年が呆れたように、しかしどこかほつとしたように黒髪の青年をたしなめる。さつきまで彼らを覆っていた暗い雰囲気は払拭され、各自に笑顔が戻りつつあった。

「おら、ダンジョンまで競争だつ！」

一番にシトロネラちゃん見つけたやつは、このトリップイベント終わるまで王様待遇なつ！」

とじめとばかりに黒髪の青年が発破をかけると、三人は苦笑いしながらも嬉しそうに地面をかけてゆく。

青年はそれを満足気に見送りながら、自身もその後を追つた。

ギルド『愉快犯』、彼らはどこまでも子供である。
都合の悪いことは忘れやすく、目の前の楽しいことに夢中になりやすい。

確かに今彼らは深く反省している。

しかしそれがいつまで持続するかは定かでない。

少年が『こおちゃん』と呼ぶ存在のことが無ければ、おそらくもつと早く立ち直っていたことだろう。それが良いか悪いかは、分からぬ。

何せ彼らは、いつまでも大人になれない子供であるのだから。

『ノーステル神話』は、ゲームの中のアイテムだとは思えないほど充実した内容で、すくなく面白かった。

優しげな語り口調とは裏腹に中身はなかなかハードで、とっても浮気性な神サトシがあちこちで女神様に手をつけ、ドロドロの人間関係ならぬ神様関係を展開していく。

サトシが女神様に引っこ抜かれた髪や、引っ掛けられて流れた血が、この世界の元になったとされていて、かなりシユールだった。

神話の部分を差し引けば、普通に小説として売られていそうなくらい表現や言い回しがやたらと凝っていて、言葉の響きも心地よかつた。

あまりに面白かったので、休憩を挟むこともなく一気に読み終えてしまつた。

「サトシじつじょつもないな」

ぱたんと本を閉じながら思わず呟き、ふうっと大きく息を吐く。物語の世界からなかなか抜け出せず、しばしその余韻に浸つてい

たわたしは、せっかくだからこの感想を歌にしてみよつなんて、普通なら考えないことを思い付いてしまった。

誰も聞く人がいないからこそその暴挙である。

「サ～～トシはダメ男～
刺され～ても殴られ～ても～
学～習しない～
いつも～同じじ～ことの～
く～りかえし～」

こんな感じで、ひとしきり歌つて満足した後、メニューバーが今までとは違った様子で光っているのに気付いた。

スキルを覚えた時は青白かったのに、今はほんのり橙に光っている。

ふんふんと即興の歌の続きを口ずさみながらステータス画面を開くと、新しくページが増えている。

「なになに、歌？」

歌一覧、と銘打たれたそのページには、サトシの歌との文字が一行だけ浮かんでいる。

歌一覧

サトシの歌（効果・無し）

深く考えずぽちんとその文字を触ると、わざと適当に歌った曲が歌詞つきの五線譜で表示される。
ついにほわたしの声でその歌が再生されてしまった。

「うわわわわ、恥ずかしい」

慌てて止めようとしたけれど、ビックり停止ボタンはついていない
いらっしゃい。

歌詞も音程も出鱈田のやつの歌を羞恥に悶えながらもなんとか最後

まで聞き終え、深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

とんでも罰ゲームだ。

現実の自分の声のままだつたのも痛い。

キャラクター・メイクの時に声を変えることも出来たのだが、喋る度に違和感があるだろうと手を加えなかつたのが仇となつた。

しつかり自分の声を録音した時と同じように聴こえ、無駄に凝つた作りにげんなりしてしまつ。

しかし、一応新しく分かつたこともあつた。

作曲は、ある程度長く歌えば実行されるらしい。

それがどんなにくだらなくてつまらなくて、取るに足らないものであつても、だ。

スキルによつては、固有の技を覚えるものや自分でスキルに準じた技を創れるものがあると、『スキルあれこれ』に確か書いてあつた。

それが、今の歌みたいなものなのだろう。

本を読んだ時にはふーんと流していただけれど、実際体験してみるといろいろ気になることが出てくる。

例えば、元になつたスキルごとにページが出てくるのか、とか、

歌は消せるのか、とか。

消せないと非常に困る。

無限に覚えられることは無いだろうから、何の効果も無い歌に場所を取られたくないし、何よりうつかりあの歌を再生してしまったらまた羞恥に耐えねばならない。

残念ながら、ぱっと見ただけでは消し方は分からなかった。

五線譜を表示させて、あちらこちら弄つてみれば或いはその方法が見つかるかもしれないが、あの歌をもう一度聴くのは勘弁してほしい。

確実に消せる方法が見つかるまでサトシの歌はすっぱり忘れることにしよう。

そう固く決意したわたしは、気を取り直して改めて曲を作つてみることにした。

せっかくだから、きちんと効果のついたものを作りたい。

「効果に関係ありそなのは、歌詞とか気持ちとかかなあ

サトシの歌は、歌詞も適当で特に大した気持ちも込めていなかつたので、どちらが関係するか判断がつかない。

物は試しどばかりに、まずはお腹いっぱい何か食べたい気持ちを

込めて、歌詞をつけずに「ららら～」と歌い続ける。

そして十分ほど歌い続け、そろそろ飽きてきたころようやく開きっぱなしだった歌一覧のページに文字が浮かび上がった。

ららら（効果：満腹度回復0・1%）

効果はついたけれど、かなり微妙だ。

十分近くかけて歌つてこれじゃあ使えない。

しかもこれに、歌唱スキルの補正が入つてしまつことを考えると、

効果は更に落ちてしまう。

歌つている間に減少する満腹度の割合の方が多そうだ。

どう考へてもこれは使えない。

次は無心で、お腹いっぱい食べたいとの内容を歌いあげるつもりだつたけど、いろんな食べ物の名前を挙げていくうちについ気持ちが入つてしまい、結果かなり切実に食事がしたい想いがこもった歌が出来てしまった。

歌詞付きだと、一分くらい歌つた時点で歌は完成したようで、先ほどと同じように画面に文字が浮かんできた。

やっぱりちゃんと意味のある歌詞をつけた方がいいみたいだ。

だけどその効果の内容を確認して、わたしはがくりと肩を落とし

た。

食べ物の歌（効果：満腹度10%減少）

期待したのと全く逆の効果を持つ歌が出来上がってしまった。
気持ちは殆どおんなじだったはずだから、歌詞が良くなかったのか。

その後も何回か言葉を変えて歌つてみたけれど、満腹度が減少する歌しか出来上がりず、五曲作ったところで諦める。

もしかしたら、今の満腹度も関係あるのかもしれない。

作詞とはなかなか奥の深いスキルのようだ。

うどんの作り方、やら、お米は偉大、やら、食べ物ばかりのタイトルがついた歌が並ぶページをそつと閉じる。

消し方が分かつたら、すぐに全部消し去ってしまおう。

氣を取り直して、ステータスを確認すると読書が12、速読が23、歌唱が12、作曲が10、空腹が28に上がり、知力が1、器用が2上がっていた。

本は一冊しか読んでいないのに、読書が思いの外上がっていて驚く。

ギリギリのレベルの本でもなかつたし、『ダンジョンを歩く10

0の方法』と分量は同じくらいだったのに、レベルの上がり方が全く違う。

何が違つたんだろうと思ひ返してみても、夢中になつたかそうでないか、くらいしか違いが思いつかない。

残念ながら全ての本に夢中になるのは無理そつだから、ちょっとしたサプライズくらいに受け止めておく。

「よし、知力あと一つ！」

そんなことよりも重要なのはこっちだ。

ステータス画面の知力の部分を何度も指で撫で、11と表示された数字が見間違いで無いことを確認し、たまらずにやにや笑う。

あと一冊読めば、当面の目標は達成出来そうだ。

すぐに取りかかるか少し迷つたけど、もう夜の九時を回っていたので、今日は寝ることにした。

眠気を感じないのであえて眠る必要は無いのかもしれない。
しかしながらさえ時間の経過すら感じられない、何の変化も無い毎日なのだから、きちんと寝る習慣くらいつけてないと、そのうち参つてしまふ気がする。

いくらある程度精神が保証された世界とはいえ、わざわざ自分から負荷を増やしたくない。

「待つてうよ箱め、おやすみつー！」

ちょっと高めのテンションでびしっと箱に人差し指をつきつけてからベッドに横になり、上機嫌のまま三日目を終えた。

切欠は斜め上から

さて四田目。

わたしは上機嫌なまま目覚め、意氣揚々と本棚へ向かい、じつくりと表紙に書かれたタイトルを吟味する。

もう一つの神話、『サウスチリア神話』も気になるけれど、新しく読めるようになった本にも惹かれるものがある。

どっちにしようかしばらく悩んでから、『或る魔法使いの一生』と書かれた方を手にとる。

タイトルとは裏腹に、かなり薄めの本で、神話の半分も無い。これなら短い時間でスキルレベルを上げることが出来そうだ。

わたしの気持ちは既に箱へと向かっていて、初めは文章が頭に入つて来なかつた。

しかし神話ほどでは無いにせよ、自伝形式の物語はなかなかに面白く、気づけば話に引き込まれていた。

「やー、アステイかつこいいなあ

最後のページを読み終え、しばし物語の世界に想いを馳せる。主人公のアステイは魔法を駆使して様々な難問を華麗に解決していく。

魔法いいなあ、使いたいなあとうつかり思つてしまふくらい、魔法の有用性が強調されていて、わたしはすっかり魅了されてしまう。途中に初步の火の攻撃魔法のスペルまで載せられていたので、自伝という形をとっているけれど、これが魔法スキルを覚えるのに必要な魔導書の一種なのかもしれない。

もしここが外なら、この魔法を試せるのになと残念に思ったところで、はたと我にかえる。

「知力、知力つ」

「つきうきしながらステータス画面を開き、読書が14、速読が25、そして知力が12になつているのを確認した。

「やつたあ！」

すぐさま箱に駆け寄り、すーはーと深呼吸してから、おれるおれる蓋に手をかける。

ゆっくり手に力を込めていくと、蓋は徐々にずれてゆき、ついにその中身が白日の元に晒される……！

なんてことはなかつた。

いくら力を入れてみても蓋はぴくりとも動いてくれず、憎らしいほどに頑なに、わたしに反抗した。

何度か試して、どうやっても無理そつだと理解し、がっくり膝をついて敗北感にうちひしがれる。

多く見積もつて10くらいはいるだろつとは確かに思っていた。けれど、あればいけるに違いないと根拠もなく確信していたのも事実だった。

それゆえに、この結果は痛い。

あまりのショックで、知らず知らず口から箱に対する恨み辛みが漏れていたらしい。

しばらくするとメニューバーが橙色に光った。

ほぼ無意識のうちにメニューを開き、呆けたまま内容を確認する。

箱の馬鹿野郎（効果：特定のアイテムの耐性劣化）

歌一覧に加わったそれを見て、一気に頭がしゃきんとする。
もしかしてこれは、もしかするかもしれない。

もう一度、ゆっくり箱に触れる。

過度な期待はせず、指で軽くちょいちょいとつづく、その程度だ。
何の力も込めず、ただ単に触っただけ。

なのにそれだけで、あんなにも固く閉じられ、どれだけ力をこめてもびくともしなかつた箱の蓋が、ぱかりと口を開いた。

拍子抜けするくらいあつさりとした、今までの頑なさが嘘だったかのような様に、わたしは自分の目を疑う。

慌てて「ゴシゴシ」田を擦り、一日後ろを向いて深呼吸してから、ゆっくり振り返りその姿を確認する。
やっぱり、やけに開いている。

「ああああああーっ！」

たまらず奇声をあげて、部屋の中をびょんびょん飛び回る。きつと端から見たらものすごくおかしい人だつたと思つ。後から思い返したら、恥ずかしくてのたうち回るとも思つ。しかし誰も居ないこの部屋で、わたしは溢れる喜びを抑えられることが出来ず、感情のままに暴れ回つた。

どれくらいいただり。

ひとしきり叫んでよつやく我に返り、やつれまでの醜態など無かつたよつて、素知らぬ顔で箱に向き合つ。中にはわたしが期待していたような、一発で脱出可能な便利アイテムは入つていなかつた。しかしもう、それくらいでは氣を落とさない。この材料が必ず、外へ出る方法へと繋がつてゐる筈なのだから。

「えーと、歯車に糸に針金、それに木材に金属？
何かの材料かなあ」

中身を一つずつ丁寧に確認していく。

せつかくなので解析も使って、念入りに。

途中からは、名前その他にカテゴリも表示されるようになり、予想と違わず全てがそれだけでは使えない材料に分類されることが判明した。

箱についていたように、知力の、なんて特別な言葉がつくものは無く、どれも手にとることが出来たので、わたしでも扱うことは出来そうだ。

「問題は、どう使つか、だよねえ」

つづむと頭を捻り、『スキルあれこれ』を開きながら適当なスキルが無いか探ししていく。

細工、機械、改造。

それっぽいものはすぐに見つかっただけれど、肝心の発現方法がどれも教本を元に何かを作らなければならない。

このままでは埒が明かないと思い、本棚へ向かう。

箱の中身を使わなければいけないのなら、どこかにきっと、そのスキルを発現させるための教本があるはずだ。

新しく読めるようになったものも併せて、一つ一つ背表紙に書かれたタイトルを確かめていく。

しかし、すぐにそれと判るようなものは、無い。

まだ読めない中にあるのか、それともこの中に隠れているのか。

どちらにしろ、どれかを読まないことは始まらない。

タイトルから中身が想像出来ないものを五冊ほど選び、机へと向かう。

まずは本命の『知的好奇心』からだ。

一時間かけて半分ほど読み進め、どうやら全く関係無さそうだと判断する。

しかし、細かい裏技や意外に知られていない機能について書かれていたので、最後まで読み進めることにした。

途中、閉じた部屋からでもフレンド同士ならコンタクトが取れて、中からならフレンド申請することも可能だったことを知り、わたしはぐぐぐと唇を噛んで悔しがった。

名前と相手の姿を知っていることが申請の条件だと知つてれば、ログインしてすぐ誰か一人くらい、チェックしていたのに。

浚つた人の名前すら覚えていないのは、なんとも情けない。

他にも意外なメニューの活用法や、宿屋の有効利用などが載つていて、知らない事実にふんふんと感心しながら先に進み、一時間弱で残りの半分を読み終えた。

なかなか有意義だった。

先ほどのように内容を反芻することはせずに、直ぐ気持ちを切り替えて本棚へ向かい、新しく読める本で良さそうなものが増えているかを確認する。

しかし残念ながら、神話が一つ増えただけだった。

気を取り直して椅子に座り、読書を再開する。

次は『奇人の一生』だ。

これは『或る魔法使いの一生』と同じく、伝記の形を取った何かのスキル発現用のものかもしれない。

期待しながら丁寧に文字を追っていく。

主人公はがらくた作りを趣味とする青年で、これはいけるかもしないと、わくわくしながら先に進む。

本の中ではがらくた扱いされているけど、話が進むにつれてどうやらそれは所謂からくりのことを指していることが読み取れた。

いよいよ当たりの予感がしたが、いつまで経っても具体的な作り方やそれらしい設計図は出てこない。

その代わり、何度も執拗に『がらくた文庫』といつ言葉が登場する。

主人公が自分のからくりの技を記した秘伝書のことらしいが、最

後まで秘伝書と略されることではなく、『がらくた文庫』と表現されていた。

物語の終わりが「がらくた文庫に我が未来を託す」との一文で締められていたため、わたしは確信を持って本棚へと急いだ。

本棚に収められた本の中、「がらくた文庫」という名前を見た記憶はない。

わたしもそうあつわり見つかるなんて甘いことはもう考へていない。

しかし確かごみがどうとかいうタイトルならあつたはずだ。

『ノーステル神話』と同じ時に読めるようになった本の中に、紛れていたような記憶がある。

上から順に探していく、真ん中くらいで目的のものを見つけた。

『じみ図鑑』、そうだ、これだ。

どう考へても役に立たなさそうなタイトルだし、やたらと分厚かつたので完全にスルーしていた。

これだからくた文庫いいなあ、と思いながらぱらぱら捲ると、いかにもからくりっぽい絵が沢山目に飛び込んできた。

一度目で当たりを引いたことに非常に機嫌を良くして、ふんふんと鼻歌を歌いながら、まずは基本的な作り方を学んでいく。さすがに現実と同じように、一から十まで組み上げねばならないということは無かった。

作りたいものの材料を選び決まった形に手順通りに並べて、具体的な完成品を思い浮かべつつえいやと力を込めると、自動的に出来

上がるらしい。

ちなみにレベルが上がると簡単な仕組みのものは、手順を省略出来るのだとか。

ついでに、器用の値が出来上がりの質に関係あるよつだ。また失敗することも多々あり、材料が無くなったり、全く違うものが出来ることもあるようだ。

なかなか面倒くさそうなスキルである。

今まで偶然手に入れて来たのは、ステータスに左右されないものばかりだったのに。

気付いて無いだけで、ほんとは全部に何かしら関わってるのかもしけないけれど。

しかも成功率が存在するときた。

いろいろな要素が関係していて、面倒そうである。

順調にみえたけれど、やっぱり簡単には行かないようだ。

なにしろわたしのステータスは、ほぼ半分にまで落ちている。

ちょびちょび空腹スキルは上がってきているけど、まだまだ焼け石に水状態。

これで質が良いものを作るのは難しいだろう。

しかし落ち込む前に、とりあえず一番簡単そうなかじくつをひとつ作つてみよう。

うじうじしていたつて何にもならないのだから。

「歯車一個を並べて、ぐるっと糸で囲む」と

とても簡単な手順で出来上るのは、大きな歯車というもの。直径が普通の歯車の一倍の大きさらしいので、完成形も想像やすい。

あとは力を込めれば終わりだが、その方法がよく分からない。出来上がれー出来上がれーと念を送つても、撫でてみても、変化が現れない。

もう一度、図鑑の作り方の基本の部分を読み返す。

「あ、名前を言わなきゃ駄目だった」

うつかりその部分を見逃していた。

気を取り直して、改めて大きな歯車を思い浮かべ、ゆっくりその名前を口にした。

するとキラキラした光の粒が材料を取り囲み、ちかりちかりと明滅する。

何度も繰り返しながら光は強く大きくなり、やがて材料が完全に

光に包まれ、再び姿を見せた時には変化していた。

一応、成功はした。

だけど出来はあまり良くない。

一目でわかるくらい、歪んでいる。

「ま、最初はこんなものでしょ」

大きな歯車を取り、しげしげ眺める。

解析してみると、これも材料であることが分かった。

明らかに質が良くないうれど、ちゃんと使えるのだろうか。

なんとなくだが、材料の質も成功率に関わってきそうな気がする。

大体のスキルの使い方は分かつたので、再び読書に戻る。
今すぐ役に立ちそうな道具が無いか、丁寧に一つ一つ検討していく。

お茶汲み人形や矢打ち人形やのようないかにもからくりっぽいものから、バイクやテレビみたいなもの、更に用途がさっぱり分から

く。

ないものまで有り、その一貫性の無さに妙に関心しながら、気になつたページに箱の中にあつた糸を挟んでいく。

直接部屋を脱出するための転送装置のようなものは無かつたけれど、役立ちそうなものは幾つか見つかった。

その中でも一番欲しいのは、『万能アンテナ』だ。

なんでもそれを設置すると、いかなる場所でもあらゆる連絡手段が使用可能になり、情報媒体へも繋がるようになるとか。

これが出来れば掲示板を使える。

そしたらきっと何か分かるだろうし、何より沢山の人と交流することが出来る。

もう随分人恋しくなつていたわたしは、絶対にこれを完成させようと固く決意する。

しかし一きなりこれに取りかかることは出来ない。

手順が結構複雑なので、今のわたしじやスキルレベルが足りなくて成功率が低そうだし、材料も幾つか作らなきゃならない。

まずは質の悪い大きな歯車を材料に使つた場合、どうなるのか確認することから始めよう。

急がば回れである。

からくりの歌を歌いながら、大きな歯車と普通の歯車を重ね、金属の薄い板でそれを挟む。

そして針金でぐるぐると板を縛り、仕上げに名前を口にする。

「さあ出来上がり、雑記帳つ！」

ノリでそれっぽく叫ぶと、先ほどと同じように光の粒が現れ、割とちゃんとした、薄いノートが現れる。

名前の前に余計なことを喋つても大丈夫らしい。

大きな歯車に続いてスキルが成功したことに気分をよくして、完成したノートを手に取り開いてみた。

見た目はただのノートだけど、開いてみるとキーボードのついたノート型のパソコンになっていることが分かる。

画面部分には、最初から文書作成のソフトっぽいものが表示されており、それ以外の機能はついてないみたいだった。

試しに力チカチ適当な文章を打つてみると、きちんと画面に表示される。

しかし、いかにも使えそうな「ペー やら 図の作成やら 画像表示のボタンは、存在するものの選択することが出来ない。さらには打ち込んだ文章を消すことも出来なかつた。

多分これは、出来が悪いってことだろ？。

「んー、これは失敗、かなあ」

メモ帳代わりくらいには使えそうだが、それくいにしかならなさ
そうだ。

スキルレベルが上がつてからまた、きちんと作り直す」とこじよ
う。

おそらくだが、材料もちゃんとした物を使った方が良さそうだ。

「あ、そうだ、アイテム収納試してみよう」

きつとMMOをプレイしたらかなり最初に実行するだろ？アイテム
に関する操作を、わたしはまだ行なったことがなかった。

VR MMOだとどんな風になるのかな、とわくわくしながら、ヘ
ルプで学んだアイテムのしまい方を実行する。

方法はいたつて簡単で、しまいたい物を手に取つて、インと呑く
だけ。

すると手にしたノートはショット姿を消した。

いかにもゲームっぽくて、おおおどじわじわ感動する。

アイテムの取り出し方は一種類あって、メニューのアイテム欄に載っている出したいものの名前を触るか、そのアイテムの名前の頭にアウトとつけて呼ぶと、目の前にそのアイテムが浮かんでくるらしい。

まずはアイテム欄を使う方法を試し、実際目の前にふわりとノートが浮かんできたのを確認して、わたしはすっかり興奮してしまつ。ゲームの中で過ごして、早や四日。

その間、さつきのからくりを作った時のエフェクト以外、あまりゲーム特有の非現実的な現象を体験していない。

いや、この状況はとても非現実的だけも。

そうじやなく、思い通り自分で操れるというのが、重要なのだ。

そんな理由もあって、自在に出し入れ出来ることにすっかり魅了されてしまったわたしは、結局一時間ほどじつじつ同じ動作を繰り返してしまった。

アイテムを出し入れして遊んでいたせいで、すっかり時間をつぶしてしまった。

気づけば夜の九時を過ぎていて、もうひとつ何かしら簡単なものでも作ってみようか、それとももう寝ようかと迷う。ステータスでも眺めながらのんびり考えようとメニューを開くと、スキルが二つ発現していた。

一つは機巧と表示されていた。

こちらは予定通りで特に驚くことは無かつたけれど、もう一つはいつの間に発現したのか全く覚えの無いもので、わたしは首を傾げてしまう。

「自然回復かあ、うーん、回復するようなこと、したつけ

体力と魔力が減った場合、薬で即座に回復させることも出来るが、時間がかかるつても構わないならば放っておけばそのうち回復するようになつていて、ヘルプで確認した覚えがある。

自然回復とは多分そのことを指しているのだろうけど、体力と魔力が減る行動をとつた記憶が無い。

既にどちらも満タンになつてしまつてるので、どっちが回復したかすら分からぬ。

「もしかしたら機巧スキルのせいかな」

考えても分からないので、ステータスを表示させたまま、もう一度大きな歯車を作つてみることにした。

材料を並べる時点では、特に変化は無い。しかしその名前を呟いた瞬間、わたしの魔力は0になつてしまつた。

力を込めるとは魔力のことを指していたのかと納得しながら、さつきより心持ち円に近づいた歯車を手に取り、頬にそれをあてながらしばし考え込んだ。

からくり作りにどうやら魔力が必要らしいことはこれで分かつた。しかしどれくらい必要なのかはよくわからない。

質が悪いながら雑記帳も作れたことから、単純にからくり作りに

必要魔力はどれも一律で2だと推測することは出来る。

しかし全く根拠がないし、なんとなくだがそうではない気がするのだ。

これも根拠は無く勘でしか無いのだが、魔力の量が完成品の質に関係している気がしてならない。

魔力をいっぱい使った方が質が良くなるんだつたら困るなあと思いつつ、ふと頭を掠めるものがあつて、大きな歯車を机に置いて図鑑を開く。

「あつたあつた、魔力測定器、これだ」

図鑑の初めの辺り、材料以外では一番簡単に作れるものに魔力測定器があつた。

その名前から自分の全魔力か残存魔力のどちらか測れるものだろうと推測して、ステータス画面で確認出来るのになんてこんなものがあるんだろう、と不思議に思いつつも流した記憶がある。しかしそうじゃなくてこれは、使用中の魔力を測定出来るものなんじやないだろうか。

最初の方に載っているのも、機巧スキルに必要だからだと考えるとしてくりする。

「今日はこれ作って終わりにじよつと」

図鑑に従い材料を箱の中から取り出し、歯車を五つ重ねて真ん中に針金を通す。

手順も非常に簡単で、名前を呼べば失敗することもなくあっさりと魔力測定器は出来上がった。

魔力測定器という名前だが、見た目はただの手袋で、人差し指の先には小さな穴が開いている。

右手に手袋をはめてみるが、特にこれといった変化は起こらない。

「そういうや魔力の出し方ってどうやるんだろ」

基本的なことが分からぬことにがっかりしたが、すぐに気を取り直し、人差し指の先端に穴が開いているから、そこが何か関係してるのであらうとアタリをつけて、むむむと意識を指先の一点に集中させる。

しかし何の反応も無いので、肩から指先へ向けて力が流れているイメージもプラスしてみた。

するといきなりぞわっと手の平がむず痒くなり、人差し指がほんのり暖かくなる。

それと同時に手袋の甲の部分に漢数字で一と表示された。

「うわあ、やめやめるー」

ぱたぱたと手を振つて、あまり心地のよくなない感触を逃がす。これを魔力を扱つ度に体感しなければならぬのは、きついものがある。

出来るなりば一度と試したくはなかつたけれど、生憎とやう我が家を言える状況では無かつたことを思ひ出し、我慢してもう一度指先に集中した。

自分の意思で魔力を出せるとは分かつたから、次は一ずつ分割して出せるかを確認するためだ。
わつわよりも非常にゆつくつ、さらに液体じゃなく小さな粒々が一つずつ転がるイメージで力の流れを意識する。

相変わらずむすむすと気持ちの良くなない感触が手の平全体を這いついたが、一度田よりは随分マシになつてこる気がした。
この調子で慣れていくのなら、そのつかはにならなくなるだろうと少しだけほつとある。

「あ、一だ」

試みは上手くいったようだ。

止め方が分からなかつたので、表示はすぐ一へと変化してしまつたけれど、最初は確かに一と出ていた。

ついでに新しいスキル、魔力操作も発現した。

名前の通り魔力を思い通り扱うのに必要なスキルなのだろう。しかしせっかくスキルが発現したというのに、あまり喜べなかつた。

魔力操作がスキルじゃなくて、誰でも出来る基本操作だつたら良かったのにといつてい思つてしまつ。

スキルになつてしまつてゐる以上、魔力が増えたところですぐに自在に操れるという訳にもいかないのだろう。

「あーもひ、やる」といつぱいだなあ

はあ、とため息をついて手袋を外し、机の上に放り投げた。
からくり作りに魔力操作の練習は勿論、読んでない本の中に魔力が上がるタイプのスキルが発現するものが無いかも探した方がいいだろう。

さすがに魔力2のままでは厳しいものがある。

もう少し無いと、からくり作りに必要な魔力が幾つか検証することが出来ない。

目標が無いよりはある方がいいけれど、一気にやらなければなら

ない事が増えたせいで、臺ぶよりも先に厄介だと思つてしまつた。
一つのことだけ頑張ればいいなら簡単なのにな、なんて不満もわ
いてくる。

きつとこんな風に感じるのは、頭が疲れているからに違いない。
こんな状態で続けても良い結果は生まれなさうなので、今日は
もう寝てしまうことにした。

ベッドにじろりと横になり、改めてステータスを見直す。

名前：シトロネラ
性別：女
種族：人間

体力：6 / 6 (12 / 12)
魔力：2 / 2 (5 / 5)

満腹度：0 %

筋力：2 (5)
知力：8 (15)
耐性：2 (5)
精神：4 (8)
器用：6 (12)

速さ：2（5）

運：2（5）

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：26（睡眠時回復時間2・6%短縮）

空腹：39（空腹時ステータス3・9%上昇）

読書：22（読書力増加）

速読：30（読書速度増加）

解析：8（低レベルアイテムの情報判明）

歌唱：18（歌の効果発現率0・1%）

作曲：14（作曲力増加）

機巧：8（からくり作成）

自然回復：1（自然回復速度増加）

魔力操作：1（魔力操作精度増加）

知力と器用が随分上がっているのが分かり、その数字のおかげで少しだけやる気が戻ってくる。

最初はもつと信じられないくらい低かったのだ。

それを考えればずいぶん進歩したものだと思う。

目に見えて分かる結果はモチベーションの維持のためにも重要なとしみじみ思い、雑記帳を取り出して寝転んだままその値を記録する。

毎日記録して比較していくば、もっと成長が分かりやすくなるに

違いないとの考えだつたが、ただステータスを写すだけの行為は思
いの外楽しかつた。

改めて自分の手で打ち込むことで、自分に身に付いたものを実感
出来たからかもしれない。

雑記帳の使い方も見つけたところで、ようやく機嫌が持ち直す。
またよくよ後ろ向きなことを考えて落ち込んでしまつ前に、急
いで目を瞑つた。

明日はもつと前に進むといいなど願いながら、四田田を終わりに
した。

五日目。

今日はまずからくり作りから取りかかることにする。

魔力測定器を右手にはめて、人差し指からゆつくり魔力を出して魔力操作スキルを鍛えながら、同時進行で図鑑を開き糸を挟んでいたページをじっくり見比べ検討する。

手の平に感じる気持ち悪さはかなり軽減され、程無くして気にならなくなるだろうと思えた。

使える魔力が2しか無いのは困るけれど、すぐに回復するといつ一点だけは便利に感じる。

使いきっても殆ど待たずに同じ動作を繰り返すことが出来るのは嬉しい。

その代わりスキルの伸びは遅くなるだろうが、それには気づかない振りをした。

さて、わたしは今、かなり寂しい思いをしている。

誰かと話したくて話したくてたまらない。

しかし、万能アンテナに手を出すのはまだ時期尚早だろう。

失敗して落ち込むのが目に見えている。

では何を作つてスキルレベルを上げるか。

ひたすら材料を作つて後々に備えるのがいいのかもしれないが、

“いつせならこの寂しさを紛らわしてくれるものが欲しい。

なので、人形を作ることにした。

お茶汲み人形や矢打ち人形の材料になつていて、それだけでは特別な効果は發揮しないただの人形だ。

図鑑で完成形として紹介されているのは、いかにもな日本人形で、暗いところで見たら心臓に悪そつたけれど、背に腹は変えられない。

本当はふかふかで可愛らしいぬいぐるみが良かつたんだけど、残念ながら図鑑には載つていなかつた。

材料はちょっと多い。

歯車一つに大きな歯車一つ、糸九本、金属板一枚。

今のわたしのレベルでは厳しそうだが、人形自体が材料になつていることを考えると、必要な材料の数の割に作るのは簡単なのではないかと思つている。

まずは糸を金属板の上に順番に並べていく。

途中うつかり息をかけてしまい、糸を飛ばすミスもしたけれど、何とか図鑑の指示通り並べ終える。

呼吸までちゃんと再現されているのには感心してしまつが、今はその無駄な再現率が恨めしい。

なるべく息を吹き掛けないよう注意しながら、次の工程に移る。大きな歯車と小さな歯車を交互に並べて、金属板にぴったり収まるようにしなければいけないのだが、これがなかなか難しい。

何度も置き直すと糸がぐちゃぐちゃになってしまつから、一度でちゃんとした場所に置かなければいけないのだが、何か印があるわけでもないのでなかなかうまくいかない。

それでも何度もやり直した結果、どうにか形になつた。

すぐに完成させるべく、右手を添えて意識的に魔力を出しながら、名前を呼ぶ。

しかし光の粒は現れず、代わりに白い煙がふすふすと部品から出始める。

慌てて手を離すと、ぽんと氣の抜けた音と共に部品がバラバラに崩れ落ちた。

「これが失敗かあ、うわあ、へこむなあ

がつかりして崩れた部品を確認すると、傷はついていないものの、数が減つていることが分かる。

どうせなら別のが出来れば良かったのに、なんて贅沢なことを思いつつ、もう一度試してみることにした。

一度組み立てたおかげで、最初の半分くらいの時間で並べ終わる。そしてさつきと回じよつとして名前を呼ぶと、今度はきちんと光の粒が現れた。

ほつと息をついてから、光の中から出てきた人形を手に取る。

それはなんともいえない、微妙な顔立ちだった。

艶々の黒髪ではなく、毛糸のような質感のもつさりした茶色の髪で、日本人形のあのしゅつとした切れ長の目とは正反対のたれ目をしている。

口元も心なしか緩んでおり、そのせいでなんともだらしない、にやけた表情に見えてしまう。

威厳の欠片も無いが、どこか愛嬌のある仕上がりになつた。材料としては質が低いのだろうが、閉じ込められた生活のお供としてはむしろ日本人形が出来るより良かつたかも知れない。

「よーしつ、君はタロウだ、よろしくねつ！

“うんよろしくー！”

タロウの分までわたしが喋り、挨拶を済ませる。

自分一人で受け答えしているだけなのだが、話す相手が出来たような気がして少し嬉しくなる。

「タロウ、わたし、頑張るよー。
“応援してゐよお姉さん”」

悪くない。

むしろかなり楽しい。

ひとしきり会話と「この名の一人芝居を楽しんだ後、次の作業に取りかかる。

また魔力操作の練習をしながら図鑑を開き、今度は糸を挟んでいなかつたページも確認していく。

先ほど材料を並べている時に思ったのだが、自分で印をつけられればかなり便利そうだ。

図鑑に筆記用具が幾つかあつたことを思い出して、次はそれを作ることにした。

定規やコンパスなんて、一体何に使うんだと最初目を通した時には思つたけれど、からくり作りには重要そうだ。

からくりに必要な道具のせいか、羽ペンにインク、定規、コンパスはどれも非常に簡単そつだった。

材料も少なくて済む。

今のわたしでも十分に成功しそうなものばかりだ。

「タロウ、見守つてね
“うん分かつた、頑張れーっ！”」

タロウとの会話を楽しみながら、まずは作りたいものの材料を全てを箱の中から取り出し、道具ごとに分けて置く。
そして改めて羽ペンから順番に、並べては名前を弦くといつ作業を四度繰り返した。

羽ペンは羽が無く、インクは薄く、定規は細かい目盛がついておらず、コンパスはやたらと小さかつたが、一応使えそうなものは出来た。

一度も失敗しなかつたのも嬉しい。

「 “お姉さんす”ーー！
えへへ、そうかなー」

自画自賛しながら、タロウの手を取り部屋の中をぐるぐる回って

喜び、そのままベッドへぽすんと腰かける。

しばらくにやにや笑っていたが、急に不安に襲われてタロウを抱き締めた。

「タロウ、わたし寂しいよ。
三ヶ月ずっとこのまんまだつたひじょう」

ぎゅっとタロウを胸に抱え込み、この五日間でたまっていたものをぽそりぽそりと打ち明ける。

タロウは黙つたまんまだ。

わたしがタロウの代わりに喋つてないのだから当たり前なのに、それがなんとも切なくて悲しかった。

「タロウ、大丈夫って言つて、ねえ」

抱きしめる腕に力を込めても、揺さぶつても、タロウは何も言わない。

堪えられなくなり、つい、ぽろりと涙が流れてしまう。

一度流れた涙は止まらなくて、どんどん後から後から流れてきて、ついには声を上げて泣いてしまう。

「さ、寂しいいいー、不安だよおおーつ！
うわあああん！」

小さな子のように泣きわめき、溜まっていたものを一気に吐き出し、感情のまま叫びちらす。

床にぼたぼた涙が落ちて、黒い染みを作り、それに気づいてやるせなくなり、更に激しく泣いてしまう。

途中からは自分でも何を言っているのかよくわからなくなり、最後の方は何が悲しかったのかも分からなかつたがただ身体と心が要求するままにひたすら涙を流した。

しばらくしてからよつやく落ち着き、すんすん鼻を啜りながら、あれだけ泣いたのに目も喉も全く痛くなつてなく、頭も重くなつていないこと気づき、改めてここはVRMMOの中なのだと実感する。しかし精神に一定以上の負荷はかかるはずなのに、なんでみんなに泣いてしまつたのだろうと、ゲーム自体に対する不安も生まれた。

「ほんと大丈夫なのかな、わたし」

あれこれ考えると、また不安がむくむくと膨れ上がりでおかしくなってしまいそうだった。

そうなる前に今日はもう寝てしまおうと、タロウを枕の脇に置いてベッドへ潜り込む。

まだ夕方にもなつていなこナビ、じぱりく何も考えたくなかつた。

「おやすみ、タロウ」

そう呟いて隣を見れば、しまりの無い顔をしたタロウがいて、それにはつと安心して、わたしは眠りについた。

大手ギルド『さんふらんしす』のトップ、ゴジマは要領の悪い人間である。

そもそもリアルファンタジー始めたのも、一人じゃ不安だから一緒にプレイしてくれとの友人の頼みを断り切れなかつたからで、ギルドのトップなんてやつているのもその友人に押し付けられたからだ。

その友人はもう既に別のゲームに移つており、それを機に辞めても良かつたのだが、大きく育つてしまつたギルドを放り出す訳にもいかず、また自身を慕つてくれている人間を突き放すことも出来ず、結局現在までリアルファンタジーに残つている。

しかしだからといつておざなりにプレイしている訳でもなく、困つているプレイヤーがいれば見過ごすことが出来ず、親身になつてやり、果ては現実での悩み事に対する相談にまで乗つてやりと、端からみて呆れるほどにお人好しに他人の世話を焼いて過ごしている。そんな性格のおかげでゲームの人望は厚く、時には癖の強

いプレイヤーも惹き付けてしまい、ショッキングな介事に巻き込まれてしまっている。

コジマと付き合って『さんふらんしす』のメンバーは、お人好しきれい文句を言いながらも、彼の側からは離れることはせず、ともすれば付け込まれそうになる彼のフォローに回りながら、満更でもなさそうにしている。

さて、そんなお人好しのコジマが、つい最近とあるプレイヤー達に対して激しい怒りを見せた。

冗談混じりに『仮』とあだ名される彼の怒りに、『さんふらんしそこ』や彼の周辺はちょっとした騒ぎになつた。

発端はあるギルドのメンバーによる新人プレイヤーの拉致。前々から彼がやめるよう忠告していたことだった。

件のギルド、『愉快犯』の面々には今まで散々迷惑をかけられている。

特にその中の一人、トロイと呼ばれる少年にコジマは酷くなづかれており、しおつかれ、時には悪戯の後始末をさせられることすらあった。

だがそれでも彼は、淡々と説教をすることはあっても、生々しい怒りを見せることは一度も無かつた。

そんな「コジマがついに怒ったのである。

誰も予想していなかつた事に、彼の周りは酷く戸惑い狼狽し、おそれおそる遠巻きに彼の様子を見守つた。

疑似トリップイベントが始まつて三日目の夜、コジマははある酒場でひとり、黙々と食事を取つていた。

むつすりと眉を寄せ、いかにも機嫌の悪そうなその様子に、誰も近寄らうとはしない。

元々厳しい顔つきをしていて愛想が良い訳では無いのだが、醸し出す雰囲気がいつもとは明らかに違つたためだ。

しかし食事が終わるつとする頃、彼の前にどかりと腰を下ろす人物が現れた。

ギルド『さんふらんしす』のナンバー2、ロリ姐ことメルチエその人だつた。

ロリ姐さんの異名が示す通り、メルチエはあざけない人間の少女の姿をしている。

美形では無いが子供特有の可愛らしさを持つていて、つい頭を撫でたくなる雰囲気がある。

しかしそんな外見とは裏腹に、中身は非常に男前で面倒見が良く、
身内を何よりも大事にするので、周囲からは姉御と呼ばれ、コジマ
程では無いにしてもかなり慕われていた。

ちなみにコジマは、つい筋肉をした大男なので、そんな二人がテ
ーブルを挟んで向かい合つ光景はなかなかにシユールだった。

「どうしたのよ、あんたらしくもない」

手早く注文を済ませ、メルチエがコジマに話しかける。

コジマはそれには何も答えず、ぐつと眉間の皺を深くした。

そんな彼の様子に、メルチエはやれやれと首を振り、優しげな声
で話を続ける。

「そりゃああんたが聖人君子じゃないってこた分かってるよ。
サリュもアルもネジも、仕方無いって、そういうこともあるだろ
うつて笑つて構えてる。
でもねえ、下の子たちはそもそもいかないのよ。
コジマさんどうしたんですか、大丈夫なんですかって、あたした

ちに不安氣に相談してくるのよ」

そこで一旦言葉を区切り、彼の表情を伺う。
相変わらず不機嫌そうではあったが、その中に彼の苦惱を感じとり、メルチエは少し笑って先を続ける。

「だーから。
もやもやしてること全部、とつと吐こちやいなさい。
で、さつさとお人好しで要領の悪い「ジマくんに戻りなさい。
似合わないわよー、あんたにその顔」

ぐりぐりと眉間に指を突きつけねど、観念したようにジマは深くため息をつき、のろのろと口を開いた。

「怒つてこるところか、情けないんだ、自分が」

「そもそもと喋り出した小さな声に、メルチュのみなりす店中がこ
つそり耳をします。

「もつと俺がちやんとあこひに聞かせてくれば、こんなことこ
は。

いや、真剣に止めなかつた時点で、俺も同罪なんだ。
あいつら、ガキだし、俺がもつとちやんと……」

延々と続く血膿にも似た音に、店の中の空気が生暖かいものに
変わる。

そして、終わりそつて無い話を、メルチュが無理矢理言葉を挟ん
で止めた。

「ぱっかじゃないの。

同罪つちやあたしたちもそりじやない。

むしろあなたは止めようとした。

てか、あのクソガキどもが、注意されたからつて素直に更生する
訳ないじゃん。

アカウント消されない限り、変わんないよあこひな」

メルチHの言葉は、さうださうだと固いつの声が回調し、何か反論しようと口を開いたゴジマの言葉をかき消してしまつ。

「ゴジマ君えすめーつ

「馬鹿、まじ要領悪い」

「笑つてよコーダー、コーダー怒つてゐのやだよつ」

笑いながらかけられる言葉は、ゴジマは困つたよつて面倒を下げる。

特にギルドのメンバーらしきプレイヤーの言葉には、一際大きく反応した。

「すまん、迷惑をかけた」

すっかり和気藹々と盛り上がる酒場の中で、ゴジマは「そり

ルチエに謝罪の言葉を囁く。

メルチエは意地の悪い顔でにやりと笑い、ぱしんとゴジマの頭を叩いた。

「馬鹿リーダー、後でギルドで罰ゲームねつ」

楽しげにギルドメンバーにリーダーの復活を告知するその姿に、ゴジマの頬もよみがへ緩む。

そのまま酒場に居た面々に料理をお詫びとして振る舞い、楽しげに食事をする人々を穏やかな顔で見つめた後、メルチエを誘つて外へ出た。

しばらく歩いて酒場から離れ、人の少なくなったところゴジマはメルチエに頭を下げる。

「閉じ込められたプレイヤーを助けたい。

力を貸してくれ

メルチエはそんなゴジマの姿を見て、呆れたようにため息をつき、いやいやと首を振る。

「あんたのせいじゃないんだよ。
いいじゃない、そこまでしなくても」

そう言いながらも、メルチエは分かつてているのだ。
きっとこのお人好しのリーダーは、反対されても一人で動いてしまつのだろう。

そしてまた、誰かを引っかけてきてしまうのだ。

メルチエはゴジマが好きだった。
独占するつもりは欠片もない。
だけどギルドのメンバー以外に心を碎く姿を見るのは嬉しくない。
それがゴジマなのだと分かつてはいる。
分かつても、これ以上内側に誰も入れたくなかつた。

だからじゃ。

「あーもー、仕方ない。

ほら頭上げな、そんな仲じゅ無いでしょ。

一緒に探してあげるよ」

ぱしんと胸中を叩けば、ほつと田尻を緩ませてコジマは顔を上げる。

その表情に、まだ見ぬ新人プレイヤーに対するちらりと嫉妬の気持ちが沸いた。

こんな顔をするほど、そいつが心配なのかとつぶ口にしたくな

り、ぐっとそれを飲み込んで別のこと口にする。

「手始めに詳しい情報あいつらに聞き出せなきゃね。

あんたはいいよ、あたしが聞くから。

あんたは掲示板で情報集めね。

あたしよりあんたの方が集まりやすいだろ?」

多少の思惑を含ませたメルチエの提案を、「ゴジマは疑う素振りも見せず黙つて受け入れた。

そのまま一人は別れ、それぞれに行動を開始する。

「サリュ、アルとネジに伝えて。

ゴジマが復活したけど、新人に興味持つちゃつたって。

うん、大丈夫、うまくやる」

だからゴジマはその後、メルチエが仲間と交わした会話を知ることは無かつた。

きっとこれからも、知らないまま。

六日目。

いつも通り八時に目覚めたものの、すぐに起き上がる気にはなれず、一時間ほどベッドの上でじっくりします。

もう一度ヘルパーを通して、精神の保護について詳しく説明されないか確認したけど、トライウマになると無ことあるへりこで、はつきりとした基準は分からなかつた。

昔、VRが実用化された直後は、心を病んだり現実と仮想の区別がつかなかったりといった問題が何件も起こったと聞いたことがある。

最近はそんな事件が起きたと聞いたことはないけど、もしや表沙汰になつてないだけで、実際はに解決してないんぢやないだろうか。三ヶ月ひとりきりで過ごして、果たしてわたしは元のわたしに戻れるのだろうか。

考える程に不安がむくむく膨らんでいく。

ぶんぶん頭を振つて、無理矢理恐い想像を追い払う。

余計なことを考えるのは、万策尽きてからで十分だ。
まだわたしには、沢山の手段が残されている。

「タロウ、絶対一緒に出ようね」

タロウの小さな手をぎゅっと掴み、強引に指切りをし、気持ちを明るくするために好きな童謡を歌う。

歌にあわせてタロウの手足を動かすと、だんだん気持ちが明るくなつてくる。

三曲歌い終える頃には、すっかりとはいえないまでも、そこそこには調子を取り戻せた。

ちなみに童謡は歌一覧には表示されなかつた。

借り物の歌じや作詞として認められないようだ。

昨日と同じく魔力操作の練習をしながら、本棚を眺める。

魔力も地味に1増えていたから、魔力操作のスキルを伸ばしていくば少しづつ魔力も増えて行きそうだ。

わざわざ新しいスキルを探す必要は無くなつたけれど、やはりもう少し効率良く増やせると嬉しい。

結局、神話をひとつと伝記ふたつを選んで机に向かった。
まずは伝記、『占い師の一生』から取りかかる。

さしあたつて知力を上げる必要は無いので、丁寧に読む前にパラ
パラと手早くページを捲つて流し読みしておおよその内容を把握す
る。

占いで有名になつていいく女性の話だつたが、身一つで出来る占い
は無く、どれも道具が必要なことが示唆されていたので、これは無
理そつだと早めに見切りをつけた。

次は『治癒師の一生』だ。

補助系の、ステータスが一時的に上がる呪文がスキル発現用のも
のだといいなと期待していたけれど、やはりというか体力や病気を
回復させることが治癒師の本業のようで、割と初めての方で紹介され
ていた呪文は体力を回復するものだった。

現時点では体力を減らす手段の無いわたしはそこで読むのをやめる。

「簡単に都合のいいのは見つかんないか。
そんなこともあるよねー、タロウ。

“ そうだよお姉さん、次は見つかるよー！”

どっちも外れだつたのは残念だが、ベッドに座らせたタロウに声をかけて自分を慰めればさほど引き摺ることもなかつた。

さて氣分転換だと、残しておいた『サウスタリア神話』を開く。またドロドロの愛憎劇かとわくわくしていたが、今度の神話は神々の住む天界から地上へ落ちてしまつた見習いの神様ヒカルが、どうにか天界へ帰ろうと試行錯誤する話だつた。

自分の現状とヒカルの境遇が重なり、ついつい感情移入してしまう。

様々な苦難を経て、ようやくヒカルが天界へたどり着いた時には、じわりと田頭が熱くなつた。

「わたしも頑張ろ」

しばらく物語の余韻に浸つた後、よしつと氣合いを入れてから、からくり作りに取りかかる。

今日はまず、枕を作つてみることにした。

安眠枕という名前が示す通りそれは、ぐっすりよく眠れるようになるものらしい。

しかしこのゲームの中では、ベッドに横になつてしまらへん目を瞑つていれば直ぐに眠ることが出来る。

それなのにこんなアイテムがあるということは、もしかして睡眠スキルに何か関係があるのかもと最初から目をつけていたものだ。

「木材を四等分するよしに糸を巻いていく」と

昨日作った道具を使い、あらかじめ木材に印をつける。
おかげで糸を巻く場所をどこにするか迷わなくて良くなったのは、
非常に有り難かった。
しかし全ての糸を巻き終えると、最初に巻いた糸が元の位置から
ずれてしまっていることに気づく。

「んんー、材料つて切れ目入れてもいいのかな」

糸を引っかける場所の木材の両端に、薄く切れ込みを入れればか
なり精度があがりそうだ。
適当に完成させてしまつ前に図鑑にあつた折りたたみ鋸の存在を
思い出し、そちらを先に作ることにした。
金属と木材をすらして重ねて、糸でぐるぐる巻いて固定するだけ
だったので、特に道具は使わないで良く、魔力を意識しながら完成
させた。

残念ながら折りたためなかつたけれど、それ以外はちゃんとしたもののが出来た。

それを使って、再び安眠枕に挑戦する。

適当な台が無かったので、椅子を使って木材に切り込みを入れ、先ほどと同じ手順で糸を巻いていく。

切り込みのおかげで、今度は最後まで糸がずれることは無かつた。これは結構うまくいくんじゃないかと期待を込めて仕上げにかかる。

「おおっ、なかなか」

出来上がった安眠枕は、材料からは考えられないほどふんわりした仕上がりになり、今まで作った中で一番きちんと作れているように見える。

解析で確認してみると名前しか分からなかつたので、ちょっとレベルも高いアイテムになるのだろう。

早速効果を試してみたかったけれど、まだ早いので、枕をぼすんとベッドに放り投げ、からくり作りを再開する。

すぐ役に立つかは分からぬけれど、作業用の道具っぽいものを全部作つてしまつことにしよう。

何か必要になる度に図鑑を開くのは面倒だ。

おそらく成功率も高いだらうし、ストレスなくスキルのレベルを上げるのにはぴったりに思える。

「木槌と鏧と、鋸と、錐と、うーん天秤はいるかなあ

今ある材料で作れるもので、すぐには必要無さそうなものも含め、全部で十の道具の材料を準備し、道具作りにも使えそうなものから、一つ一つ順に作っていく。

まずは鋸からだ。

金属板と木材をそれぞれ一枚ずつ使って、手早く組み上げ完成させるも、出来上がったのはやたら大きくて使い勝手が悪そうで、更には切れ味の良くなさそうなものだった。

これはさすがに、これでもいいかで流せない。

「材料そのまま使つてるからかなあ」

箱の中に入っている材料は、同じ大きさで統一されている。

それを図鑑に載っている数そのまま使って作っていたが、木材に切り込みを入れて使つても大丈夫だったから、もっと加工してもいいのかもしない。

それを念頭に置いてもう一度、鍛作りに挑戦してみる。

鋸で適当な大きさに木材を切り、作ったばかりの鍛で金属板も切断する。

切れ味が良くないので、金属板は切断面がギザギザになってしまつたが、仕方がない。

そうやって加工した材料を使って再び鍛を作る。

すると今度はきちんと手の平に収まるサイズのものが出来る。試しに金属板を切ると、切断面が明らかに先ほどよりも綺麗だつた。

「ふうん、からくり作り、奥が深いなあ」

好きで始めたことじゃないのに、いつのまにか面白く感じているわたしがいる。

もつといろいろ試してみたい。

その心のままに、次は鑓を作る。

材料は金属板一枚というのを参考に、手の平サイズに金属板を切り、更に表面にそれっぽく、鍔で傷を幾つもつける。

「さあて、どうなるかな」と

わくわくしながら仕上げると、非常に使いやすそうな鑓が田の前に現れた。

手にしつくり馴染むし、ぞうぞうした部分もわたしが傷をつけた場所にある。

ぱっと見た感じ、文句のつけようのない出来上がりだった。

「よーしつ、残りもいいの、作るぞっ」

すっかりからくり作りの面倒とに夢中にしまったわたしは、時間を忘れて道具作りに勤しんだ。

材料を加工し、鍔や鋸の切り口を鑓で綺麗に磨きあげ、更に増え

ていく道具を駆使して新しいものを作る。

予定していた全ての道具を一度も失敗することなく作り終え、ついでとばかりに昨日作った道具も作り直し、よつやかへ一息ついた頃には、既に七日目の朝を迎えていた。

H夫しほよひ

七日田。
全く寝ていないのに、身体は全く疲れない。
疲労のステータスが無くて良かつたと思いつつ、だけどやっぱり
睡眠はきちんととどろつと反省する。
安眠枕も結局使わず済んでしまった。
起き続けていると、一日が経過したという実感があまりわからない。
むしろ酷く長い一日が続いているような気がして、変な感じがす
る。

「ねつこや、記録もつけてないや」

雑記帳を活用すると決めたのに、三日坊主じんなか一田しか記録
していない。
ちよつとすれば出るナビ六田田の分として、今のステータスを記
録しておく。

名前：シトロネラ
性別：女
種族：人間

体力：8 / 8 (15 / 15)
魔力：4 / 4 (8 / 8)
満腹度：0 %

筋力：2 (5)
知力：9 (17)
耐性：2 (5)
精神：5 (10)
器用：13 (23)
速さ：2 (5)
運：2 (5)

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：41 (睡眠時回復時間4・1%短縮)
空腹：58 (空腹時ステータス6・8%上昇)
読書：26 (読書力増加)
速読：36 (読書速度増加)
解析：16 (低レベルアイテムの情報判明)

歌唱：23（歌の効果発現率2・3%）

作曲：15（作曲力増加）

機巧：25（からくり作成）

自然回復：6（自然回復速度増加）

魔力操作：11（魔力操作精度増加）

器用が一気に上がつていて驚く。

やつぱり何か作るスキルはステータス上昇が大きいんだなあ、と感心すると同時に、他のスキルが微妙なことを改めて確認することになり、少しだけがっかりした。

そして空腹スキルにちょっととした変化が起きていることに気づく。

「あれ、レベルに0・1掛けた数字じゃない」

上昇値が1%ばかり水増しされているのだ。

倍率が変わったのかなと不思議に思ったものの、もう少し変化を見なければはつきりしそうないので、今は単純に嬉しいサプライズとして受け止めた。

雑記帳に数字を写している途中、打ち間違ったところで、この際これも作り直すかと思い立つ。

殆ど使つてないし、やっぱり訂正が出来ないのは面倒くさい。一応最後まで記録してから、早速大きな歯車作りから始める。道具のひとつ、木で出来た作業台に歯車を並べ、まずはその直径を測る。

そしてそれを半径とした円を、新しく作ったコンパスで作業台に直接描いていく。

ついでに最初に作った方のコンパスを使って大きな円の中間に一つ、歯車サイズの小さな円を描く。

大きな歯車はこれからも何度も作ることになるだろうし、直接作業台に記しても問題は無さそうだ。

それにしても、からくりは質が高くなくても全く使えないという訳では無いようだ。

新しいコンパスは、大きな円を描くには一度良かったけど、小さな円を描くのにはちょっとだけ使いにくい。

そこで活躍するのが最初のコンパスである。

小さすぎると思っていたけれど、小さな円を描くのには使い勝手が良かつた。

時にはわざと失敗するのも必要なかも知れない。

新たに分かつた事実にふむふむと感心しながら、円に合わせて材料を並べていく。

周りを糸でぐるっと囲むのは、今まで小さな歯車の輪郭に沿わせていたのだけれど、大きな円に合わせた。
うん、いい感じだ。

これだと具体的な完成後の姿が想像しやすい。

自信をもつて最後の工程を終えると、非常に綺麗な大きな歯車が出来上がった。

歪みも無く、うっすら光沢を放っている。

元々の材料の歯車と比べてみても、随分と質が高そうに見える。
次はこれを使って雑記帳作りだ。

金属板の横幅を大きな歯車の直径に、縦幅をその1・5倍に切り、真ん中に錐で穴を空ける。

同じものをもう一枚作り、最初と同じように順番に歯車を並べて金属板で挟み、針金でぐるぐる巻きにする前に真ん中に針金を通して、材料がずれないよう固定する。

針金で全体をぐるぐる巻きにはせず、製本するイメージで金属板の左端の方に縦に針金を巻き付けた。

最後に真ん中に通していた針金を抜き、仕上げにかかる。

余計な工程をいくつか挟んでしまったが、果たして上手くいくだろうか。

わたしの心配とは裏腹に、出来上がったのはかなり質の良いものだった。

文字の訂正は勿論、「コピー＆ペースト」に図の挿入、誤字チェック

や文字サイズの変更、他にもいろいろと出来ることが増え、まさに文書作成ソフトと言つても差し支えないものが出来た。

きっと『じみ図鑑』はかなりレベルの高い機巧スキルを持つた人が書いた設定なんぢやないだろうか。

レベルが上ると、簡単なものは手順を省略出来るとあつたけど、そもそも図鑑に書かれているのは既に省略された手順なのではないか。

もう少しレベルが上がれば図鑑通り作つても支障はなさそうだが、しばらくは基本の順番は守りつつ、間に独自の工程を挟んで行こうと決心する。

「そりだ、作ったものも記録してこいつと

新しく作った雑記帳に今までのステータスを写し、そして日別に作つたものを打ち込む。

材料と作り方、それに解析で判明している情報と、出来映えを自分の印象で綴つていく。

より正確に記録するために作ったものを再度解析していくと、名前と分類の他に、レベルが判明したものもあった。

分かったのは、わたしの解析レベル引く五以下のものだった。

せつかくなので、発現したスキルについても記録していく。
基本的な効果、上がると思われるステータス、気付いたこと、『
スキルあれこれ』に書いてあつたこと。

一通り打ち終わつてから、最初から記録を見直していく、更に気
付いたことをぽつぽつ付け足していく。
ようやく満足のいく内容が仕上がつた頃には、かなりの時間が経
つていた。

「HPにつの悪くないな、自分だけの辞書つぼくて」

雑記帳をさらつと撫で、にまにまと類を緩める。

これを充実させるためにも、ここから出るためにも、もつと色ん
な物を作りうるといふとからくり作りに戻つた。

「次は音が出るもののがいいなあ」

音楽再生機なんていいかもしない、と思つたが、さすがに難しかつたし、なにより再生できる音楽が自分の歌しか無いことを思い出し、無難に笑い袋を選択する。

糸を三つ編みにして使つたりといろいろ工夫してみたが、結論から言えば失敗した。

物自体は出来た。

多分質もそれほど悪くない。

だけどそれはどうしようもなく、笑い袋でしかなく。

きひやーひやひやひやと狂ったピエロのよくな笑い声は、音が出てるとは言え、あまり心臓に良くない類のものだった。

「大声で敵を撃退する道具つて、そりゃこれは敵も怖がるよなあ」

何でこれを作らうと思つたんだらしく、ちょっと前の自分の頭を疑いながら、慎重にそれをしまいこむ。

すっかり気持ちを折られてしまつたわたしは、何か本を読んで今日は寝ることに決め、本棚から『俳句百選』を選ぶ。

それは珍しくタイトル通りの本で、五七五で綴られた美しい日本

語の数々に、非常に心慰められた。

これは寝る前に読む本にしようと決め、三分の一ほど進めたところで、ステータスを雑記帳に書き込み、ベッドに横になる。頭の下には、昨日作ったものの使う機会の無かつた安眠枕を置く。何か良い変化があるといいなながら、眠りについた。

七日目（雑記帳より）

体力：	9 / 9	(16 / 16)
魔力：	5 / 5	(10 / 10)
満腹度：	0	%

筋力：	2	(5)
知力：	9	(17)
耐性：	2	(5)
精神：	6	(11)
器用：	14	(26)
速さ：	2	(5)
運：	2	(5)

空腹でステータス50%減少

睡眠 : 41 (睡眠時回復時間4・1%短縮)
空腹 : 64 (空腹時ステータス7・4%上昇)

読書 : 23 (読書力増加)

速読 : 38 (読書速度増加)

解析 : 19 (低レベルアイテムの情報判明)

歌唱 : 23 (歌の効果発現率2・3%)

作曲 : 15 (作曲力増加)

機巧 : 30 (からくり作成)

自然回復 : 10 (自然回復速度増加)

魔力操作 : 15 (魔力操作精度増加)

思い切って挑戦

八日田。

起きてすぐにステータスを確認したが、劇的に睡眠スキルの値が増えていることもなく、安眠枕の効果を確認することは出来なかつた。

てっきり睡眠スキルの成長率が上がるのだとばかり思っていたので、がくりと落ち込んでしまう。

朝っぱらから出鼻を挫かれたせいで、ついつい余計なことを考えてしまつた。

わたしがこの部屋に閉じ込められてから、もう八日田も経過している。

誰とも会わずに喋らないどころか、自分以外が出す音を聽かずに過ごす日が一週間以上続いているのだ。

人の声はあるが、鳥のさえずりも、車のエンジン音も、風の音も雨の音も、何もかもがこの部屋には存在しない。

時間にすると、もうすぐ一百時間に達してしまう。

改めてそれを認識すると、少しだけぞつとしてしまう。

続けて深く考へると、取り返しがつかないほど落ち込んでしまいそうなので、でたらめな歌を歌い、俳句を読んで気を紛らわせてから行動を開始する。

さて、とわたしは図鑑片手に考えこんだ。

わたしは実は、はつきりと自覚していないだけで、結構な所まで追い込まれているかもしない。

タロウと話すのもすっかり当たり前になってしまったし、ふと気を抜くと悪い方へ悪い方へと思慮が傾いてしまいがちだ。

もともとそんなにネガティブな方では無いので、そんな自分に違和感を覚えてします。

ここのはひとつ、スキルレベルや器用が低いなどと言つて諦めず、『万能アンテナ』作りに挑戦してみるべきではないだろうか。

失敗してもスキルレベルは上がるだろうし、運良く完成させられれば、例え質が低くて万全の効果を發揮できなくとも、一つくらい外との連絡手段が出来るかもしない。

何よりも、目的に近づいているとはつきり実感できる行為が、今のわたしには必要だ。

よし、と気合いを入れ、まずは材料作りに取りかかる。

万能アンテナに必要なもののうち、自分で作らなければならぬのは、大きな歯車二つに、大きな金属板一つ、あと太い糸と太い針金が一本ずつ。

最初に取りかかるのは大きな歯車だ。

昨日一度作っていたおかげで、組み立てから仕上げまでスムーズに進む。

そして魔力を放出しつつ名前を呼ぶと、魔力が丁度5になつたところで、一瞬光の色が変わつた。

まさか失敗かとひやりとしながら出来上がつたものを確認すると、昨日よりさらに光沢のあるものになつていた。

「もしかして、大きな歯車に必要な魔力は5つのことなのかな」

生憎わたしの今使える最大魔力は5なので、それを越えたらどうなるのか確認は出来ない。

しかし魔力を全部注ぎ込めばいいのでは無さそうだというのが分かつただけでもかなりの進歩だ。

考えて答えが見つかる訳でも無いので、確認も兼ねてもう一つの大きな歯車を作る。

さつきよりさらに集中して魔力を注ぎ込むと、やはり5の時に光の色が変わつた。

わたしは雑記帳を取り出し、魔力についての補足を打ち込み、次の作業に移つた。

大きな金属板は単純に金属板を一枚くっつけて並べるだけなので、非常に簡単に作れそうだった。

しかし実際並べてみると、一枚の間にかなり隙間が出来ることが分かった。

わたしは鏝で分かりやすく歪んでいる部分を削り、再び一枚を並べる。

さすがに完全にぴったりには出来なかつたけれど、むつきよりは随分マシになつた。

一枚を更に針金でしつかり固定しようつかと思つたけど、完成した時に針金の部分がボコッとなつて質が下がりそうな気もしたのでやめておく。

すうはあと深呼吸をし、慎重に魔力を出して行くと今度は4のところで光の色が変わる。

慌てて魔力の放出を止めようとするが、それは叶わず全魔力を注ぎ込む結果になってしまった。

魔力が5になつた瞬間には光の色は変わらなかつたので、規定値以上注げばいいという訳ではなく、それに決められた魔力の値を込めなければならないようだ。

出来上がつた金属板の質はそんなに悪くはなかつたが、魔力をもう少し早く止められていればもっと良いものが出来ていたかもしないと思つと、悔しい。

「あれ、魔力つてどうやって止めるんだろ」

そこではたと基本的なことでも気がつか、急いで魔力操作の練習をする。

魔力を放出する速度は少し操れるようになつたけれど、止めるのはどうやればいいか分からぬ。

止めたい瞬間に流れを塞き止めるイメージを持つてみても、多少放出スピードが遅くなるだけで、止まつてはくれず最後まで出切つてしまつ。

何度か試してみて、どうやらまだ今のレベルでは無理そうだといふことが分かり、止めるのはすっぱり諦めた。

こには考え方を変えて、指先の向きを変えることで調整してみよう。

もう一度、大きな金属板を作る。

今度は魔力が4になつた瞬間腕を真横にやり、名前を呟く。出来上がつたものは、さつきのよりも光沢があつた。

どうやら指の向きを変える方法は、有効らしい。

何度も試してみないと断言は出来ないけれど、しばらくはこの方法でいくことにする。

上手くいったことにほつと安堵の息を吐き出し、すぐに次に取りかかる。

太い針金と太い糸は作り方は似ていた。

材料何本かを一纏めにするだけ。

しかし本数には違いがあり、そこに工夫のしがいがあると見た。まずは太い針金からだ。

これに必要な針金は一本だけである。

それを互いに絡ませ、紙撫りのように捻つていき、最後に端を切り揃え鏢で丁寧に磨いた。

魔力を全て注ぎ込んで今度は光らなかつた。

残念ながら魔力が足りなかつたようだ。

出来栄えはそこそこ、元の針金と同じくらいの質だ。

これ以上の改善点が特に思い付かなかつたのでこれでよしとして、次は大きな糸に移る。

大きな糸に必要なのは、糸九本。

三の倍数だったので、三つの三つ編みを作り、更にそれを編み込み、端をぎゅっと堅結びにする。

元の長さよりかなり短くなってしまったのが気になつたが、特に改善はせずそのまま完成させた。

こちらも必要な魔力は6以上なようで、光の色に変化は見られなかつた。

出来上がつたのは所々解れていて、お世辞にも質が良いとは言えないものだつた。

三つ編みにするのが正解だと思い込んでいたので、この結果は少々堪えるものがある。

さすがにこのまま材料として使うのは躊躇われる。

もう一度ちゃんと作り直すことにして、今度は特に手を加えず、順番に並べてから一纏めにしてから完成させる。

今度は先ほどよりもちゃんとしたものが出来た。

やたらと手を加えればいいというものでは無いらしい。

そういえば最初は三つ編みすることに気をとられていて、並べる

順番が疎かになっていたような気がする。

図鑑の順番は重要らしいことを改めて確認し、ここで一回手を止め、雑記帳に新たに作った三つの材料の情報をつけ加えていく。解析もして、分かつていることを全て打ちこんだといひ一度休憩をいれることにした。

「んーダメだ、組み立てのイメージが掴めないなあ」

休みがてら図鑑を手にし、万全アンテナのページを眺める。

完成した形はパラボラアンテナのようだが、わたしはパラボラアントナの仕組みをよく知らないし、实物を見たことも無いので、材料を見ても手順についての明確なイメージがわいてこない。ぱつと思いつくのは、金属板に丸みを持たせるくらいだ。

「タロウ、何か良いアイデアない？」

”難しいねえ、うーんうーん”

タロウに助けを求めてみたものの、都合良く何か閃くこともなく、しばらくぐだぐだ会話をした後、とりあえずやつてみてからまた考えるかと行動を再開した。

まずは金属板に丸みをつけるべく、木槌でがつんがつん叩いて形を変えていく。

どれくらいの曲面が必要かはさっぱり分からぬが、確かに半球まではいつてなかつた気がするので、角度をつけすぎないように苦慮した。

しかし木槌だけで金属板の形を変えるのは、思つていた以上に難しい。

綺麗な曲面にはならず、一部分だけベリッと凹んでしまつたり突出してしまつたりと、なかなか思い通りの形にならぬつてくれない。それでもしつこく叩き続けていくうちに、多少ましかと妥協出来る程度にはなつたので、これ以上叩いてまた形が歪むことを恐れ、そこで木槌を置いた。

不恰好に外枠からはみ出してしまつた部分を鍔で切り落とし、縁を鏝で丁寧に磨いて、ようやく土台が出来上がる。

今まで一番大変な作業だった。

いつの間にかつめていた息を吐き出し、額の汗をぐつと手で拭うフリをした。

実際に汗は流れていないので、いつこつのは気分である。

早速出来上がつた金属板の上に部品を並べてゆくのだが、平らで

なくなつたせいで手を離すとすると部品が中心に向かつて滑り落ちていつてしまつ。

そこで適当な場所に錐でふすふすと幾つも穴を空けて、そこに針金を通し部品を結んで軽く固定することにした。

並べる順番と大まかな位置だけ図鑑を参考にして、金属板の中にうまく収まるように頭を捻つて部品同士を噛み合わせていく。一通り並べ終えた後に部品が一つ余っていることに気づいてはやり直し、全部使つたものの金属板から大きくはみ出してしまつたのをやり直し、何度も並べてはやり直してを繰り返していくうちにか形になつた。

「もつかい並べうつて言われたら無理だなあ」

殆ど偶然に組み上がつたことにふうつとため息をつき、うつかり触つて崩してしまわないうちにさつさと仕上げにかかる。

そつと金属板の縁に人差し指を置き、その先から魔力を放出しながら名前を呟くと、光が緑色に変化した。

失敗かと思ったが、光の中からは材料でも万能アンテナでもないものが出てきた。

「なんだこれ、んんん、棒？」

パラボラアンテナと似ても似つかぬそれは、10cm弱の金属の細い棒で、引っ張ると三倍程度に伸びた。

一体何が出来たんだろうと首を捻りながら解析を行うと、『簡易アンテナ』と表示される。

万能アンテナは作れなかつたが、一応アンテナらしきものは出来たので、どれ程の物か試してみるとした。

簡易アンテナを片手に持ち、多少役に立てばいいのだけどもほど期待せずにメニューを開く。

きっと無理だらうな、と思いながら掲示板の文字に触れた。

Hマークを予想していたのにすんなり新しいページが展開されたので、一気に胸がときどきと高鳴つたが、次の瞬間あっさり落ちついた。

「全部文字化けかあ、ま、そんなもんだよね」

予想通り、と強がつてみるけれど、やっぱりどこか期待していた

部分はあつたらしく、しゅんと肩を落としてしまつ。

チャットもブログも掲示板と同じく、エラーは出ず先のページには進めるものの、文字化けしていく何も読み取ることは出来なかつた。

「あーあ、残念だなーって、お、おおおっ！」

□をへの字に曲げて、読み取れない文字を適当に触つていると、おそらく誰かのブログらしきものが開いた。

中身も他と同じく全て文字化けしていく、何を書いているのかさっぱり分からぬ。

わたしが驚いたのは別の部分だ。

その記事には、小さなフェアリーの女の子と大きな巨人族の男性が、遺跡らしき建物の前でビシッとポーズを決めている写真が表示されていたのだ。

「うわ、人だ、人だよタロウっ！」

わたしはすっかり興奮してしまい、タロウを掴んで部屋の中をぐるぐる転げ回った。

久しぶりに田にする自分以外の姿は、ゲームの中にわたし一人きりじゃなく、誰かが存在することを感じさせてくれ、今も元気でどこかを駆け回っているのだと想像すると、感極まつて思わず涙が出そうになる。

何度も何度も写真に触り、うへへへと怪しい声をあげてにやにやとだらしなく笑い、もっと他は無いかと勘に頼つて次々に新しい記事を開いていく。

写真付きの記事は全体の割合からしたらそろそろ多くは無いみたいだが、それでもわたしの寂しさを慰めるには十分な量があつた。

敵と戦っている人間の男の子、美味しいそうな料理を前に談笑しているエルフの男女、小型の竜の背中に乗るフェアリーの女の子、巨人家族の人たちに胴上げされているドワーフの青年。

ぼやけていて顔もよく分からぬ写真も多かつたけれど、それですら見ていて楽しかつた。

その中でもわたしが特に気に入ったのは、どの記事にも一枚以上の写真がついているひとつのがログだった。

そこに載っている写真は他のものに比べると圧倒的に綺麗で躍動感がある。

激しく動いてるだろう場面を切り取ったものも全くブレていない。構図も綺麗で見映えのするものばかりに見える。

写真に関しては全くの素人だが、そんなわたしでもこれがかなりセンスが無いと撮れないものだろうと推測出来た。

「もしかして写真にもスキルはあるのかなあ」

スクリーンショットの機能はついていなかつたことを思い出し、これがスキルなら面白いものがあるものだと感心しながらそのブログを過去に遡つて、一枚一枚写真をじっくり楽しんだ。

お気に入りに登録したいけれど文字化けのせいでその方法が分からないので、せめて頭に焼き付けておこうと、細部までじろじろ眺める。

よく写真に登場する人たち三人に勝手に名前をつけ、ポーズや恰好からなんとなく性格を想像し、ここを出たら会つてみたいなど憧れを募らせる。

その為にも早く万能アンテナを完成させねばと思うものの、なかなか写真漁りをやめることが出来ず、結局夕方近くまで「写真を眺めて過ご」してしまった。

「よしつゝ、やる気回復！」

写真のおかげでかなり元気の出たわたしは、もう一度氣合いを入れて万能アンテナ作りに取りかかった。

次はぜひブログの内容を確認出来るものを作りたい。

そして、もっと外の世界を楽しむのだ。

より明確な目的が出来たせいか、自然と材料を選ぶ手にも力がこもつてしまつた。

必要な材料を作り、さつきと同じ手順で並べていく。

金属板を加工するのも意外と上手くいき、ふんふん鼻歌を歌いながら組み上げるていつた。

やり直すことなく一度で上手く材料が金属板の中に收まり、これはとがなり期待していたのだが、今度は残念ながら何も出来ず、せつかく苦労して丸みをつけた大きな金属板と歯車が消える結果になってしまった。

残念だけれど今回が特別悪かつたんじやなく、さつきが余程運が良かつたんだと自分に言い聞かせ、必要以上に気に病まないことにした。

しかし何度も失敗が続くとさすがに落ち込みそのので、今日はこれで終わることにした。

雑記帳にステータスを写し簡易アンテナや金属板の加工等について書き込む。

全く意識はしていなかったけれど、後から読み返したら非常に浮かれた言葉が踊っていた。

どれだけ嬉しかったんだと自分に苦笑いしてから雑記帳を仕舞い、ベッドに座つて俳句を読む。

更には五枚だけと決めてブログの写真を眺め、わたし自身をその写真の中に加えた幸せな想像をしながら、ゆっくり目を閉じた。

八日目（雑記帳より）

体力：9 / 9 (16 / 16)
魔力：6 / 6 (11 / 11)
満腹度：0 %

筋力：2 (5)
知力：10 (18)
耐性：2 (5)
精神：6 (12)
器用：17 (31)
速さ：2 (5)
運：2 (5)

空腹でステータス50%減少

睡眠 : 47 (睡眠時回復時間 4.7% 短縮)
空腹 : 70 (空腹時ステータス 8.0% 上昇)
読書 : 26 (読書力増加)
速読 : 40 (読書速度増加)
解析 : 24 (アイテムの情報判明)
歌唱 : 25 (歌の効果発現率 2.5%)
作曲 : 15 (作曲力増加)
機巧 : 41 (からくり作成)
自然回復 : 13 (自然回復速度増加)
魔力操作 : 20 (魔力操作精度増加)

九日目。

今日もしつこく万能アンテナ作りに勤しむつもりだ。
いきなり取りかかるのではなく、成功率を上げるためにもちゃんと
とした万能アンテナにするためにも、まずは材料の質を上げること
にした。

大きな歯車と大きな金属板はこれ以上手の加えようが無い。
改善点があるとすれば、素早く正確に組み立てる事くらいしか
思いつかないので後回しだ。

まずは、太い針金から。

組み立てる方法自体は昨日とさほど変えず、一本を捻る時になる
べく均一になるよう注意する。

変えるのは、注ぐ魔力の量。

昨日寝る前に、万能アンテナを作った途中で魔力が1増えていた
ことに気付いた。

太い針金を作った時には魔力は5のままだつたので、これは試して
みる価値はあるだろ？。

「つまくこつてよーっ」

ぱんと両手を合わせて仕上げを待つ部品にお願いしてから、出来るだけ素早く魔力を放出する。

最後まで絞り出すと、一瞬光の色が変わった。

成功だ。

出来上がったものは、表面がツルツルしており、明らかに元の針金よりも質が良さそうだ。

よしよし、と頷いて何度もそれを撫でてから、次の材料に取りかかる。

太い糸はまだまだ改善の余地がある、と思つ。

三つ編みはダメだったので、まずは九本の糸を順番通りに纏めてから、両端を堅結びにした状態で仕上げてみた。

残念ながら魔力は6ではまだ足りないようで、光の色に変化は見られない。

その結果出来たのは昨日とそれほど変わらない、きちんととはしているが普通の域を出ないもの。

次は両端の他に、真ん中も結んでみる。

これはまずかつたらしい。。

最初よりも、解れが目立つ結果になってしまった。

結び目を増やすのが駄目なら、後は何を試そつか。

少し悩んだ後、わたしはちょっと汚いかなとは思いながら、糸を口に含んで唾液で濡らせ、その濡り気で互いをくつつかることにした。

細かいところまで再現されているゲームならではの工夫だ。

ふわふわと落ち着きのなかつた糸は、水氣を得たおかげでしづちり纏まり、完成させる前から既に一本の糸になつていて見えた。

仕上げてみると、格段に出来がいい。

使えるものはなんでも利用すべし、と雑記帳に書き込んで、わたしは残りの材料作成に取りかかった。

金属板に丸みをつけるのはやっぱり難しい。

昨日一回目に作った時より上手く出来ず、一回目のものとさほど大差の無い仕上がりになる。

しかし余った部分は切り落として、叩いて凹ませ、鏪をかけることで対処した。

そのおかげか、昨日よりも多少大きな円が出来上がる。

これなら部品を配置を考えるのが少し楽になりそうだ。

雑記帳を捲り昨日の工程を確認し、一度材料を置いて固定したい場所に予め錐で穴を空け、針金も通しておく。

接着剤みたいなものがあれば便利なのにと思いつつも、できぱきと素早く部品を並べて、最後に魔力を注いで名前を呼ぶ。光が変色することもなく、どうやら成功したらしい。

現れたものは手のひらに乗るくらい小さかつたけれど、紛れもなく

く図鑑に載っていた万能アンテナの形をしていった。

「よよ、よし、これで実験」

一度であつさつ上手くいったことに多少動搖しながら、出来上がつた万能アンテナを机の上に置き、ふるふる震える手でメニューを開く。

すぐに掲示板もチャットも相変わらず文字化けしているのが分かつて、がっかりするどころか逆にほつとしてしまった。

失敗するのが当たり前になりつつある自分に、弱気はダメだと気合いを入れてからブログを開くと、文字化けに混じって存在する意味のある言葉が目に飛び込んできた。

「お、おおお、おおおおおーー。」

ついに、ここまで来た。

ぐぐつと胸に熱いものが込み上げてくる。

スキルや人の名前、地名などは全く読み取れなかつたが、それで

も何が書かれているか分かる。
ちゃんと理解出来る。

と を倒しましたー強かつたわーまじ鬼畜！

スキル500レベ到達！ 今からギルメンにお祝いして
もうござーす！

で が 。 馬鹿ばつかだ（笑）

もつ飽きたー疑似イベ長えよ！

色んな人の言葉が生き生きと踊つていて、貪るよつに片つ端から
読んでいった。

楽しい、嬉しい、悲しい、ムカつく。

様々な気持ちがそこには渦巻いていて、わたしは一緒に気持ちになつて、喜び、怒り、声をあげて笑つた。

勿論、昨日気に入つた写真が綺麗なブログも舐めるように読んだ。
ひたすらひとつずつスキル、おそらく写真、について書かれていて、
並々ならぬ情熱がひしひしと文面から伝わつて来る。
おかげで益々ブログの主のことが好きになつてしまつた。

「コメント、は出来ないか」

特に面白かった日記にはつい何か言葉を残したくなつたけれど、さすがにそれはまだ無理なようだつた。

コメントがついている日記はいくつかあつたから、機能としては存在しているのだろうけれど、今のわたしには使えないらしい。残念だけど仕方ない。

人のブログが読めるようになつただけでも大きな進歩だ。

「あれ、そうだ、わたしがブログ作るのは無理なのかな」

途中でふと思いつき、メニューからブログを選択した時に初めに出てくるページへと戻る。

新着日記のお知らせで埋め尽くされた画面の隅っこに、『日記を書く』との一文を見つけ、わたしは迷わずその文字に手を触れた。

内心予想していたエラーが発生することもなく、あっさり新しいページが開く。

出てきたのは、下に投稿ボタンがついただけの真っ白なページ。

「ど、ど、どうすれば」

先に引き続いてあまりに順調な展開に余裕が無くなり、おろおろ吃りながら呟くと、そのままわたしの言葉が文字となつて白いページに表示された。

すぐに音声入力システムか、と気付いて落ち着き取り戻し、試しに何か書いて投稿してみることにした。

書きたいことは沢山あつたけれど、なるべくシンプルに分かりやすく、更に人目に触れる場所に投稿することを考慮して、特定の誰かを非難することの無いよう心がける。

そのため今の自分の状況について書いているのに、緊張感や危機感に欠ける内容になってしまった。

「もうちょいつけたそつかなあ。

いやでも同情買つのはやだし、ん、こんぐらいでいいか」

今の自分の寂しさや大変さをアピールしたい気持ちが無かつた訳じゃ無いが、そうすると最初にわたしを拉致した二人組を暗に非難することになりそつたのでやめておく。

誰にも会わぬうちに、対人関係に問題を抱えるのは御免だ。
この記事が万人に見られるなんてことは無いだろうが、気を遣う
に越したことはない。

一番最初にタイトルっぽい一文を加え、ぽちりと投稿ボタンを押すと、画面が切り替わり投稿完了の文字が浮かび上がる。

どうなったか確認するために再び最初のページに戻ると、新着日記一覧の横に自分専用のスペースが増えている。

新着日記の中にもわたしが書いたものが加わっており、ぽちんとそれを選択すると他のブログと同じように記事が展開される。
大きな群れに仲間入りしたみたいで、なんとなく嬉しい。

「コメント、つくといいなあ

つきつきしながら画面を閉じる。

が、初めて誰かとの意志疎通が成立しそうな予感に、なかなか落ち着くことは出来ず、しばらくブログを開いてはコメントが来てないのを見てがっかりする、なんてことを繰り返してしまった。

初めてネットの掲示板に書き込んだ時みたいだ、と自分の行動に苦笑いし、何十回見ても変わらないコメント欄を確認してからようやくコメントを使って誰かと交流することは諦めた。

「はるたんはるたんつ、見て見てこれつ」

自称『カメラマン』のハルベルト＝ハルベルタ、通称ハルがギルドの集会場で一人、撮り貯めた写真をせつせと整理している時のことだった。

ギルドのメンバーであり彼女の被写体の一人でもある七海が勢いよく扉を開いて飛び込んで来て、メニュー画面を展開させたまま上機嫌で駆け寄ってきた。

「なんや騒々しいなあ。

あ、この写真なかなかええやろ?」

呼ばれたハルは適当に返事をしつつ、ひらひらと一枚の写真をつまみ七海の目の前へ差し出した。

「うわー、やだ七海ちゃん可愛い、可愛いすぎる！
って、じゃなくてえつ！」

まらまらはるたん、このブログ見て見て！」

写真の中で可愛らしくポーズを決めた自分の姿に、一瞬つつとり見とれた七海だったが、すぐに我に返り自分の展開している画面をハルへとぐいぐい押し付けた。

「んーこれ写真無いやんー。

「うちが他人のプレイ日記興味無いん知ってるやろ」

いかにも気が進まないといった口ぶりで、しかししぶしぶ七海の前に表示された画面を覗き込み、差し出された日記に目を通したハルは、途中でぱあっと顔を輝かせた。

「ちよっとちよっとこの綺麗な写真のブログって、絶対つかのひとやん！」

いやあ嬉しいわー、見る由ある子やなあ。

へえ、慰められましたって、なこの子めつけや不憫やん」

途中触れられていた写真のことがおそらく自分のものだと確信し、やつと興味が湧いて改めて文章を初めから読み直すと、あまり他人に关心の無いハルも憐れみを覚えるような体験が、淡々とした言葉で綴られていた。

「ほり、あのお調子者ギルドがちよっかいかけてえ、オヒトヨシ様が指名手配かけた子だよー。」

新着日記巡回してたらまた偶然見つけちゃってや。

ダンツで田を惹く綺麗な写真なんではるたんのぐらうこドショ？

これは早く知らせなくちゃつて思つてさつー

七海えらいでしょー

えへへーと得意気に胸を張る七海の頭を撫でて、せつかくなので挨拶しようとハルは自らメニューを操作して画面を開き、ブログの新着記事一覧から先ほどのものを探す。

一ページ分遡ったところでそれらしきものを発見し、ござコメントを送信しようとすると、弾かれてしまつ。

「あらあ、フレンドのみの設定なつてなこのたなんでなんやひ

首を傾げ目線で問うと、それを受けた七海もハルの真似をして同じように首を傾げてみせた。

「七海も試したけどね、コメント出来なかつたの。

理由はわからぬけど、多分隠し部屋のせいじゃないかな

「いやあ、ほんま悪魔のあこの子。
残念だよねえ、とわほど残念そうでもない様子で、首を傾げたま
ま七海はこつこつ楽しげに微笑んだ。

一週間以上隠し部屋出れんなんて、あり得んやろ

「ほひ、と呆れたようにハルが呟くと、七海が待つてましたとばか
りに勢じよくペラペラと喋り出した。

「それがね、その子、多分まつさら初心者ちやんぽいの一。
ブログには書いてないけど、あのオヒトヨシ様がさあ、その子に
ついて分かつてるだけの情報、掲示板にアップしちゃっててえ。
チユートリアルも受けずにキラキラおめめでキヨロキヨロしてた
とい、お馬鹿さんたちに泣わかれちゃつたらしいよつ！
多分隠し部屋のセオリーも知らないんじゃないかなあ。
んつふふつ、可哀想にねえ」

「ああ、はいはい、オヒトヨシ様な

少し唇を歪めてハルが七海の言葉を繰り返す。
対する七海も、皮肉げな笑みを浮かべた。

「ほんと、オビトヨシ様も悪気が無い分タチ悪いよねえ。

純真無垢なのも程々じやなきや、悪意と変わらないのこい。

あ、信者サマたちにはナイショね」

人差し指を口にあて、茶田つ氣たつぶりにワインクする七海に、
ハルも片眉を上げて反応する。

「で、七海はこの子、気に入ったん？」

視線を手元に戻して写真の整理を再開しつつ、ハルが何気ない口
ぶりで質問する。

「まだ分かんないけど、要領悪そつなことか、前情報無しで来て
そうなとことか、かなり七海好みっ！」

あとはるたん気づいてた？

「の子あんだけのことされたのに恨み言一つも書いてないんだよ。
いつも下げずに相手を攻撃する言葉なんていっぱいあるのに、

偽善者っぽくてイイよねえ。

んふつ、からかって遊んだら楽しそー。

とにかくオヒトヨシ様んとこに取られるのだけはやだなあ、つまんなくなっちゃいそだもん。

それだけは断固阻止っ！

あとねあとねっ

「分かつた分かつた、七海の好きにじい」

機関銃の「」とく喋り続ける七海の言葉を遮り、ハルは薄く笑う。写真に田を向けたまま、軽く放たれた容認の言葉に、七海はいといつと唇を吊り上げた。

「えへへ、はるたん大好きーっ！」

よーっし、『ブロガー』七海、頑張りまあっす！

待つててね、絶対はるたんファン連れてくるからー！」

最後にハルに抱きついて、七海はつまづきと軽やかな足取りで集会場の外へと駆けていった。

ギルド』一発芸』は、自称『写真家』のハルを筆頭に、ネタスキルに特化した人間と、七海が気に入つてスカウトしてきた人間で構成された集団である。

戦闘に役立つスキル持ちは極めて少なく、また『愉快犯』とは違つた意味でひねくれた人間が多いので、『さんふらんしそ』とはあまり相性が良くない。

特に七海は、運営に目をつけられないギリギリの線で人をおちょくり面倒事をばら蒔き、火の無いところに煙を立てて面白がり、果てはブログにその顛末を事細かに書いてアップしてしまうため、多くのプレイヤーに『愉快犯』以上の要注意人物として警戒され嫌悪されている。

しかし見た目は天使のように愛らしく、好んで着ているフリフリのロリータファッションがその外見に非常に良く似合つているため、その腹黒い中身とのギャップと相まって熱狂的な信者が少なからず存在するのもまた事実である。

「うちにオヒトヨシ様にお調子者に、この子もえらい目をつけられて大変やなあ。

珍しいスキル持つてたらええけど

広い集会場にぽつんと一人取り残され、大変そうとは言いながらさほど気持ちのこもらない声で呟いたハルは、一枚の写真を手に取った。

最近撮った中では一番気に入っているもので、ブログには載せず仲間内だけで楽しもうと思っていたもの。

少し考えてから、それをブログに貼りつける。

「頑張ってや、お嬢ちゃん。
うちの写真のためにも」

然り気無く激励の言葉を混ぜ、近い未来仲間になるかもしない被写体候補のために、新しい記事を投稿した。

そしてハルはそれきり、少女の存在を記憶の彼方に追いやってしまつ。

ハルベルト＝ハルベルタ。

彼女の興味の幅は非常に狭い。

そんな彼女にとって、七海や他のメンバーが起こす問題は些末なことだった。

ただ良い写真が取りたい、興味があるのはそれだけ。

さすがにギルドの仲間のことや、よくメンバーから話を聞くプレ

イヤーの話は覚えているし、聞いた話を忘れる訳では無い。
ただ再び話題にされない限り、自分から思い出すことは滅多に無い。

「今度は火山で水芸してゐる写真がええなあ。 大道芸スキル持ちの
子おはログインしてたっけね」

既に思考は次の写真の構想へと移つており、自分の写真が好きだ
という少女のことは、記憶の底へ沈めてしまう。

そんな彼女がトップに立つてゐるからこそ、ギルド『一発芸』は
成り立つてゐるのであり、彼女もまた、コジマとは別の意味で人を
惹き付ける人間だった。

メニュー画面を開いたものの、まだ少しブログに気を取られていたせいか、すぐに万能アンテナ作りを再開する気にはなれず、本を読んで気分転換することにした。

すっかりお気に入りになつて『俳句百選』を開き、特に好きなものを口に出して読み上げていく。

綺麗な言葉を紡ぐのは、人の言葉を借りても気持ちがいい。ゆっくり味わいながら、何度も言葉を噛み締めていると、久しづりにメニューバーがちかちか光っていることに気がついた。

「んんん、あれ、何が変わったんだろ」

メニュー画面を開き、ざっとスキルを確認するが、新しいものが増えた訳では無いようだ。

読み上げた俳句が歌として認識されたのかと歌一覧のページを開いてみると、特に変化は無い。

更には新しいページが増えたようでも無く、わたしは首を捻つてステータスをもう一度上からじっくりと眺めていく。

そしてようやく、全体的にステータスが上昇していく」と、種族の下に新しい項目が増えていることが分かった。

「称号、ひ、独り身？」

新しい要素が増えたことに喜んだのもつかの間、あまりに安直な名前のそれにがくつと頃垂れる。

特定の敵をいっぽい倒したり強いボスを倒すと、称号が貰えるっていうのはヘルプで見た記憶があった。

確かに称号になると、ある敵に対して強くなったり、ドロップアイテムが増えたり、なんていう恩恵が受けれるようになるらしい。

しかしあたしはボスを倒すどころか、まだ一度も戦っていない。むしろ武器すら握ったことが無いのだ。

称号イコール戦闘を頑張った証だと認識していたので、自分に称号がついたことに戸惑ってしまった。

もしかしたら戦闘じゃなくプレイスタイルによつてつくようになったのかもと思い直し、それでも特に心当たりが無いと首を捻りながら、何気なく称号の部分に触れてみた。

すると詳しい説明がぶわっと田の前に飛び出してきた。

称号：独り身

発生条件

一定期間他プレイヤーと相対せず過ごす
その他一定の条件を満たす

効果

周囲半径30m以内にいる他プレイヤーの人数に応じてステータスが+30%～-70%の間で変動する。

パーティーを組んだ場合、メンバーにも同様の恩恵が適用され、解散すると解除される。

尚、パーティーメンバーも他プレイヤーとして数えられる。

「えええ、なにこれひどい、全然嬉しくないいつ！」

最後の一文まで読み終え、あんまりな内容に思わず悲鳴をあげてしまつた。

これはつまり、近くに誰かいると弱体化する呪いみたいなもので、パーティーなんか組もうもんならみんな巻き添えを食らってその呪いを受けてしまう、ってことだろうか。

他プレイヤーの人数が多い程ステータスが上がるという可能性もないわけじゃないし、是非そつちであつて欲しい。

けれど残念ながら今まさに周りに誰もいない状況で、ステータスが大幅に上がってしまうこととその名称から考えて、周囲に人が増える程弱くなっていくものだと考へるのが妥当だろ？

だとしたら非常に意地が悪い称号だ。

誰かとパーティーを組むどころか、近くで一緒に狩りをすることも難しくなってしまう。

どれくらいの人数が居るとマイナスに傾いてしまうのか、もっと詳しいことが知りたかったが、説明はそれで終わりだつた。

この隠し部屋の中でステータスが上昇するのは非常に嬉しい。

空腹でのステータスの減少は痛かつたし、器用が上がればもっと質のいいアンテナも作ることが出来るだろう。

しかし外では殆どの場合マイナスにしか働かなさそうなこの称号を外す方法が、今すぐにでも知りたかった。

自在に称号を外すことは出来ないのかとステータス画面のあちこち触つてみたが、特に変化は見られない。

久しぶりにヘルプを開いて、改めて称号の部分を読み直すと、一度取得した称号は別の称号を得た時にどちらか選んで変更するか、何らかのスキルで消すしか無いとしっかり書かれてあつた。

「うわあ、やつぱり呪いだよこれ」

散々な結果に、頃垂れるbxjではなく、べたりと床に転がり膝を抱えて丸まってしまう。

そのままjnjnirと左右に体を揺らし、あーとかもーとかうめき声を挙げ、くわくわした気持ちを発散させようとした。

しかし途中で、すぐにとは言わないけれどそのうちパーティーを組んで遊んでみたかったな、なんということをじつかり考えてしまい、余計に鬱々としてしまう。

今日は全てが順調にいつっていたので、いつの間にか調子に乗って浮かれていたらしく、反動でいつもより気分がずんと落ちてしまつ。

「こやこやこやこや、でも、ここ出るまではステータスあがつたまんまだし、うんやう考えればラッキー、うんわたしラッキーわたしはラッキーラッキー」

自分に暗示をかけるが」とく、ぶつぶつとポジティブなことを言い聞かせ続け、やがてそれが歌として認識されたくらいで、多少気持ちが落ち着いた。

出来た歌は運を5%上げる効果を持つていたが、改めて歌う機会

はおそらく一度とやつて来ないだろつ。

歌の消し方も調べなきゃなあと思いつつ、雑記帳を開いて今日新しく分かつたことを加えていく。

その作業もなかなか進まず、間違えては打ち直しを何度も繰り返したところで、今日はもう終わりにしようと決めた。

こんな状態では何をやっても上手くいかないだろつ。

四苦八苦しながら今日の成果を書き終えた後、また何度も間違いながらステータスを写していく。

称号が微妙なことに変わりはないけれど、ステータスのマイナス補正が少くなつたのは嬉しかつた。

元のステータスにさほどの変化は無いが、現状で反映される値が一気に増えたおかげで、少しは明るい気持ちになれた。

「明日も頑張るね、タロウおやすみっ」

増えた値をしばらく指でなぞつてから雑記帳を机の上に置き、ベッドに潜り込む。

天井を見つめながらお気に入りの俳句をいくつか読じ、タロウに声をかけ、ゆっくり目を閉じた。

九日目（雑記帳より）

体力：24 / 24 (28 / 28)
魔力：11 / 11 (13 / 13)
満腹度：0 %

筋力：4 (5)
知力：15 (18)
耐性：4 (5)
精神：10 (12)
器用：31 (36)
速さ：4 (5)
運：4 (5)

空腹でステータス50%減少
称号でステータス30%増加

睡眠：53 (睡眠時回復時間5.3%短縮)
空腹：76 (空腹時ステータス8.6%上昇)

読書：27 (読書力増加)

速読：42 (読書速度増加)

解析：28 (アイテムの情報判明)

歌唱：28 (歌の効果発現率2.8%)

作曲 : 16 (作曲力増加)

機巧 : 46 (からくり作成)

自然回復 : 16 (自然回復速度増加)

魔力操作 : 25 (魔力操作精度増加)

十日目。

今日こそは、誰かと言葉を交わしてみせる。

そう強く決意して、また材料作りから開始する。

手順は昨日と変えず、魔力を放出するスピードに気を配った。

太い糸は魔力が8で無事に光の色に変化が見え、満足のいく出来栄えだ。

他の材料も、組み立てに慣れたおかげか、ステータスが上がったおかげか、やたらとぴかぴか光るものになった。

金属板に丸みをつけるのは、まだまだ上手くいかない。

多分本当にちゃんと作るなら、型を用意しなければ駄目なんだろうな、と思いながらある程度のところで折り合いをつける。

他の材料の組み立ては恐ろしいくらいに上手くいった。

つい調子に乗りそうになつた自分を諫め、一気に魔力を注ぐ。

「よしつ、かなりいい感じ」

光の中から姿を見せたのは、昨日よりも一回り大きく、ちゃんと
パラボラアンテナの形をしたもの。

所々歪み、何年も雨ざらしにされたようなくたびれた雰囲気を醸
し出していたが、紛れもなく万能アンテナだった。

昨日作った万能アンテナと並べて机の上に置き、ついでに一番初
めに作った簡易アンテナも気休めに出しておく。

いきなりチャットや掲示板には手を出さず、まずはブログを開く。
日に飛び込んでくる新着日記一覧は、明らかに昨日とは違つてい
た。

殆ど文字化けしていない。

「うふふふ、分かる、名前もスキルも分かるつ

にやにやと口元が緩み、田口ついた日記を開いて指で文字をなぞ
つていく。

あと分からるのは、おそらく街やダンジョンの名前だけ。
内容を理解するにはもう十分なレベルだった。

ついつい読みふけりそうになり、はつと思いつつ直して開いていた日

記を閉じる。

後でじっくり読めばいいのだ。

今はそれより先に、することがある。

何度か深呼吸をしてから、情報掲示板の文字にゅっくじと触れた。Hラーは出ず、すぐに画面は切り替わり、ぱぱっと画面こっぱいに掲示板の親記事のタイトルが並んだ。雑談っぽいのと攻略情報っぽいものが混じつており、どれもそこそこの返信がついている。

こんな状況ではあるけれど、いきなり攻略情報に手を出すのは抵抗があるので、だれでも参加出来そうな『シリトリリアルファンタジー』という記事を展開させるべくタイトルに触れる。するとブブーといづ聞きたくない音と一緒に、Hラーの文字が浮き上がる。

「え、Hラー……。

ほんと意地が悪いーーー！」

書き込みは出来ないかなとは思っていたけれど、まさかHでHラーが起きるとは思っていなかった。

あと少しなのに、とんだおあずけを食らってしまった。

他の記事は無理かと一応目に入る全てのタイトルを触つてみたが、エラー音がただむなしく響くだけだった。

すっかりやる気を削がれてしまったわたしは、しょんぼりしながら掲示板のページを閉じ、全く期待せずにチャットを開く。参加人数が表示されたいくつものチャットの名前が浮き上がりてくれる。

ここまでは初日から来ることが出来た。

特に吟味することもなく、適当にひとつの中屋の名前を触る。すぐに、参加しているプレイヤーの数とチャット上の注意がずらずらと表示された。

きっとここでまたおあづけなんだろうなあ、と何気なく入室ボタンを触った。

するとわたしの予想に反してエラー音は鳴らず、「氣づけば沢山の椅子が円の形に並べられた狭い部屋の中にわたしは一人立っていた。何の心構えもしていなかつたわたしは、一瞬惚け、それから大いに焦つた。

この状況は、アバター付きの音声チャットをした時に似ている。つまり、なにか。

わたしは、誰かと言葉を交わす手段に辿り着いたってことか。それに気づき、つい大声をあげそうになつたが、誰かが聞いてるかもしれないと思い慌てて片手で口を押さえる。

空いた方の手で胸を押さえ、ふーっと長めの息を吐いてから、改めて部屋を見回した。

確かに入れたのだが、誰も居ない。

何人か居ると表示されていた筈なのに、気配すら感じない。

「あのー、どなたかいらっしゃいませんか？」

恐る恐る小声で呼びかけてみるも、何の反応もない。

これは、部屋に入れるけど会話は出来ないというがつかりサプライズかと氣を落としつつ、数度声をかけてみたが結果は一緒だった。仕方ないので部屋を出ようと、扉へ向かう途中、一つの椅子の背中に小さな紙が貼られているのに気付いた。

一体何だらうと、近づいて確認する。

『七海：一時離席中』と、そこには書かれてあった。

「みんな離席中つづつといい、けどこれつてまだ希望持つていいいのかな」

部屋に置かれた椅子の背中を全て確認し、四人の名前と離席中の文字を発見してがつかりするも、気を落とすにはまだ早いと思い直してすぐに部屋を出る。

そして今度は念入りに、参加する部屋を吟味していく。

初日に確認した時より、全体的に人数は減っていた。

一番多い部屋でも六人しか居ない。

初日は十人を超える部屋がいくつかあつたのにと思いながら、その六人が居る部屋に入室した。

「うわあ、また離席中？」

しかし中には誰の姿も無く、先ほどと同じように椅子に離席中の文字が表示されている。

やつぱり、万能アンテナの質が悪いせいで、本当は誰か居るのにわたしには離席中としか写らないんだろうか。

さつきの部屋と合わせて十人、全員が揃つて離席中なんて、普通はあり得ない。

掲示板が覗けなかつた時より意地が悪い仕様だと落ち込みながらも、幾つかの部屋をまわつてみる。

無人、無人、無人。

三つ目の部屋で、わたしはがっくりと膝をついた。

これはなかなか、精神的にくるものがある。

蹲つたまま涙をこらえ、気持ちを落ち着けてから部屋を出た。

次、誰も居なかつたら諦めよつ。

そう心に決め、わたしは一つの部屋を選び、誰も居なくて当たり前と自身に言い聞かせながら、入室の文字を素早くなぞつた。

「そうだよねそんな上手くいく訳ないよね」

人気の無い部屋で、わたしは力なく笑つた。

やはり今の万能アンテナじや、チャットは出来ないようだ。

大丈夫、確実に目標には近づいてる。

明日にはきっと、掲示板も開けるようなものが作れるはずだ。
そのためにもさつさと気持ちを切り替えようと、部屋の扉に手を
かけた時に、背後でがさりと何かが動く音がした。

ぎしりと身体が固まり、一瞬頭の中が真っ白になる。

もしかして、との期待で心拍数が一気に上がり、息が上手く出来
なくなつた。

落ち着こうとすつと息を吸つたと同時に、あつさり声をかけられ
た。

「あーっ、初めての子だー！
ねねねっ、お喋りしよっ！」

屈託の無い声に、わたしは勢いよく身体を回転させた。
そこに居たのは、綺麗な顔をした男女の二人組。
どちらもここに笑っていて、わたしにキラキラした眼差しを向
けている。

紛れもなく、このわたしに声をかけてくれている。

何か話さなくては、返事をしなくては、と焦りに支配される。
失敗して、出ていかれたくない。
もつといろんな言葉を投げ掛けでもらいたい。
そのためにも第一印象が大事だと、無理矢理笑顔を作つて口を開
く、が。

「はは、はじめまじでえええ。
「あああん、ひと、ひとだああああー！」

盛大に失敗してしまった。

わんわん声をあげて泣くわたしを見た一人は、ぎょっとした顔でこちらを見ていたが、女の子がおずおず近づいてきて、よしよしと頭を撫でてくれる。

それが嬉しくて、ますます激しく泣いてしまう。

結局、困り顔の一人に見守られながら、わたしは長い間泣きわめき続けた。

「ほんとすみません、取り乱しちゃって」

ようやく泣き止んでから、わたしは一人に頭を下げた。

二人は互いに顔を合わせ、何やら田で会話してから改めてわたしに向き直った。

「いいよいよー。

ねね、シトロネラちゃん、もしかして、変な一人組に泣われちゃつた子?」

「じんと首を傾げて、女の子がわたしに尋ねた。

「どうして知ってるのだろうと不思議に思いながらも、こくりと頷くと、一人は一気にわたしとの距離をつめ、大変だったねえと労いながら、ぽんぽん背中や肩を叩いてきた。

暖かくてまたじわりと頭が熱くなつたけれど、ぐつと飲み込んで、おずおず口を開いた。

「えと、シオリーナさん」「ギギアルさんですよね。
なんでわたしのこと、知ってるんですね？」

入室前に確認した名前を思い出しながら疑問を投げ掛けると、二人は驚いた顔になり、男の方、おそらくギギアルさんが、逆に疑問を投げ返してきた。

「あー、シトロネラちゃん?
もしかして君、掲示板見てない?」

見たくても見れないんです、とは口にせず、「うそつん頷くと、一瞬、ギギアルさんの顔に呆れが浮かび、ついではつと何かに気が付いたよつの表情になつた。

「見てないんじゃなくて、見れない？」

まさにわたしが言いたかつた言葉を当てられ、ぶんぶんと激しく顔を縦に振ると、シオリーナさんとギギアルさんはわたしを挟んで田で会話し、無言で椅子を勧めてきた。

わたしがそれに腰を下ろすと、一人もそれぞれ近くの椅子に座る。

「つと、掲示板にね、シトロネリちゃんのこと書かれてるんだ。名前と連れ去られた経緯全部。だから君、ちょっとした有名人なの」

ギギアルさんの言葉に、わたしは顔色を悪くする。
そんなことになっているなんて、予想もしてなかつた。
きっと情けない顔になつっていたのだろう。
シオリーナさんが慌ててフォローしてくれる。

「違う、違うんだよッ！」

悪氣があつて晒してやるーってのじゃなくつて！

シトロネラちゃんが見つかつたらみんな保護したげてねつていう
お願い？

心配してゐからの非常手段、みたいな？」

わたわたく手を振つて説明する姿に、やさぐれかけた気持ちが和
んだ。

だけど、心配してくれるのは有難いが、掲示板で晒されるのは嬉
しくない。

そんなわたしの気持ちを汲んでくれたのか、更にフォローの言葉
を重ねようとするシオリーナさんの口を、ギギアルさんがやんわり
と手でふさいだ。

「ま、それとは関係なく、協力するよ。

俺たち、このゲームそこそこ長いから、役に立たないってことは

な」と思つし

な、とにかく笑つて話題を逸らせたギギアルさんと、口を押さえながらもこくこく首を縦に振るシオリーナさんにすっかりやられたわたしは、一人にうまく誘導されながら、今まで自分の身に起こったことを洗いざらい話してしまった。

すっかり逆上せてしまったわたしは、筋道立てて喋ることが出来ず、あちこちに話が飛んで非常に聞き難かつたことだらうと思つう。

しかし一人は嫌な顔ひとつせず、質問を挟みながらわたしの話を理解しようとしてくれる。

それに感激して、途中何度か涙ぐんでしまい言葉が途切れがちになつたが、それでも根気よくわたしに付き合つてくれた一人は、本当に出来た人たちだ。

ついてないと思つていたけれど、チャットで一番最初に一人に出会えたわたしは、もしかするとかなり運が良いのかもしれない。

知らないことじがこっぽい

「シロちゃん、ついてないねえ。

ちよっぴりお間抜けさんなのを差し引いても、つこてなさずめる
よ。

でもでもシロちゃんも危機感が無さずさだよー！
危ないよー！」

一通りわたしの話を聞き終えたあと、シオリーナさんにめりと可
愛らしく叱られた。

わたしも自分が迂闊だったと反省していたので、大人しくそれを
受け入れる。

嫌味たらしく言われていたら、ムッとしていただらうが、シオリ
ーナさんから悪意は感じられず、ただわたしを心配する気持ちだけ
が伝わってきた。

初対面のわたしにビックリしてしまって、と思わないでもなかつたが、
素直に嬉しかつた。

「ヘルプに載つてなこととも山ほどあるしな。

しつかし、まさか擬似イベ知らずに飛び込むなんて本つ当に無謀だよ、シロちやん」

ギギアルさんに心底呆れたように首を振られ、恥ずかしさで身体を小さくすくませた。

いつの間にか二人がわたしをシロちゃんと親しげに呼んでこむじとが、照れ臭かったのもあり、ほつと頬を赤くする。

それを見たシオリーナさんは「いっ」という掛け声と一緒にギギアルさんの頭にチョップを繰り出し、『わーっとわたしを抱き寄せる。

「もーギルは言い方が冷たいのー。」

シロちゃんが怖がるでしょー!」

ねーっと同意を求められ、わたしは困って視線を彷徨かせた。ギギアルさんはそれをはいはいと軽く受け流し、先へと進める。

「隠し部屋でそんなに足止めされることはまず無いんだよ。基本的に半日もかければ誰でも出れる仕組みになってるはず。

多少シロちゃんももう田の条件は満たしてゐると思つてだよな。

シオリ、どう思つて？」

話を振られたシオリーナさんは、わたしを離し、じょろく考えこんでから口を開いた。

「あたしもそーだと思つ。

シロちゃんたまたま擬似イベに引っ掛けたけど、普通こんなぶつ続けプレイ出来ないしー。

シロちゃん、きっと初歩の初歩見落としてるんじゃないかなあ

そこまで話すと、シオリーナさんはちょっと待つててね、と言いつけ残し、部屋から出て行つてしまつ。

ギガルさんは親切で優しそうな人とはいえ、会つて間もない人と閉じた空間で一人きりというのは緊張する。
気まずいと思っているのが顔に出たのか、ギガルさんは頭をぽりぽり搔いて苦笑いをした。

「シオリ、多少ダンジョンに詳しく述べ呼びに行つただけだから、すぐ戻るよ。

その間シロちゃんが全然知らないっぽい擬似イベのことでも説明しようか

ね、と爽やかに提案され、わたしはおずおず頷いた。

ヘルプでおおよそは分かつていていたつもりだったけれど、知らなかつたことばかり聞かれ、最低限のことしか公式には説明されていないことを知る。

中でも一番驚いたのが、擬似トリップイベント中のゲーム内での記憶は、殆ど現実に持ち越せないこと。

現実での六時間で体験しても差し支えない程度に削られ薄められるので、楽しかったとか大変だったくらいしか覚えていられないらしい。

「普通に考えて六時間に二ヶ月分の体験放り込むなんて無理だろ？
脳に負担がかかっちゃうし、リアルの生活に支障が出ちゃうしね。
だからブログは毎日細かくつけた方がいいよ、こっちで何したか
確認出来る唯一の方法だから」

そう説明されてみれば確かに、じく当然のようだと思えた。

しかし、それって果たしてゲームとして楽しいのだらうか。そのままギギアルさんに質問すると、また苦笑いをされる。

「だから微妙に不評みたいだよ、このイベント。

三ヶ月ずっと参加するやつなんてかなり少ないし。

俺は好きなんだけどね、後でブログ読み返すと楽しげに、追体験

で一度美味しいし。

あ、ログインしたら思い出すよ、ちゃんと。

ログアウトしたらまた忘れちゃうけどね。

ゲームの記憶と現実の記憶は別のことに保存されている感じなんだよ」

ふむふむと頷いてみせたが、実はよく分からない。

実際一度ログアウトしてみないと、感覚として理解出来ない気がする。

そんなわたしの分かったふりを見破ったのか、ギギアルさんはうーんと少し考えこんでから、わたしにある提案をした。

「シロちゃん、試しに、やうだなあ。

五年前の記憶思い出せる?」

奇妙なことを、と考えつつ、素直に思いだそうとしてわたしは驚いた。

中学生だったことは思い出せる。

何人かの友達の名前も思い出せる。

しかしそれ以外が全く浮かんでこない。

怖くなつてギギアルさんをすがる様に見つめると、ね、とこうこり返された。

「それがゲームの記憶。

直接ゲームのプレイに関係ないことは自動的に排除されてるんだ。
あ、そんな泣きそうな顔しないで。

つまり今の俺たちは、ゲーム用の擬似人格なの。

現実とある程度記憶を共有するから勘違いしそうになるけどね」

VR MMOプレイ時に、直接脳とリンクせず間にクッショングを置くというのは知っている。

擬似人格というのも、知っている。

しかしもつと単純に、痛いとか辛いとかを現実に持ち込まないようにするためだけのものだと思っていた。

これほどにゲーム用にカスタマイズされているとは、驚きである。

一応の理解は出来、落ち着いたところでシオリーナさんが小さなエルフの男の子を連れて帰ってきた。

男の子はわたしをじろじろと眺めた後、ふんと鼻で笑った。

「こいつが、例の馬鹿？
超ブスじゃん」

あからさまに悪意が込められた声に、わたしは思った以上に打ちのめされる。

シオリーナさんたちが優しかったものもあるが、人の悪意に触れるのが久しづりだったせいもあるのだろう。

ブログには罵倒でもなんでも構わないから誰かと話したいと書いたものの、実際体験してみるとそんなのは嘘だったと悟る。自分でも驚くくらい、がつたりやられてしまった。

落ち込んだ気持ちを語られないよう、曖昧な笑みを浮かべ黙っていると、男の子は綺麗な形の唇を歪め、更に何か言い募ろうとした。が、シオリーナさんに首根っこを掴まれ、ぶらんと宙吊りにされ

てしまった。

「キーチつ！

毒づくなつてあれほど言つたのにバカバカつ！」

きつと目を吊り上げ口をわなわな震わせるシオリー・ナさんは、怖い顔をしている筈なのにどこか可愛らしげ。

そのせいがキーチと呼ばれた男の子は全く怯むことなく言い返す。

「ふん、本当のことだろ。

離せよバカリーナ」

はんつと嫌味っぽく笑つたキーチくんだが、一いちらも首根っこを掴まれているためいまいち様にならない。

一人はしづらげきもと睨み合つた後、ほぼ同時に口を開いた。

「もおーっ！」

「なんでそんなに可愛くなーのー。」

「だから離せつつつてんだろバカ」

『あやこ』と賑やかな口喧嘩が始まり、どうしようとおもおもしていふと、ギギアルさんにぽんぽんと肩を叩かれた。

「アホ一人はしばらく放つておー」

ね、とにつこつ笑つたギギアルさんは、相変わらず爽やかだつたけれど、何故かぶるつと背筋が冷たくなる。

これが腹黒いといふことか、なんて馬鹿なことを思しながら、き

やんきやん言い争つ一人を見守ることにした。

順風満帆とはいかない

ギギアルさんは宣言した通りしばらく一人の好きにさせた後、言葉の応酬が途切れた所にするりと入り込んで一人をたしなめる。シオリーナさんもキーチくんも、むすりと黙り込んだが、再び言い争いを再開させることは無かつた。

手慣れていると感心しながら見ていると、突然視界が切り替わった。

「え、え、え？」

三人の姿は消え、わたしはこの十日間ですっかり見慣れた部屋の真ん中に突つ立っていた。

慌ててメニューを開き、チャットからさつきまで参加していた部屋を探し、ぽんと触れる。

しかし、エラー音が鳴り響くだけで、画面が切り替わらない。

わたしは焦つて、何度も何度も指で部屋の名前を叩いたが、結果は変わらなかつた。

わたしはやや取り乱しながらも、ブログを開いて中身が読めるか確認する。

文字化けの割合は明らかに増えしており、スキルや名前はまだ読みなくなっていた。

だが、自分でブログを書くことは出来たのだが、少しうまさない。

「一体どうしてこんなことこの、と考えながら、今日作った万能アンテナを手に取る。

ぱっと見た感じでは特に変化は無かったが、ひっくり返してみると、一部が真っ黒に変色しているのが分かった。

おそらくこれが原因なのだろうが、そもそも何故こんな変化が現れたのかが分からない。

「つと、香氣に考えてる場合じゃなかつた

わたしは万能アンテナを机に置いて、メニュー画面を開きフレンドの項目を選ぶ。

「からからフレンド申請は可能だったことを思こ出し、シオリ

ーナさんとギギアルさんに急いで友達登録して欲しい、チャットからいきなり消えたことへの謝罪を添えて送った。

キーチくんにはあまり良く思われてなさそうだったのでやめておいた。

すぐに返事は来なかつたので、少し不安に思いながらも、次の行動に移る。

また万能アンテナを作ろうとして、ギギアルさんたちの話を思い出し、手を止めた。

わたしは、もう既にここを出る手段を持っている筈なのだ。

万能アンテナを作ればまた、誰かと喋ることが出来るだらつが、ここから出られる訳じゃない。

目的を取り違えるべきでは無い。

「一田田から出来た」と、うーん

ベッドに座つ、この部屋に閉じ込められてからのことと細かく思い出してこぐ。

混乱して、ヘルプを読んで、後悔して、本を読むつとめやめて、ふて寝して。

「そうだ、『リアルファンタジーの歩き方』の下巻、読んでないつ」

スキルレベルも上がらないし、ヘルプに載っていることばかりだからと必要が無いと判断し、読むのをやめたあの本。あれこそ、ここに入つて一日以内に出来ることというキーワードに、ぴったりな気がする。

わたしは急いで本棚に駆け寄り、目的のものを探し、椅子に座つて手早く目を通していく。

もう既に気持ちはここから出た後に飛んでいて、レベルの低い本なのに読み終えるのにかなり時間がかかつてしまつた。

そしてやつと最後の一文を読み終え、わたしは期待を込めて部屋をぐるっと見回した。

何の変化も起きていない。

念のため、本を片手に壁を隅々まで調べてみたが、やはり特に変わつていなかつた。

これが正解だと半ば確信していたこともあり、ショックはかなり大きかつた。

はあ、と深いため息をつき、ぺたりと床に座り込む。

他に何があつたか思いだそつとするが、なかなか頭が働いてくれない。

本当に出られるのかと自信を無くしかけた時、シュンとこう音と共に目の前に小さな画面が開いた。

「シロひちゃん、聞こえるーっ？」

聞こえたら返事するか、ウイングの枠触つーっ

シオリーナさんだつた。

画面にはシオリーナさんの顔が写っていたが、視線は宙をつらつらさまよっていて、わたしの姿は見えていないようだ。

「はい、聞こえます！

さあはすみません、アンテナ壊れたみたいで！」

急いで返事をした瞬間、画面の中のシオリーナさんとじばつじばつ田

が合ひ、次いで一つ画面が開き、それぞれにギギアルさんとキーチくんの姿が写し出された。

「えへへ、フレンド申請ありがとー！
これからよろしくねっ」

シオリーナさんの満面の笑顔に、落ち込んだ気持ちが一気に浮上する。

ついでに「ここ笑つて」と、横からキーちゃんにまつやられてしまった。

「はつ、馬鹿面晒してこい気なもんだな」

心なしか先ほどより冷たい声に、ひゅうっと息を呑む。わざわざ向こうから連絡をせて囮々しかつただろうかと小さくなると、ギギアルさんがくすくす笑いながらフォローしてくれた。

「キーチね、拗ねてるんだ、自分にだけフレンド申請来なかつたか
「ら」

「なつ、違えつ！」

慌ててギガアルさんの言葉を遮つたキーチくんだが、うつす
ら頬が赤くなつていた。

もしかして嫌われていた訳では無かつたんだろうかと、その反応
に少し調子に乗つて、こつそりフレンド申請を送つてみる。
キーチくんは一瞬表情を変えただけで、特に何も言わなかつたけ
れど、ちゃんと了承してくれたようだつた。

少しだけ、キーチくんがどういう人か分かつたような気がした。

シトロネラの姿が急に消えてしまった部屋で、残された三人は驚きに田を見開いた。

通常、チャットの部屋から退室するには扉を潜るしか方法が無い。いきなり姿が消えるのは、外部から強制的に接続を断たれた時くらいなのだ。

「シロちちんログアウトさせられたのかなー？」

頬に指をあて、じてじと首を傾げシオリーナが呟いた疑問に、ギアルは曖昧な意見を返す。

「そうだな、だけどまだ十日田だぞ。
現実じゃ一時間も経つてない。
よつほど切羽詰まつた状況ならあり得るが

せめて一人暮らししかそうでないかくらいは確認しとけばよかつた
な、と軽く肩を竦めてみせる。

キーチはそんな二人のやり取りをうるんげな表情で見つめた後、
くるりと踵を返して部屋の扉へと向かう。

「あーっ、キーチビリ行くの？」

軽い非難の色がこもった声をシオリーナがその背に投げかけると、
ぶつきらぼうな調子にでフレンド、とだけ返してそのまま部屋から
姿を消した。

どうこうこと、とギガアルに視線をやると、どこか画面や立派にこ
やりと笑う顔があった。

「あいつ、シロちゃんからフレンド申請送つて来てないか確認して
行つたんだよ。

隠し部屋に飛ばされたんならあり得る話だろ?
こやこやこや、やつさしこねえキーチくんは

さも愉快そうに笑うギギアルは、先ほどシトロネラと相対してい
た時とは雰囲気を一変させており、とても人の良さそうな人間には
見えなかつた。

シオリーナはそんな彼に特に反応することもなく、どこか楽しそ
うに話を続ける。

「あたしもシロちゃんとフレンドになつておきたいな。

そしたらきっと、ゴジマ様と仲良くなれるチャンス増えるよねっ！

掲示板に情報流して心配するくらいだもん。

ギルはやっぱメルチエちゃん？

」

ギギアルとは違ひ、先ほどまでと全く同じ様子で打算を口にする
シオリーナに、ギギアルはにやりと笑つてみせた。

「メルチエも魅力的だけど俺は愉快犯狙い。
あいつらみんな可愛いしな、馬鹿で」

貶してくるとしか思えない言葉にも、特に反発することなくシオーナはにこにこ頷いてみせた。

「あそこら辺まいんな取り巻き多くてガード堅いもんねつ。
ああん本当にシロちゃんに会えてラッキー！
やつぱりたまにはチャット利用するもんだねつ」

胸の前で両手を合わせ、うつとうとした表情を浮かべたシオーナの言葉に、ギギアルも同意した。

シトロネラには説明しそびれたが、チャットを利用する人間はあまり多くない。

部屋だけは確保しておいて、作戦会議をする時に使われたり、遠くにいる相手に装備を自慢する時に使われるくらいで、それもそう頻繁には行われない。

中ではメニューの殆どが使えなくなるのも、チャット離れに拍車をかけている。

シオーナとギギアルも、今日はまたまたチャットを使ったが、利用頻度は高くない。

「そだそだ、早速ゴジマ様に知らせなきやつー。
掲示板にレスしたら見てくれるかなつ？」

嬉々として部屋を飛び出しかけたシオリーナを、ギギアルが慌てて引き留める。

「待て待て待て。

俺のフレンドこ『せんぶらんしゃい』のメンバーが居るからついに繋ぎを頼む。

掲示板はやめとけ、シロちゅんにばれたら嫌がられるぞ」

先ほど掲示板に情報が載せられていると皆見た時の反応を思い出し、シオリーナはあっさり引き下がる。
シトロネラにまだ嫌われる訳にはいかないのだ。
出来ればもっと信用してもらつのが望ましい。
目的の相手と親しくなるまでは。

「それにしてもキーチ遅いね、何してるんだろー」

再び椅子に腰を下ろし、足をふらふらさせながらシオリーナが首を傾げる。

フレンド申請が来ていなか確認するだけなら、とっくに戻ってきていてもおかしくないだけの時間は経っている。

「多分申請が来てなくて、通信に強いやつに何とかならないか確認してるんじゃね？」

ああ、分かつてると思つけど、キーチには言つなよ、やつさの。あいつ変に真面目だから」

ギギアルがにやりと笑つて念を押すと、シオリーナははーーと元気に返事をし、一人で田を合わせてくすくすと笑いあつた。

ダークエルフのギギアルとシオリーナ。

兄弟のようによく似た優しげな顔をしており、ギギアルは細いな

がら鍛えられた身体を、シオリーナは大きな胸と尻に括れた腰、すらっと伸びた手足を、つまり異性の目を惹きやすい身体を持つている。

ギルドには所属していないが、交友範囲は広く、そこそこ有名な二人組である。

さほど悪い噂は聞かないが、その交友範囲に有名人が不自然な程多く含まれているため、一部からは敬遠されている。

現実では全く関わりの無い二人だが、目的が似ているためにいつしか一緒に行動するようになった。

すなわち、いい男といい女にちやほやされたいがために。他人の権威を借りて楽しく遊びたいがために。

似たようなプレイヤーは他にも居るが、この二人ほど意図を悟らせず、上手くやっている者は少ない。

そんな一人にとって、すっかり有名人となつたシトロネラは恰好の標的だった。

「もつともつと、仲良くなろうね、シロちゃん

えへへと笑つて呟いたシオリーナの声は、さつきまでと何も変わらないのに、どうりと暗いものが含まれていた。

「それでシロちゃん、そこから出る方法はもう見つかった？」

心配そうに尋ねてきたシオリーナさんに、首を横に振って応える。そつかあと残念そうにため息をつき、しばらく何か考え込んだ後、田をきらりと光させてシオリーナさんがある提案をしてきた。

「そだそだ、シロちゃんの情報、掲示板に出回ってるって言つたよね？」

良かつたら、投稿した人に消して貰えるように言おつか？

シロちゃんすぐ動けなさそだし、ねつ

「

シオリーナさんの申し出は非常に有り難いものだった。

本當ならわたしが直接その人にお願いするのが筋なのだろうが、今はその手段がない。

チャットに呼び出してもうつとも、また万能アンテナを作らなくちゃいけないし、かと晒つヒーローを出すまで放置しておくのも嫌だ。

「すみません、お願ひしていいですか？

心配していただけたのは嬉しいです、わたしは元気です、って伝えてもらえたるとすくすく助かります」

ペリット画面越しに頭を下げるとい、シオリーナさんは顔の前でひらひらと手を振り、照れ臭そにはにかんでみせた。

「困った時はお互いやまつ！

じゃ、早速お願ひしてみるねっ！

ギル、ダリアちゃんに連絡してもうひとついい？

ギギアルさんはその言葉に笑顔で頷き、わたしとキーチくんに断つてから画面から消え、少ししてから画面も宙に溶けるようにして消えた。

シオリーナさんも、また後でね、との言葉を残して一緒に居なく

なってしまった。

後に残されたのはわたしとキーチくんだけだ。

キーチくんへの苦手意識は多少薄れたものの、やつぱり『おまかせ』は残る。

しかし意外にも、キーチくんの方から話しかけてくれた。

「おい、あんま馬鹿晒してんじゃねーぞ」

しかめ面で放たれた棘のある言葉に一瞬怯んでしまったが、口が悪いだけできっとそこまで悪意はないのだと自分に言い聞かせる。だらしない顔になっていたのかもときりとした表情を作ると、キーチくんは微妙な顔でわたしを眺めた後、ふ一つと長く息を吐いて、がしがしと乱暴に頭を搔いた。

「つたく面倒くせえ。

いいか、あんまり他人に借りを作んな」

見た目は小さな男の子のキーチくんが、子供を諭すような口ぶりでわたしに話しかける。

ほぼ初対面のシオリーナさんたち、「あんなことを頼んだのはやはり図々しかったかと反省し、しおらしく謝つてみせるとまたため息をつかれる。

そうじやねえよと呟きながら、少し困った顔をしたキーチくんの様子に、わたしがつい吹き出しちゃった。

今ので完全に確信する。

この人は多分、かなり良い人だと。
わたしの図々しさに腹をたてたんじゃなく、わたしのことを案じてくれた故の言葉だったのだ。

確かに、久しぶりに人に会えて浮かれていたとはいっても、差し出された好意を疑いもせず嬉しげに受け取る様子は、端からみたら危なつかしく、間抜けに見えたのかもしれない。

「笑つてんじやねえつ！

本当に馬鹿なのかお前はつー！」

キーチくんは頬を赤く染めて悪態をついてきたが、もう全く怖くはなく、むしろ微笑ましく見えてしまうのだからわたしも現金なものだ。

ひとしきり毒づいていたキーチくんだが、わたしが全く堪えた様

子を見せず、嬉しそうにへらへら笑っているのに気づき、不貞腐れた様子で隠し部屋を出る方法へと話題を変えた。

「一回しか言わないからな。

隠し部屋を出る一番の手掛かりは部屋を解析することだ。
その名前こそが最大のヒントになる。

解析スキルは覚えてんだろう?

ならせつせとやれ

早口で一気に捲し立てられ、わたしはその勢いに流されるまま解析を試す。

部屋自体に解析を行う、とはなんともイメージが掴みにくかったが、いちいち説明させるのも悪いと思い、壁に手を当てすっかり慣れた部屋の全容を想像しながら、解析スキルを発動させた。

すると、部屋のちょうど真ん中にひらりと文字が浮かび上がる。

「ええと、機巧師の小部屋?」

わたしがそれを読み上げると、すかさずキーチくんの指示が飛ぶ。

「ならそこを出るのに必要なのは機巧スキルだ。

一定のレベルに達するか決められたものを作れば出られる。

今のお前の機巧スキルのレベルはいくつだ？」

きびきびした物言いに、慌ててスキルを確認する。

今日作った万能アンテナのおかげで、昨日より3上がって49になっていた。

それをそのままキーちゃんに告げると、おかしなものでも見るような目でまじまじと見つめられる。

「お前なあ、どんだけ……いや、いい。

そんだけあるなら、レベルじゃなさそうだな。

とりあえず作れそうなもん片っ端から作りや出れるだろ。分かつてるだろうが、作ったことないやつだぞ、いいな？
一回も作ってないやつな

よっぽどわたしが抜けて見えたのか、何度も作ったことのないものを作るように念を押してくる。

そこまでじやないのこと心の中では思つたが、口に出せば神妙に頷き、丁寧にお礼を言った。

早速取りかかると思つたが、アドバイスしてもうこいつはなしでこちらから席を外すのは躊躇われる。

何よりも少し話していたかった。

しかし句を切り出したものが、悩んでしまう。

「ええっと、ほんとこ、本ひ当ひありがとうござります、

困つたわたしは、再びお礼言葉を口にした。

するとキーチくんは不機嫌そうに顔をしかめる。

何度もしつこかつたかと焦つたが、彼の機嫌を損ねたのは別の部分だつたらしい。

「そのくせ丁寧な喋り方つかせえ。

普通に喋れ

むすりとしたまま、しかしほんのり頬を染めて、かしこまつた喋り方をやめるよつに言つ姿に、またじんわり笑いが込み上げてくる。吹き出しそう前に急いで笑顔を作り、キーチくんに話しかける。

「うん、ありがとうキーチくん」

それがなんとも照れ臭くて、思わず田線を逸らしてしまつ。キーチくんは、くんつてなんだよとぶつぶつ言つていたが、満更でもなさそりで、ちらりと視線を戻すとくつすら笑みを浮かべていた。

久しぶりにこんな友達の作り方をしたなと、甘酸っぱいものを胸に感じながら、わたしはキーチくんに気づかれないよつ、じつそりとその空氣を楽しんだ。

胸がわざわざ

「」の雰囲氣ならもうとこるんな話が出来ると踏んで、こぞ話しかけようとした瞬間に窓が二つ開いた。
シオリーナさんとギギアルさんだ。

「遅くなつて」めぐね、シロかやんつ」

顔の前でぱしづと両手を合わせ、あわてて両手を出して可憐ひつへ
謝られ、わたしは慌てて首を横に振る。

「キーチくんにいろいろ教えてもらつてしまたし、大丈夫です」

ちらりとキーちゃんを見てから笑つてみせると、一人は揃つて真顔になる。

すぐに笑顔に戻り、楽しげにキーくんをからかい始めたけれど、一瞬見せた表情怖かつたような気がして、少しだけ引っかかる。

何か不味かつたのだろうかと然り気無く一人の言葉に注意してみたが、特に何も触れなかつたのでわたしも深くは考えないことにした。

きつと驚いただけなのだろう、と自己完結し、さてどうしようかと三人のやりとりを眺めていると、タイミングを見計らつたかのようにギギアルさんから提案がなされた。

「シロちゃん、キーちから話聞いたならもう出る方法は分かつたんだよな？」

そこで提案なんだけど、出るのは明後日の朝まで待つてもらえないかな？

勿論断つてくれても構わないよ」

にっこり笑つて告げられた内容の真意が分からず、首を傾げてギアルさんとシオリーナさんを交互に見た後、キーくんの方を伺つてみると、彼もよく分からぬといつ表情を浮かべていた。

この通信を終えたらすぐにでも脱出に向けて取りかかろうと思つていたわたしとしては、ずるずる先伸ばしにされるのは嬉しいことではない。

しかし口にしてわざわざ打診されるとこいつとは、そうした方が

「いい何があるのだ？」とすぐ返事はせず、ギガアルさんの話に耳を傾ける。

「ダンジョン毎に隠しイベントがあつてね、それをクリアするとその後一時間くらいダンジョン全体に敵が出なくなるんだ。本来は回復やダンジョン離脱のために在る時間なんだけど、それをシロちゃんの脱出時間にしたらどうかって話が出てたわ。そこに出ですぐ敵にやられちゃうつてのも嫌だらうへん。」

確かに今のわたしじゃ街に帰りつゝ前にあつせりやられてしまつだろ？。

しかしどうせこいつかは死ぬこともあるだらうし、体験しておくれも悪くない。

街に死に戻れることだし、何よりそれだけのためにわざわざイベントをクリアしてもらうのも申し訳無い。

折角のご厚意ですが、と断りの文句を述べかけると、シオリーナさんに途中で遮られた。

「えつとね、シロちゃん。

実はシロちゃんのためだけじゃなくつて、ある人たちの仲直りも兼ねてるんだ」。

シロちゃんにはこいつの都合押し付けひやつて悪いんだけど、協力してもらえないかな?」

じいと潤んだ目で見つめられ、わたしはたじろいでしまう。断り文句を一旦引つ込めて、再び詳しい話を聞くことにした。

「んんっと、シロちゃんのこと掲示板に載せてた人がね、シロちゃん浚ったグループのことすつごく怒ってるの。でも浚ったグループの子たちも反省してて、シロちゃんにも怒つてる人にも謝りたいって言つてるの。

じゃあ、そのきっかけに、協力してシロちゃん救出のために一緒に戦つたらわだかまりも少なくなるかなあって、そんな話になつて。浚ったグループの一人がね、怒つてる人のこと大好きで、今すぐ落ち込んでるんだあ。

だからね、出来れば協力してほしいの」

聞かされた内容にわたしは黙り込む。

仲直りに付き合つ義理はないのだが、断ると厄介そうだ。

わたしが発端でぎすぎすした関係を放つておくのは後味が悪いし、何よりもそこまで話が進んでいるのを今さらやめさせるのも、後々面倒事を引き起こしそうである。

だけどやっぱり、胸がもやもやしてしまつ。
わたしは、泣つた人たちに對して、怒りも恨みもさほど抱いては
いない。

何の下調べもせず飛び込んだわたしの血業血縁な面が大きいくて、
腹を立てても事態が好転した訳でもない。

ただ間が悪かったのだと、割り切っている。
しかしだからと書いて、好意を抱いている訳でもないのだ。
出来るならあんまり関わらずに過ぎしたい。

むううと黙り込んでしまったわたしに、ギギアルさんが更に何か
言おうとして、キーチくんに遮られる。

「馬鹿かお前」。

なんでこいつがそこまで協力する義理があんだけよ、おかしいだろ

むすつと顔をしかめて、ふざけてんのかと呟くキーチくんの言葉
は乱暴だったけれど、わたしの胸のもやもやを少しだけ払ってくれ

た。

素直に領けないわたしが意固地なだけな気がし始めていただけに、それはとてもありがたかった。

ギギアルさんはキーちゃんの言葉に困ったように置を寄せ、ゆつくり言い聞かせるように遮られた話を続ける。

「そりやな、シロちゃんに負担かけるのはおかしいと俺も思うよ。
でもな、考えてみてくれ。
不本意だらうが、シロちゃんは有名になりすぎた。
遅かれ早かれあいつらからの接触があるのは避けられない。
それなら俺たちが立ち会つて一気に済ませた方がいいだろ？？」

な、と優しく諭すギギアルさんと、うんうんと頷くシオリーナさんには、わたしは返す言葉もなく、キーちゃんも黙り込んでしまった。そう言われたら、確かにそれが一番良いような気もしてくる。今すぐここを出て、バラバラにいろんな人に会いに来られることを想像してみた。

すごく面倒くさうだし、わたし一人で対峙するのも不安がある。

「じゃあ、すみません、お願ひします」

顔を上げにこつと三人に笑いかけ、深く頭を下げた。

現状では一人の提案に乗るのが一番良さそうだ。

ここを出るのが遅くなるのは残念だけれど、今さら一日くらい変わらない、はずだ。

シオリーナさんとギガアルさんはほつと安心したように笑みを返し、キーチくんは苦虫を噛み潰したような表情でそっぽを向いてしまった。

「じゃ、あたしたちは救出作戦詰めこいくねつ。

ほり、キーチもつ！

待つてね、あたしたちがシロウタさんのこと、必ず助けるからつ

！」

シオリーナさんに急かされるまま、三人の姿が画面から消え、やがて画面もふっと宙に消えて、部屋の中にわたしひとり残される。つい先ほどまで賑やかだったのに、まるで全てが幻だったのだと錯覚してしまったほど静まり返った部屋で、わたしはしばらく呆けてしまった。

今までと比べてあまりに密度の濃い時間に、改めて整理しようとしながら気持ちが追いつかない。

ぽんやりしたままメニューを開き、フレンドリストを確認する。

ギギアルさん、シオリーナさん、キーチくん。ちゃんと三人の名前が表示され、夢では無かつたことを教えてくれた。

「タロウ、わたし友達が出来たよ」

ぱつりと呟いた言葉は部屋こより響き、空虚に溶けていった。
嬉しくてたまらないのに、寂しくて悲しくて、自分の気持ちを持て余してしまつ。

衝動的に三人にまた通信を繋げそうになり、慌てて取りやめるも、
気になつて仕方がない。

「もうすぐ出られるんだよね。

せしたらもうと、いっぱい喋れるよね

タロウを手に取り、ぎゅっと抱きしめ自分にそつと聞かせる。
そのためにも、早くここを出るための何かを作つておこうと図鑑を開いたが、気が散つて全く集中出来なかつた。

しばらくわたしは使い物になりそうもない。
しかし寝る気分にもなれない。

「さうだ、ブログ」

ギギアルさんに言われたことを思い出し、メニューからブログを開く。

気持ちを落ち着けるためにも、ログアウトした後のためにも、今までのことをきちんと詳しく書いておこう。

最初に書いた日記では省いたことも付け加えながら、雑記帳も参考に、わたしは日記を書き連ねた。

出来る限り詳しく、今までの体験を書き込んで見直し、あまりネガティブに傾かないよう気をつけて、一日ずつに分けて投稿していく。

後から自分が読んで楽しめるように気を配るもの、人目に触れることを考えるとある程度表現も限られたものになる。非公開にすることが出来ればいいのだけど、少なくとも今の万能アンテナの精度では出来ないようだ。

そういえば現実に戻った時、どんな形でブログの内容を確認出来るのかを聞いてなかつたことを途中で思い出した。

ブログを書く作業を一回中断して、雑記帳に調べたいこと聞きたいことを思いつづけ加えていく。

「タロウ、どうしたんだろうね、わたし」

ふと手が止まつた瞬間、ぐるぐると胸に渦巻いていた不安が、ぐつと喉元までせりあがつてくる。

それを紛らわせようとタロウに話しかけた。

何が原因なのか、はつきりとは自分でも分からなかつたが、ただ

それとも、やつがまでの賑やかさとの落差がひどい寂しさだらう。

それとも、全く別の何かだろうか。

「そのままで強引に出でちゃ ええ良かつたかなあ、ねえ」

「一、深く息を止め、床にじりの上で寝て、ベッドの中身をばたばたする。

しかし全く気分は晴れない。

「うーと唸りながら、そのまま部屋中を『ん』『ん』転げ回る。

「あーなんだろ、変な感じ。すつこにもやもやするー」

いつもならこんな時は友達や家族と話をして気分転換を図るけれど、わたしのせいで何やら面倒をかけてしまった三人にまた連絡するのも気が引ける。

「ひょっとしてわたし、自分で思つてるよりあの人たちのこと恨んでるのかな」

何氣なく呟いた言葉だったが、それは思いの外すとんと胸に落ち着いた。

だらんと身体の力を抜き、自分の放った言葉についてよく考える。

わたしの自業自得だと思つてはいる、それは本当だ。

だけどどこかで、拉致した二人組が余計なことをしなければとも思つてているのも事実だ。

何にも知らなかつたわたしも悪い。

ろくに調べもせずゲームの中に飛び込んだ、それは確実にわたしの落ち度だ。

しかしだから何をしても構わないのか、全部わたしのせいで向こうは何にも悪くないのかつて言つたら、それはやつぱり違うと思つ。もしそうやって開き直られたらと仮定してみたら、ものすごく腹が立つた。

つまりわたしは、彼らに対するわだかまりはあんまり無いと思いつ込んでいたけれど、その実心の奥ではふすふすと不満を燻らせていたらしい。

「変態、悪趣味、傍迷惑、陰険つ！
ばーかばーかばーかつ、大つ嫌いっ！」

考えれば考えるほどにむかむかしてきて、彼らと、ついでに掲示板にわたしの情報を載せたという人に対して、思いつくまま悪態をつく。

「仲直りなんかわたしに関係ないーっ！
図々しいーっ！
そつちの事情なんて知るかーっ！
勝手に人の情報載せるなっ！
わたしのプライバシーも考え方ーっ！
」

頭を空っぽにして、感情のまま口をついて出た言葉を呟んでくると、ぼろぼろ本音が溢れてゆく。

わたし実はこんなこと考えてたんだ、と自分に少々驚きながらも、ひたすら呟び続けた。

ひとしきり悪態をついて、何の言葉も思い付かなくなつたところで、ようやく口を閉じる。

胸を占めていたもやもやは綺麗むきぱり消えてしまい、とても爽快な気分になつていた。

「んふふ、うふふふふふ」

そうしたら今度は可笑しなつて、くすくすげらげら笑い転げる。ばしばしと床を叩き、げほげほと咳き込み、涙を流しながら大笑いした。

自分も彼らも、馬鹿みたいでどうしようもなくて、全部くだらない、どうでも良くなつてくれる。

「」のまま彼らを待たずに、わたしが「」を出たら全て台無しになるなあ、と考えたら楽しくて仕方なくなつてくる。

勢いに任せて密かに脱出してしまおうかとすら思つてしまつ。消えたわたしに思惑が外れて困つている青年一人を想像すると、それはとても素晴らしい意趣返しのように見えた。

「ま、キーチくんたちもいるしやめと」

想像の中で拉致犯一人を散々困らせた程度満足したわたしは、その思惑を引っ込んだ。

キーチくんとシオリーナさんとギギアルさん。

三人に迷惑をかけるのは本意ではない。

もう既に動き出しているだらう申し出を今さら拒否したら、きっと彼らに不利益しかもたらさないだらう。

このゲームにログインして、初めてまともに交流を持てた人に、これ以上の負担はかけたくない。

三人のことを考え、ようやく落ち着いたわたしは、えいっと勢い

をつけて立ち上がり、ぐっと片手を天井に向けて突き出した。

「よし、あと一日頑張るぞーっ！」

やる気と元気を取り戻したわたしは、日記を書く作業を再開した。さつきまでの一連の醜態は勿論省いたが、雑記帳には詳しく書いておいた。

ここを出て、自分が見られる設定に出来たら、ひとつそり追加するつもりだ。

すぐ投稿するつもりの日記よりも力が入ってしまい、全部書き上げたころには既に朝に差し掛かっていた。

「わたくし、からくり作りとその前に」

ふんふん鼻歌を歌いながら図鑑に手を伸ばし、昨日の記録をつけないことを思い出して再び雑記帳を開いた。

昨日は殆ど雑談をして過ごしていたから、全体的にやほどの変化は見られない。

しかし空腹スキルが順調に育つていてるおかげ、随分と元のステータスに近づいていた。

初めはただのネタスキルだとがっかりしていたけれど、意外に役に立っている。

「どのスキル捨てるかも考えなきゃなあ」

割と愛着の沸いてきたスキルの名前を一つ一つ指でなぞり、今後のことにしばし思いを馳せた。

さすがに、今まま全部育てるには、バランスが悪すぎる。

ステータスが効率よく上がるものを取り入れるべきなんだろうなと思いつつ、しかしそうにどれを育てるのを止めるかも決める」とも出来ない。

空腹スキルのように、ある程度育たないとその効果が実感しにくいものもあるかもしないと思うと、尚更どれも選びにくかった。幸いにも、合計で10000に達するにはまだまだ余裕がある。そのうち、どれが必要か自然と分かるようになるだろう。

スキルの取捨選択はそれからでも遅くないだろうと考え直し、しばらくそのままにすることにした。

最後にもう一度スキルを眺めてから画面を閉じ、からくり作りへ

と取りかかった。

十一日目（雑記帳より）

体力：25 / 25 (28 / 28)
魔力：11 / 11 (13 / 13)
満腹度：0 %

筋力：4 (5)
知力：16 (18)
耐性：4 (5)
精神：11 (13)
器用：33 (37)
速さ：4 (5)
運：4 (5)

空腹でステータス50%減少
称号でステータス30%増加

睡眠：53 (睡眠時回復時間5.3%短縮)
空腹：85 (空腹時ステータス9.5%上昇)

読書：27 (読書力増加)

速読：43 (読書速度増加)

解析 : 29 (アイテムの情報判明)

歌唱 : 29 (歌の効果発現率 2.8%)

作曲 : 16 (作曲力増加)

機巧 : 49 (からくり作成)

自然回復 : 16 (自然回復速度増加)

魔力操作 : 26 (魔力操作精度増加)

成功したけど問題も

図鑑をぱらぱら捲り、必要な材料の数が少ないものをいくつか選んでいく。

半日もあれば作れてしまいそうなもの、というのを念頭に置いていたが、それでも十数個の候補が見つかった。

どうせ作るなら今後も役に立つものを、と初めは思っていたが、よくよく思い返してみたらからくり作りに必要な道具や材料では、出口を出現させることは出来なかつた。

それならばいつそのこと、役に立たなきそつなものから作つた方が当たりに早くたどり着けるかもしれない。

そう考えたわたしが一つ皿に選んだのは、『ドライフラワー』だ。材料は糸一本、それを花の形に並べるだけの簡単な仕組みで出来上がるものだ。

他のからくりの材料として登場することもなく、部屋に飾るへりいしか用途が思い付かない。

早速糸を並べ、特に手を加えることもなく完成させた。

必要な魔力はたつた1で良くて、レベルはかなり低いだろうと予想出来た。

「うわあ、本当にただのドライフラワーだ」

完成品を指でつまみ田の前に持つてくる。

すんすんと鼻を動かしたが何の匂いもせず、カラカラに水分の抜けた一本の花は、部屋に飾るにしても少々物足りない感じだった。机の上にぽいつと放り投げ、次に取りかかるうとした瞬間、「ゴゴ」と地鳴りがし、部屋が光に包まれた。

眩しさに耐えられず、ぎゅっと目を瞑り、その場にしゃがみこむ。そのまま大人しくし、音が止んでしばらくしてからゆっくり目を開き、そのままぽかんと口を開けた。

「あは、あはは、一回田で当たり？」

何も無かつた筈の壁に、まるで前からそこにあつたかのよつたな佇まいの扉が出現していた。

特別な雰囲気は一切無く、部屋の様子によく馴染んだ簡素な木の扉だった。

あまりにも呆氣なく目的が達成され、喜びよりも脱力感が先に来てしまった。

「うう、なんか納得いかない」

扉をじとじと眺め、はああと深いため息をついてべたりと床に手をついた。

今までのわたしの苦労の日々は一体何だつたんだろう。
そう思わずにはいられないほど、隠し部屋の仕組みはあつさりしたものだった。

変に万能アンテナなんて田舎さずに、簡単なものから順に作っていれば早かったのだ。

タネが明かされた今だからこそ、後悔せずにはいられない。

しばらくそのまま落ち込んでいたが、出るしが出来るようになつただけでも良かつたと思い直し、これで最後と大きなため息をついてから立ち上がった。

うつかり部屋を出てしまつても困るので、扉とは十分に距離をとる。

メニューで時間を確認すると、まだ午前八時を少し回ったところだつた。

明日の朝まではかなり時間がある。

とりあえずも「いらっしゃい」とでも大丈夫な旨を、キッチンたちに伝えることにする。

顔を突き合わせての通信だと、邪魔になつても困るので、フрендへのメール送信の機能を試す。

「出口出せました、今日明日ようじくお願いします、ひとつ

文字数に制限があつたので、用件だけ簡潔に書いて三人に同時に送信する。

これでもうわたしがやるべきことは終わつたとほつと息をつき、何をして時間を潰そうかとベッドに腰をかけぼんやり思案し始める

と、メニューバーがチカチカ光る。

キーチくんからの返事だつた。

了解、との短い言葉だったが、その返信の素早さにこよなく類が緩んでしまう。

そうだ、とぱちんと手を叩く。

せつからく時間が出来たんだから、感謝の気持ちをこめて三人に何か役に立つものを作つてプレゼントしよう。
大したものは作れないだろうが、何もしないよりマシだろう。
邪魔にならない大きさで、使い捨てのものが良い。

目的が出来て一気に気分が良くなつたわたしは、ふんふん鼻歌を歌いながら図鑑に素早く目を通していく。

機巧スキルの特色なかもしれないが、直接戦闘に役立ちそうなものは少ない。

笑い袋はその数少ないうちの一つなのだが、さすがにあれをお礼として差し出すのは躊躇われる。

あれこれ比べて、よしやく候補に上がつたのは二つだけ。

魔物笛という敵を集める効果のものと、煙玉という敵を攪乱させる効果のもの。

前者は十回、後者は一回の使い切りで、さほど大きすぎな手頃なサイズだ。

他はやたら場所を取つたり、使い方が面倒くさそうだったり、使いきりでなかつたりで適当なものが無かつた。

うまく質の良いものが作れるかも分からないので、両方作つてみることにする。

まずは魔物笛からだ。

必要な材料は、糸一本に金属板一枚だけ。しかしそのままで大きすぎるるので、金属板をくわえるのに丁度良いサイズに鋸で切断し、図鑑にあつた縦型のホイッスルの形に似せるべく、真ん中に小さな四角い穴を開ける。

錐で開けた穴に糸を通して、仕上げにかかりた。

必要な魔力は今のわたしでは足りないようだつたが、外見からは特に問題が無さそうに見えるものが出来た。

ただ、試しに吹いてみると酷く息が詰まるのが分かる。顔が真っ赤になるほど息を入れるとよつやく、フィロロと頬りなり音が鳴つた。

「これは駄目かなあ

首にかけるためにあるだらう紐の部分に指をかけ、ぐるんぐるん回しながら改善点を考える。

ただの板に穴を開けるだけじゃなく、金属板をぐるりと丸めて笛っぽくしたらどうだろうか。

早速試してみる。

小さく切断した金属板に四角い穴を開けてから木槌で叩いて筒状にする。

目標が小さいのでなかなか難しく何度も間違つて指を叩いてしまつたが、痛みは感じないので問題は無かつた。

不恰好ながらも円筒になつた金属板に糸を通し、仕上げる。

今度も見た目は先ほどと変わらない。

しかし息を吹き込むと、ピイッと鋭い音が鳴つた。

そのまま二回続けて鳴らすと、ぴしりといつ音と共に笛が砕けちり、光の粒になって空氣に溶けて消えてしまった。

「回数は減つちやうけど、一応合格かな」

よしよし、と頷き、同じ手順で魔物笛を量産する。慣れると段々楽しくなってきて、気づけば十個の笛が床に転がっていた。

これだけあれば十分だろうと手を止めて、最後に作ったものに解析をかける。

名前しか分からなかつたので、それなりにレベルが高いのだろう。使用回数が予め判れば良かつたのだが、わたしの解析スキルレベルでは無理なようだつた。

あまり差があると困るのだが、仕方がない。

次に取りかかる前に、いつの間にか来ていたシオリーナさんとギアルさんの返事を確認する。

もう既にイベントは始まつていいらしく、しばらく連絡が出来ないと書かれてあつた。

終わりそうになつたらまた連絡するがあるので、今日も寝るのは無理そつだと諦め、再びお礼の言葉を送信しておいた。

煙玉は木材と糸を二十本も必要とする。

作り方は単純で、木材を糸でぐるぐる巻きにするだけだったが、図鑑に載っている完成品は球体だ。

そのままで、どう考へても質の高いものが出来そうにない。試しに何の工夫もせずに作ってみたが、必要な魔力も足りず、凸凹したものになってしまった。

壁にぽんと投げてみると、ちちちちと細い煙が立ち上ぼつ、すべに消えた。

これでは敵を撹乱するだけの話じゃない。

むむむと図鑑を前に唸り声をあげる。

金属なら叩いて形を変えれば良いが、木材ではそもそもいかない。確かに火で炙ると良いんぢやなかつたつけ、とあやふやな記憶を引つ張り出してみるも、肝心の火が無い。

木材を取り、無理矢理曲げようとしても思い通りにはなつてくれなかつた。

イライラが募り、べきつと折つてやうつかと乱暴な方に思考が傾いたところで、ひとつ思つてく。

まず、木材を鋸で出来るだけ小ちく切断し、木槌とノミを使ってさらに細かく碎していく。

半分程木屑に変えたところで作業をやめ、それを手に取りぎゅつきゅつと握つて押し固め、丸い形にしていく。

最後にそれを糸で包む。

形が変わってしまったので、順番通りに巻き付けるのは大変だったが、なんとか出来上がった。

「おおお、見た目はいい感じ」

仕上げ前の状態は既に完成した煙玉の形に近く、満足感が胸を占める。

さてどうなるかと魔力を一気に注ぎ込むと、野球の球のように丸いものが現れた。

これは成功だらうとにんまり笑いながらそれを手に取るも、つるつるしていくどうも收まりが悪い。

ちょっと力を入れすぎると、つるりと手から逃げていってしまいそうで、ものすごく投げにくい。

壁に向かって投げつけると、目標の場所とは違った場所に飛んで行ってしまった。

結果、さっきよりは多めにもくもくと白い煙が現れたが、やはり一瞬で消えてしまう。

とても人に差し出せるレベルでは無さそうだった。

かなり力を入れて下準備をしたので、使えないと分かりしゅんと

してしまつ。

あれ以上の方は思い付かないし、スキルレベルと魔力、両方が足りていないうだ。

一回こいつきりの使い捨てアイテムというのも大きいのかもしれない。

魔物笛をもう少し追加しようかと考えたところで、はたと気づく。いろいろ作ったけれど、果たしてアイテムは收まりきるのだろうか。

魔物笛は勿論、せっかく作った道具も持つていきたい。
出来るものなら未使用の材料もだ。

しかし、確かに持てる量には制限があるのだ。

個数ではなく重さだったから、もしかしたら全部持ち出せるかも
しないが、いざ出る時に無理だと気づいて手間取つたら田も当て
られない。

慌てて道具を片端からしまつていく。

小さいものばかりだからいけるかと思つたけれど、十四個目を放
りこむとべつと吐き出されてしまった。

これは不味い。

まだ雑記帳も魔物笛も残つているのだ。

それにタロウも連れていかなきやならない。

万能アンテナは置いていくとしても、全然空きが無い。

「うーん、どうじよひ

思わぬ問題に当たってしまったわたしは、困り果て、しばしその場で立ち尽くした。

何度もアイテムの出し入れを繰り返す。

どうしても持つて行きたい雑記帳とタロウを先にしまつと、からくり用の道具が六つしか持つていけなさそうだった。

収納出来るアイテムの量は、精神が関係しているとヘルプに書いてあった。

このまま時間の経過を待てば、空腹スキルが上がって多少持てる量は増えるかもしれない。

しかしそれで、残りの道具八つとお礼に作った魔物笛を持つていけるようになるだろうか。

どう甘く見積もっても無理だ。

「うう、せっかく作ったのになあ」

諦め切れず、床に散らばった道具の一つを手に取ろうとして、着けっぱなしですっかり忘れていた魔力測定器の存在を思い出した。

まじまじと手を見つめ、はっとあることに気付く。

何も全部仕舞い込む必要は無いんじゃないだろうか。

「この魔力測定器のように、外に出した状態で運ぶなりなんなりすればいいんではなかろうか。

自分の思い付きに興奮し、早速魔物笛を首にかけていく。
十個全てかけ終わつたところで、動きにくくなつていなか確認するために部屋を走り回る。

身体の動きに合わせてガシャガシャ十個の笛が揺れるのは煩わしかつたが、それ以外は特に不都合が無さそうだつた。

残る道具の数々だが、これはちょっと面倒だ。

抱え込めば持てないことは無いだろうが、両手が塞がるのは困る。
全部魔物笛のようすに首にかけることが出来たらいいのに、と考えたところでわたしはまた思い付いてしまつた。

「うふふ、わたしすごいかも」

自分の閃きにすっかり機嫌を良くして、すぐに思い付きを実行に移す。

まずは鍔を取り、持ち手の部分に糸と針金を通す。

一本ずつでは心許ないので三本ずつまとめて使い、長さが足りないので更に継ぎ足した。

そして通した糸と針金の端を絡ませて結び、頭の上でぶんぶん振

り回す。

かなり思いきり振り回したけれど千切れること無かつた。
強度に問題は無やそつだ。

「うん、元壁！」

試みが上手くいったことに満足して、一度結び田をほどこて、そこへ穴の空いた道具を通していく。

更に穴の無いものには錐で穴を開け、同じように通す。
鋏、針、木槌、鏪の四つを通してバランスを考えてひとまず纏めた。

同じように針金と糸を絡ませたものを作り、定規、天秤、ノミを通し、針金でコンパスと羽ペンをくくりつける。

残ったインク、鋸、作業台は収納し、ノミとピンセツトと錐は針金でぐるぐる巻きにして一纏めにし、手で持つていくことにする。
出来上がった輪っかに首を通したが、さすがに邪魔だったので両肩にそれぞれかける。

「あああ、やれば出来るもんだなあ

端からじりじり見えるかは全く気にせず、わたしは全て持つていけそ
うな田処が立つたことにほっと安堵の息をついた。

欲張れば材料もいくつか持つていけそうだったが、これ以上ジャ
ラジヤララセるのは鬱陶しかったのでそれは諦める。

さすがにこの恰好で待っているのも微妙なので、ガシャガシャ音
を立てながら取り外していく。

肩にかけていた荷物を外したところで、シオリーナさんから通信
が入った。

「おーいシロウちゃん！」

慌てて魔物笛を外し、それを髪を整えてそれに答える。

「はい、シロウネラです」

電話の受け答えのような言葉選びがおかしかったのか、シオリーナさんはくすくす笑いながら用件を話し始めた。

「んつとね、イベントだけど順調だよつ。

この分ならあと三時間くらいで終わりそうかな。
もうすぐ会えるねつ！
すつごく楽しみだなつ」

ここにこ笑顔のシオリーナさんにちられてわたしもへらりと笑い、
メニューを開いて今の時間を確認する。
丁度午後六時をまわったあたり。
九時まで何をしていようと一瞬意識が逸れたわたしに、シオリー
ナさんが嬉しい提案をしてくれた。

「もうイベント大変なところは終わっちゃったのね。
だからちょくちょく休憩とれるから、その間お話に付き合つてくれたら嬉しいなあ。
ね、いいかなつ？」

むしろわれはこれからお願いしたい」とだつた。
シオリーナさんたちの状況がさっぱり分からないので、無闇に引き留めるのも悪いと思つていただけに、すぐくありがとうございました。

「あつがといざります、シオリーナさん」

画面に向かへべつと頭を下げるび、シオリーナさんはぱくづと頬を膨らませて拗ねたような声で不満を漏らした。

「シロちゃん他人行儀だよお。
あたしはシオリつて呼んで欲しいなつ。
シオリーナつてのはね、シオリつて名前先に取られちやつて仕方なくつけたの」

まほりひ、と期待に満ちた目で見つめられ、わたしは少し照れながら彼女の名前を呼ぶ。

「えと、シホコさん」

「シーオーリーつー

さんなんていらなーつー」

間髪を入れずシオリさんから呼び捨てにされるよつ要求されぬ。
むつと額を尖らせる姿は非常に可愛くて、何でも聞いてしまつや
うになるが、そこは譲れない。

わたしは人を呼び捨てにするのがあまり得意でない。
付き合いの短い人なら尚更だ。

「ふ、シオリさんで許してください」

小さな声で「によ」とお願いすると、シホコさんは不満そつ
ではあつたがすんなりひいてくれた。

「ま、いつか。
でも敬語は禁止だよつ！
友達同士で敬語なんて変でしょ、ね？」

につこり笑つて釘を刺すシオリさんにわたしは「ぐぐくと頷く。
さらりと友達だと言つてくれたことも嬉しくて、しばらく緩んだ
顔をしていたと思つ。

それからはシオリさんが主に喋り、わたしは聞き役に回つた。
内容はわたしに配慮してくれたのか、今回イベントに参加してい
る人たちのことに終始していた。

全員が知り合いらしく、彼らに思うところはあるものの、シオリ
ーナさんから人となりを聞くとそれほど悪い人たちじゃないのかと
思えてしまう。

誰も彼もポジティブに語るシオリーナさんも、キーチくんと同じ
く良い人なんだろうな、とほつこりした気持ちになった。

「あ、そろそろ休憩終わっちゃうつ！
次はギルが来るから相手したげてね。

そだそだ、シロちゃんが良かつたらギルって呼んであげてーっ！
あん、もういかなきやつ、またね！」

二十分程話してから、慌ただしくシオリさんは去ってしまった。
休憩ギリギリまでわたしに付き合ってくれたのだろう。

氣を使わせてばかりで、嬉しいけど申し訳ない。

後日改めてお礼をせねば、と密かに決心をすると同時に、今度はギギアルさん、もといギルさんから通信に入る。

「ギ、ギルさんもありがと！」

思い切って碎けた話し方で応えると、ギルさんはすぐここにこいつと笑ってくれた。

じちらも本当に、拝みたくなるくらい良い人だ。

「シオリから話は聞いたよね。

俺からは、良ければ一人紹介したいんだけど、どうかな？」

急な申し出に困惑つむ、断る理由も見つからなかつたので素直に頷いた。

すると宙にもう一つ画面が開き、厳しい顔つきの男の人表示された。

「こゝの人はあるギルドのトップのゴジマ。で、ゴジマ、こゝの子がシロちゃんだ」

ギルさんの紹介に合せさせて、ゴジマさんに向かって頭を下げる。

ゴジマさんも回りみづわたしに軽く頭を下げた後、沈痛な面持ちで口を開いた。

「ゴジマだ。

本当に、本当に、すまなかつたつー」

せうまいにやいなや、先ほどとせばものこなりなじへりこ深々と頭を下げる。

「一体何を謝られてこらのか分からぬいたしは、その迫力に氣圧されおのむりし、頭を上げてくださいとただ繰り返す。

しかしゴジマさんは一向に頭を上げてはくれず、どうじょうひと困つたところでギルさんが助け舟を出してくれた。

「ほら、シロウヤさんのこと掲示板に載つてたつて言つたよね?

彼がその犯人

明るく告げられ、ああそれかと納得するも、まあまゴジマさんが頭を上げてくれないと話は始まらない。

「お、お願ひですかから頭をあげてください」

「いやこれじゃまだ足りん、それだけのことをした自覚はある

おたおたと呼びかけるわたしと、土下座しそうな勢いの「ジマさん」のやりとりは平行線を辿り、見かねたギルさんが間に入つて取りなしてくれるまで終わらなかつた。

面倒なことになつたもんだ、とキーチは迫りくる敵を倒しながら軽くため息をついた。

わざと派手な魔法を連射させ、いかにも不本意だとばかりに地面を爪先で蹴りつける。

そうして自分自身に対し不機嫌さを主張しなければ、胸の底から突き上げてくる嬉しさを抑えられそうになかった。

キーチがリアルファンタジー始めたのは、友達が欲しかったからである。

根っここの部分は素直で真面目ない子であつたのだが、口下下手で見た目にもあまり自信が無く、更に素直になるのは格好悪いと突つ張つてみせる性格だつたため、現実での友人は非常に少ない。

そしてその貴重な友人たちとは、キーチの性格を面白がり、よくネタにしてからかう。

彼らに悪気は無く、キーチもそれが嫌な訳ではない。

しかしたまにどうしようもなくやるせない気持ちになつてしまつのだ。

だからキーチは、穏やかな性格の、心許せる友達が欲しかった。
そこで目をつけたのが、リアルファンタジーだ。

丁度発売された新しいVRMMOに、一も二もなく飛び付いた。
自分の思うような姿でプレイし、更に疑似トリップイベントで三ヶ月も共にすれば親友と呼べる存在だって出来るんじゃないかとキーチは期待に胸が高鳴った。

皆に頼られ、かつて良く活躍する自分を妄想し、中学時代についてもクラスの中に居た人間の姿をまねて作ったキャラクターで、希望と共にゲームの中へと旅立った。

しかし実際はそう上手くはいかない。

まずゲームを始めてすぐに、やたら綺麗で恰好のいい人間の多さに圧倒されてしまった。

キーチ自身も可愛らしい少年の姿になつてはいたのだが、根付いた美形への劣等感はなかなか消えない。

ようやく慣れた頃には周りは遙か先に行つており、生来の不器用さ故に別の自分に成りきることも出来なかつた。

親友どころか知り合いすらなかなか作れず、ようやく知り合えた人間ともそこまで親しくなれない。

ゲームといえどプレイするのは生身の人間同士。

自分に都合のいいモブではない。

失敗を通してそれに気がづいてから、キーチは少しだけ大人にな

つた。

口は悪い今まで、人付き合いがいきなり得意にもなつたりはしなかつたが、多少は丸くなり、やたらと突つ張つていたせいで隠されていた素直さと真面目さが少しづつ表に出るようになつてからは、知り合いも増えた。

仲が良いと胸を張つて断言出来る相手はまだ居なかつたが、これはこれでいいものかもしれない、と思い始めていた頃、事件は起つた。

そこそこ交流のあるシオリーナから連絡が入つた時、キーチは一人であるダンジョンに潜つている最中だつた。

もうすぐ最深部というところで横やりが入り思わず顔をしかめたが、無視はせずすぐに応える。

キーチが人からの通信に応えないことは、殆ど無いと言つていい。

シオリーナから頼まれたのは、チャットに来て新人プレイヤーが困つているからアドバイスしてくれということ。

ダンジョンについて詳しいことが知りたいらしい。

噂の新人については、キーチも掲示板で確認してその存在を知つていた。

しかし、大手ギルドや上位のプレイヤーが動いているから、自分に出来ることなどないだろうと端から介入することは諦めていた。なのに、キーチが必要だと言つ。

キーチは直ぐ様ダンジョンを脱出し、シオリーナの元へと駆けつ

け詳しい話を聞いた。

シオリーナたちを見るなり号泣したプレイヤーから聞きましたと
いう一連の経緯を聞き、その要領の悪さと運の悪さに同情しながら
もある種の親近感を抱く。

女なのは残念だが、それでも互いの失敗談を話しあえたら楽しい
だろうなと思った。

ファーストコンタクトは大失敗だった。

シオリーナにも散々釘を刺され、キーち自身も迂闊なことは口に
すまいと思っていたのに、緊張で頭が真っ白になり憎まれ口を叩いて
てしまう。

言い返しもせず困ったように笑う姿に、焦つて撤回しようとした
がシオリーナに阻止され、撤回するどころか更に悪態をついてしま
う。

やがてその姿が消え、慌ててチャットから出るもフレンド申請は
来ておらず、しばらくして出てきたシオリーナとギギアルにだけ申
請されていることが分かった時は、キーちは大層落ち込んだ。

普段呼ばれもしないフレンド通信に、しかも明らかに自分を敬遠
している相手がいる場に現れるなんて真似はしないキーちだったが、
この時ばかりはシオリーナ経由で割り込んだ。

どう謝ろうか考えている最中にシオリーナにあつたりと先ほどの
様子をバラされ、反射的に否定の言葉を叫びまた後悔した。

しかし直後にフレンド申請が送られてきたのを確認し、口元が緩

みかけたのを慌てて引き締める。

話してみるとほどに、キーチはシトロネラの要領の悪さが気にかかった。

このままではいいように利用されるだけだと、自身の経験を振り返つて思う。

キーチはシオリーナとギギアルの二人のことを嫌いでは無かつたが、完全に信用している訳でも無かつた。

痛い目に遭わされたことはない。

しかし彼らと絡んだことにより、幾人かの知人と疎遠になつたり、正論を言われているのにもやつとしたりと、ほんの些細なことがキーチに一人を警戒させていた。

せめて自分だけは力になつてやらなければ、とキーチは柄にもなく決意する。

そこにはキーチも意識しないまま、すっかり諦めた筈のヒーローへの夢と、友達が出来る」とへの嬉しさが隠れていた。

「シトロネラ、シロ、シーラ、トロ……。
あああくせつ」

敵が途切れ余裕が出来た時に、あと数時間で会つことになる友達になんて呼び掛けようかとキーチは悩んでいた。

いろいろ思い悩むも、どれもいまいちしっくりこない。
かといって、本人になんて呼んでほしいかななんて尋ねられるほど、
キーチは社交的でもなかつた。

煮詰まつた彼はガリガリと頭をかきむしり、運悪く沸いてきた敵に苛々をぶつけハツ当たりした。

「くつそ、うぜえんだよつ！」

女々しく悩んでいる」との恥ずかしさも相まって、放たれた火の玉の威力は敵一体を葬り去るのには過剰すぎる程のものだった。

「キーチ、ギル戻つてきたら休憩していいよーつ！」

ぼすんぼすんと威力の高い魔法を乱射するキーチに、シオリーナが声をかける。

キーチは振り向かず微かに頷いただけだったが、シオリーナは特に気にした風もなく自分の持ち場へと戻つていった。ちらりと横目でその背中を見る。

いろいろ思うところはあるものの、キーチはギルとシオリーナの二人が羨ましかった。

広い人脈も、初対面相手に臆せず話せるところも、自分のような人間にも普通に接してくるところも、全部羨ましくてたまらなかつた。

シトロネラも、自分がでしゃばるより素直に一人へ任せた方が賢明だとも思つ。

きつと悪いようにはならないだらう、とも。

それでもキーチは、自分なりに動きたかった。

シトロネラがいらないというなら諦める。

二の方がいいというなら従おう。

だけどその前に、やれることはやってみたいのだ。

「負けねえっ！」

自身の弱気を振り払つようにキーチは一声叫び、シトロネラと会つてからのことを見渡す。シミュレーションし始めた。

やつとゴジマさんがこちらに向かってくられたので、改めて頭を下げ、彼が再び口を開く前に一気に言いたいことを言つてしまつ。

「ええと、いろいろ心配してもらつてありがとうございます。

掲示板に載つちゃつたことについては微妙な気持ちですが、わたしのためにしていただいたことだつてギルさんたちから聞いてるのでも気にしてません。

なのでゴジマさんも気にしないでください。

あの、あのですね、さつきみたいに謝られるのは、いや、困ります」

「気にしてないといつのは嘘だつたが、それを伝えてもまた過剰に謝られるだけだと予想出来たので言わないでおく。

ゴジマさんは早口で一気に喋つたわたしの言葉を最後まで聞いて、再び頭を下げかけ、はつとしたようにその行動を取り止めた。

シオリーナさんが真面目で優しい人だと黙つていたが、それは本当に「う」とうして。

「そう言つてもらえると有り難い。

君がここから出たら詫びも兼ねて力になりたいと思つている。
困つたことがあれば何でも言つてほしい」

そこでようやく、ゴジマさんが微かに微笑んだ。

厳しい顔つきが一転して優しいものに変わり、その差が激しい分
ひどく魅力的なものに見えて、さすがギルドのトップの人だけのこ
とはあるなと妙に感心してしまった。

その時はお願いしますと当たり障り無く答えたものの、きっと何
かお願いすることは無いだろうと密かに考えていると、ギルさんが
にこやかに一つ提案をしてきた。

「そうだ、それなら一人もフレンド登録しておくといいね。
シロちゃん、ゴジマはフルネームも一緒にから」

あつさり言われてしまい、わたしは少し動搖する。
正直、そんなにお近づきにはなりたくない。
いい人なのだろうけど、一連の出来事のおかげで生まれた苦手意
識が消えた訳じゃない。

だけどギルさんの申し出を断るのも憚られたので、不満はぐっと飲み込んでフレンド申請を送った。

ギルドのトップならきっと知り合いも沢山いるだろうし、ひむけいひむけいから連絡をしなければそのうち縁も切れるだろう。

「コジマに連絡しにくかったら俺に言つてくれてもいいからね」

複雑な気持ちが表情に出ていたのか、ギルさんが笑つてフォローしてくれた。

コジマさんはその言葉に軽く眉を寄せたものの、特に反論はしない。

掲示板の一件で、お節介で親切の押し売りをしてしまう人だとどこかで思い込んでいたので、その反応は意外だった。

先入観に捕らわれすぎていたかと、少しだけ反省した。

コジマさんはその後すぐに姿を消して、ギルさんも次はキーチくんが来ることを告げて居なくなつた。

ひとり残された部屋の中で、ほーっと長い息を吐く。いつの間にか肩に力が入つていたようだ。

フレンドリストを開くと、コジマさんの名前が増えている。思わずため息が出そうになつて、慌てて息を止めた。

早くキーチくんから連絡が来るといいなと思しながら、ぼんやり宙を眺める。

しばらくそのまま待っていたのだが、一向に連絡は来ない。何かあったのかと心配になつたが、何かあつてそれに対処している最中ならこちらから連絡するのも躊躇つてしまつ。

すっかり手持ちぶさたになつたわたしは、見納めとばかりに掃除がてら部屋の中を見て回つた。

不本意に閉じ込められた場所とはいえ、もつすべお別れだと思つと感慨深いものがある。

持ち出せるものなら全部丸ごと持つて行きたい。

特に『じみ図鑑』は手元に置いておきたい。

しかしもし次の人気がこの隠し部屋に閉じ込められた時にこれが無かつたら困つてしまふだろう。

無くなつたものは補充されるかもしれないが、はつきり分かつている訳じゃないのでやめておく。

外に出しつぱなしになつてゐる本を一冊ずつ本棚に戻し、そつと心の中で手を合わせた。

余つた部品は全て箱に戻して口を閉じ、使いかけのものはその上

に纏めておいておく。

小さすぎて使えないやうな切れ端は部屋の隅に集める。

ベッドを整え椅子を仕舞えば、

元通りとまではいかないものの、上れりぱりとした様子を取り戻した。

ここで十日以上も過ぎたのかと考えると、不思議な気持ちになつてくる。

しみじみしてみると、それを遮るようにぴかぴか視界の端で光るものに気付いた。

今更何だらうと首を傾げながらメニューバーを操作すると、スクリルが一つ発現していた。

整頓：1（部屋の効果回復）

『スキルあれこれ』には載つてなかつたスキルと、見覚えのない効果を目にしてわたしは考え込む。

額面通り受け取るなら、部屋には何かしらこぢらに影響を与えるものがあるひしく、汚れるとその効果が落ち、片付けると戻るらしい。

そういうえば、と一つ思い当たることがあった。

ここでいくつもからくりを作つてきたが、作った数に対して失敗の回数が少なすぎる気がするのだ。

偶然と、いろんな工夫をしたおかげだと思っていたのだが、この部屋の名前からして機巧スキルに関する影響があつたのだと考へる

とじつくつこべ。

もつと早く気づいていれば小まめに掃除していたのに、もう少しを出すつてタイミングで判明したのはすゞしく残念だ。

「もー、説明されてない要素多すがるよ

悔し紛れに不親切な仕様に対してハツ当たりし、軽く画面を叩く振りをする。

ここを出たら基本的なことに關して一度勉強した方がいいのかもしない。

またこんな目にあつても困る。

しまいこんだ雑記帳を取り出し、調べたいことこいくつか付け足した。

それも終わると、こよこよする事が無くなつてしまつ。シオリさんに告げられた時間まであと一時間と少し。

本を読む気にもならず、ベッドに腰掛けぼんやり天井を見つめた。

どれくらいそうしていただろう。

わたしを何度も呼ぶシオリさんの声ではなくと我に返り、慌てて返事をする。

「良かつたー、返事無いから心配しちゃつたよー！」

あのね、もう出てきて大丈夫だよ。

「ふふ、楽しみだなっ」

ここにここ笑うシオリさんに気がつかなかつたことを謝るヒ、気にしないよと明るくフォローされほつとする。

待つてるねと言つてシオリさんの姿が消えたと同時に、急いで準備を始めた。

魔物笛を首にかけ、両肩に道具をくぐりせ、左手にまとめたものを掴み、扉の前に立つ。

いよいよだ。

これでわたしは、一人きりの生活から解放されるのだ。

扉に手をかけようとするが、ぶるぶる震えてここに気がついて一度引っ込める。

軽く握つて胸にあて、深呼吸をした。

ここを出られるのは嬉しいし、この先にあるものが楽しみではある。

だけど少しだけ恐い。

長く一人でいたわたしが、ちゃんとやつていけるか不安でもある。うまく喋れるだろうか、変なことしちゃわないだろうか。

考える程に不安は大きくなつていった。

がちりと扉の前で固まつてしまつたわたしの背中を押したのは、キーチくんだった。

なかなか出てこないわたしを不審に思ったのだろう。いきなり一言だけ投げつけて、返事も待たずに消えてしまつた。

「待つてんだから早く来い馬鹿っ！」

急なことにぽかんとしたわたしだつたが、可笑しくて嬉しくて、くすくす笑つてしまつ。それだけで身体の強ばりは解れ、震えも收まつた。そうだ、この扉の先には、知らないものばかりじゃない。キーチくんとシオリさんとギルさん、ついでにコジマさんも待つてくれている。

不安が消えた訳じや無い。

だけどそれよりも、わたしは三人に直接会いたい。

会ってちゃんとお礼を言いたい。
もっと親しくなりたい。

扉に手をかける。

今度は躊躇うことなく、一気に開け放つ。

田の前に広がるのは『ひつけ』した石の壁、初口に見たダンジョン

そのもの。

そろりと一步踏み出す。

足の裏から伝わってくる感触は、部屋の中とは全く違う。
そのままの状態で一旦止まり、顔だけで後ろを振り返る。

「ぱいぱい、一度と来ないからっ」

部屋にさわり別れを告げ、一気に外へと駆け出した。

外は外で大変そう

走り出してす「字路に突き当たり、勘で右を選んでそのまま進む。肩にかけた道具がぶつかり合ってジャラジャラ鳴り響いた。

どこにも敵の姿はないが、人影も見えない。

行き止まりに当たつて引きかえそうとした時、ビニから微かに声が聞こえてきた。

その声を目標に踵を返し、道具のせいでそれをかき消さないようになると今度は普通に歩き出す。

どんどん声は近くなってきて、わたしの名前を呼んでいることこ^ト気づき、じからかも呼び掛けた。

「いま行きますー！」

それが向こうに届いたのか、一旦わたしを呼ぶ声は消え、代わりにそこで待っているようにとの声が聞こえた。

わたしは素直にその場で立ち止まり、壁に寄りかかって待つ。

声の届く範囲なのだからすぐに合流出来るかと思っていたのだが、人影が視界に飛び込んできたのは予想より随分経つてからだった。

現れたのはシオリさんたちではなく、背の高い女人と、可愛らしい小さな女の子の二人組だった。

わたしの姿に気づくと背の高い方の女人人が駆け寄ってきて、ぎゅっとわたしの手を握り、その大人っぽい見た目とは裏腹に無邪気に微笑んだ。

「さやーつ、シトロネラちゃんはじめましてー！

私はセイーレーン、よろしくねえ！」

やけにはしゃいでいる様子にわたしが驚いて目を白黒させていると、後ろからきた女の子がセイーレーンと名乗った女人の背中をぱしんと強めに叩いた。

「ちよつと、もう、んつとにあんたって子は違うでしょ、その前に言うことがあるでしょー！」

見た目は少女なのに、明らかにセイレーンさんよつしつかりした口調で、彼女を叱りつける。

その言葉にはつとして何かに気付いたらしくセイレーンさんは、握ったままの手にギュッと力を込め、しゅんとした様子でわたしに謝った。

「『みんなさあい、反省してゐるよ、本當よ』

初対面のセイレーンさんに謝られたるような覚えのないわたしは、きょとんとして彼女をまじまじと見つめる。

しかしいくら見つめたって心当たりがある筈も無く、はあと氣の抜けた返事をしてしまう。

見かねたらしい女の子が、セイレーンさんの代わりに説明をかつて出してくれた。

「シトロネラさん、でいいのよね？

あたしはメルチ。

で、この子はあなたをそんな目に遭わせたくそ馬鹿一人組のお仲間。

実行犯じゃないけどがつたり関わってるわ。
ほんと考へなしなんだから」

ほへ、と物憂げにため息をついたメルチュさんは、見た目は幼いけれどセイレーンさんの保護者みたいだった。
さすがに思つところはあるものの、セイレーンさんの謝罪はどうあえず形だけでも受けておく。

待たせている人たちもいるだろうとの考え方から適当に流してしまっただけだったのだけど、わたしの言葉でほにやつと破顔したセイレーンさんを見て、なし崩し的に許してしまいそうだとこっそり苦笑いをした。

「せ、一度出でやつらとも合流するわよ。

シトロネラさん、あたしの横に。」

セレハみんなに彼女が見つかったこと知らせてから来なさいよ」

てきぱきと指示を飛ばすメルチュさんに従い、彼女の側に行く。
セイレーンさんははいと片手を上げて返事をし、ひらひらといちらへ手を振つてみせた。

すると次の瞬間視界から彼女の姿が消え、代わりにだだつ広い草原が現れた。

急な変化に驚きキヨロキヨロ辺りを伺うわたしは、隣に居たメルチュさんは短く、外よ、とだけ呟いて黙ってしまった。

じぱりべんのまま、わたしたちの間には沈黙が流れた。

居心地が悪く、話しかけるのも躊躇われたが、わざわざ迎えに来てくれたお礼は言つておかねばと、どきどきしながら口を開いた。

「メルチュさん、あの、いろいろありがとうございます」

深々とお辞儀をすると、首の魔物笛がガシャリと音を立てた。メルチュさんはそんなわたしをじろりと眺めた後、素っ気なく呟いた。

「仕方ないじゃない、コジマが眞にしてるんだもの」

それはけして好意的な響きでは無かった。

申し訳なくて、身体を小さくして頃垂れてもう一度すみませんと謝ると、メルチエさんは苛立たしげな口調で一気に捲し立てた。

「なんなの、あたしが苛めてるみたいじゃない。

なんであたしたちがあいつらの尻拭いしなきやいけないのよ、おまけに女狐と狸もついてくるしつ！

あなたも何なのその格好、おしゃれのつもり？

ほらこれあげるから仕舞いなさい、みつともない」

ふりふり怒りながらも、メルチエさんはわたしに小さな袋を差し出した。

これ以上迷惑はかけられないと押し返したが、無理矢理手の中へと捩じ込まれる。

諦めて受け取り、どう使うのかしげしげ見つめいたら、メルチエさんがアイテム収納用の袋だと教えてくれる。

急いでお礼を言つて身につけたものを入れると、その小さからは想像出来ない容量の袋の中にどんどん吸い込まれていった。

魔物笛を仕舞う途中で、その一つを感謝の気持ちとして差し出してみる。

が、受け取つてもうれず、がくじと肩を落とすと泣々といった様子でメルチエさんが口を開いた。

「感謝してくれるなら、あんまりゴジマに近づかないでね。
あなたが悪いんじゃないけど、これ以上あの人負担かけてほしくないの。」

その袋の対価はそれにして頂戴」

そう言ってそっぽを向いてしまった姿に、もの悲しい気持ちになる。

悪い人じゃないのだろう。

態度は素っ気ないが、良く思っていないわたしの収納しきれないアイテムに氣をつかってくれたことから、面倒見が良さそうだと感じられる。

対価というなら、助けにきててくれたことで十分なのだから。

出会い方が違えば普通の知り合いになれたかもしれないのに、と思えるからこそ、きつちり引かれてしまった線が悲しい。

それだけゴジマさんが大事なのだろうなと分かるから、それ以上踏み込む気にはなれなかつた。

しかしやはう、ゴジマさんは頼らない方が良さそうだ。

既にフレンドになってしまったことを、メルチョさんに伝えるべきか悩んでいたついでに、元通りつまつまつと人が増えてきた。

「シーロちゃん、シオリさんですよーっ！
えへへ、意外にちっちゃいんだね、かわいいっ！」

その中の一人、シオリさんが駆け寄ってきて、ぎゅっとわたしに抱きついた。

背中を丸めていたせいで、丁度顔が大きな胸に潰される位置になり、柔らかいその感触に慌ててしまう。

しかし離れてもううごこじても、口が塞がれて声が出ない。

「シオリーナ、困つてゐるだ

そう言つてシオリさんをべらつと剥がしてくれたのは、つい先ほどまで話題になっていたゴジマさんだった。

お礼を言しながら、早速忠告を無視してしまつたと青くなり、こつそり横田でメルチュさんを伺つ。

ここでこ笑つてこちらを見ていたが、わたしと田が合ひつと一緒にらつと瞳が光つたような気がする。

早急にゴジマさんの側を離れようとは思つたが、いつの間にか加わつたギルさんも交えて始まつてしまつた会話を上手く抜けることも出来ず、たらつと冷や汗をかく。

居たたまれなくなつて、気づかれないように然り気無く他の人たちの顔を見回し、キーチくんの姿を探した。

見つけたらそれを理由にこの会話を脱出しようと思つて。

しかしどこにもキーチくんは居ない。

そういうればわたくしも連絡が来なかつたし、本当に何かあつたのかと心配になる。

シオリさんもギルさんも何も言わないから、大丈夫だとは思つけれど氣になつてしまつ。

そしてしばらくして、街へと転移する事になつても、キーチくんは現れなかつた。

シオリさんに聞いてみたが、そのうちけやんと来るとだけしか教えてもらえぬまま、移動することとなつてしまつた。

ダンジョンから外へ出た時と同じように、一瞬で周囲の景色が変わり、大きな街の側に気付けば立っていた。

シオリさんに促されるまま中へ入り、みんなの後をついていく。所々に見覚えのある建物があつたので、おそらくはわたしが最初に降り立つた街に戻ってきたのだと分かった。

途中こちらを伺う人の数が妙に多くて、少し緊張する。

然り氣無くギルさんとシオリさんがわたしの両脇に立つて隠してくれたので途中から氣にならなくなつたけれど、思つているよりも自分がことが噂になつてているのではと不安になつてしまつ。

自意識過剰だとは思うけど、一度生まれた不安はなかなか消えてくれなかつた。

ようやく目的地らしい広いホールに入つて視線が無くなり、ほつと息をつく。

受付でコジマさんが何かの手続きをしているのをぼんやり眺めていると急に入口が開き、フリフリのロリータファッションに身を包んだ女の子が駆け込んで来た。

「いえーいつ、美少女七海ちやん参つ上ー。」

勢いよく叫んでびしつとポーズを決めた女の子に、ぽかんとしてしまう。

強烈な人も居るんだなあとしみじみ思ついたら、シオリさんに強く手を引かれてその背に隠された。

一瞬見えた顔が強張つていたような気がして、つられてわたしも緊張してしまう。

横目で周りを確認すると、シオリさんと同じように表情が固くして現れた女の子を見ている人が多数だった。

「『一発芸』のヒトが何の用なの?
呼んでないんですけどー」

棘のある声を投げ掛けたのは、キーチくんのような可憐なしつエアリーの男の子だつた。

ふくつと頬を膨らせ腕を組み、背中の羽を威嚇するように逆立て女の子を睨み付けている。

しかし女の子、七海さんは全く意に介した風もなく、笑つて受け流す。

「残念でしたつ、七海もちやあんと招待を貰いますよーだ。
そうだよねー、メルたん？」

その言葉に、メルチ_Hさんに一斉に視線が向けられた。
ギルさんとシオリさんが厳しい目をしていて、わたしが見られて
いる訳じゃないのになんだか居心地が悪い。

メルチ_Hさんはそんな視線をつけて少しバツが悪そうに肩を竦め
る。

「わつよ、あたしが呼んだの」

彼女がそう肯定の言葉を呴き額へと、あかこちから、なんぞいつ
してとの声が聞こえる。

人間関係がどうなつてゐるかよく分からぬわたしは、おひむねす
るばかりだ。

きつと中心にあるのはわたしのことなんだろつかど、それとは全
く違うところで話が進んでいくように見える。

「うるさいわね、だつてあたしたかといこひがだナジヤ偏りすがで
しょ。

バランス取るために一度いと想つて」

メルチューさんがフェアリーの男の子を肘で指しながら「うわー」と、
しぶしぶといった様子でみんな口をつぐむ。
しかしギルさんだけは笑顔でどこか陰のある言葉を投げた。

「困るな、そういうのは。
先に教えといてくれなきゃあ」

ね、とわたしに向かつて同意を求めてくるが、いきなり話を振ら
れて困つてしまひ。
代わりにシオリさんが受け、うとうとと頷いていた。
何で揉めているのかはわからない。
しかしこの駆け引きにシオリさんとギルさんも絡んでいることま
分かつてしまつた。

ほんの少しだけ一人から距離を取る。

わたしのためにしてくれていることなのかもしれないが、こういうのは得意じゃない。

早くキーチくんが来てくれないかな、と入口を何度も伺つた。

「いいだらう、ほら行くぞ」

「ジマさんがそう声をかけると微妙な空氣は払われ、みんな素直にそれに従いそろそろと移動していく。

わたしも行かねばと慌てて足を動かすと、ちよいちよいと服の袖を引っ張られた。

「はあーシトロン、七海と仲良くなつね」

振り返ると上田達一の七海さんと田代が合つて、ビヤモードにしてしまつ。

自己紹介する前にギルさんに間を遮られ、シオリさんに手を引かれてしまつたので、近づいたのは一瞬だったが、間から見えた七海

それを満足げにうなづいて笑っていた。

「いのん、シロちゃん。

あの子場を引っ越すのが趣味だから、あたしたちもびりびり
しゃしゃって」

わたしの手をぎゅっと握つてシオリさんが申し訳なさそうに肩を落として咳く。

ずっと明るく振る舞つてくれていたシオリさんのそんな姿に、元気にしてないと首を降る。

「あーよかつたつ！

シロちゃんに怖がられて嫌われたかと思つちゃつたよー」

茶田つ氣たつぶりの言葉に、つこさつき感じたことを見透かされたような気がしてきくらしたが、曖昧に笑つて誤魔化しそうりと視線を逸らした。

嬉しそうに笑うその顔を見ると、おろおろして使い物にならなか

つたわたしを庇ってくれた人に薄情だったと軽い自己嫌悪に陥ってしまいそうだ。

階段を上り、長い廊下の突き当たりにある部屋に入った。中は広々としており、椅子があちこちに転がっていた。

みんながそれに椅子を拾つて適当な場所に座っているのを見てわたしもそれに習ひ。

最初は隅の方に座つたのだが、シオリさんに促されて真ん中の方へ移動する。

落ち着いたので人数を数えると、わたしも含め全部で十人がそこにはいた。

「ジマさんが立ち上がり喋りだそうとした瞬間、どこからかピピピピ」とアラーム音が響いた。

メルチヨさんがさつと席を立ち、部屋に備え付けられていた電話を取り一言一言話した後、受話器を持ったままこちらを振り向いた。

「キーチが下に来てるけど、入れていい？」

待ちに待つた人の登場に、ぶんぶん激しく首を縦に振る。隣ではシオリさんが意外そうな顔をしていたが、嬉しい知らせに気を取られていたわたしはその表情の意味を深く考へることはしなかつた。

部屋の人たちに断つて、扉の近くでキーチくんを待つ。

隣にはギルさんとシオリさん、ついでに何故か七海さんもいる。あんまりにわたしが楽しみにしているせいか、シオリさんが複雑そうにこちらを見ていたので少し恥ずかしくなり、出来るだけ気持ちを抑えるよう努めた。

そしていよいよ扉が開いた。

思っていたより小さくはなかつたけれど、画面で見たままの姿に顔がつい緩んでしまう。

キーチくんはずらりと並んだわたしたちを見て、ギョッとしたよう後に後退りした。

しかしづぱりとわたしと田が合つて、うわうわと視線をさ迷わせた後、ぽそりと眩きそっぽを向いた。

「よ、よう、久しぶり」

耳まで真っ赤にしたその姿に吹き出しそうになつたが、何とか堪えてわたしから歩み寄る。キーチくんはまた後退りしかけたけれど、一步下がつたといひで踏み止まつてくれた。

「久しふり、キーチくん

もつと氣のきいたことが言えれば良かつたのだけど、浮かれたわたしにはそれが精一杯だつた。
だけどキーチくんはそれでよつやくちゃんとじりじりを見てくれ、照れくさそうに田尻を緩めた。

「えー何なの何なのつ、意つ外、七海びつくり！
シトロンとキー坊どんな関係なの、怪しいー！」

せりあやと樂しげにからかう七海ひかるの面接室、わたしたちは
揃つて首を傾げ、同時に口を開いた。

「友達ですか

「と、友達?」

示し合わせたように重なった言葉は、七海ひかるが、笑
い転げ、シオリさんがあざわらうとして中で抱き着いてくる。

「えー、シロちゃん、あたしまつ?

友達だよね?」

拗ねたような声で荒てて頷くと、シオリさんは満足げに笑った。

「もういい?
話進めたいんだけど」

入口でじやれ合つわたしたちに業を煮やしたらしいメルチエさんから厳しい声が飛び、慌てて席に戻る。
「ゴジマさんが困ったようにたしなめていたが、メルチエさんはきつい目でこちらを睨んでいて、一気に頭が冷える。
これから一体何が起こるのか分からぬが、厄介そうだなとこつそりため息をついた。

全員が座つたところで、ゴジマさんがフェアリーの少年にちらりと目配せをした。

すると少年とその近くにいたセイレーンさんと一緒に男性が揃つて立ち上がり、やけに沈痛な面持ちでわたしの前へやってきた。男性一人はおそらくわたしをダンジョンに放り込んだ二人組で、セイレーンさんもいることから少年もその仲間なのだと理解する。

「すみませんでしたつ、『めんなさい…』

黒髪で眼鏡の青年が大声で叫びながらジャンプしてから床に這いつくばり、土下座のポーズをとると、残りの三人も口々に謝罪の言葉を叫んでそれに倣う。

一度に四人の人間に土下座され、わたしはぎょっとしてしまった。慌てて立ち上がり、やめてもらえるように頼むが一向に聞き入れてもらえない。

代わりに少しだけ顔をあげて何か訴えるような潤んだ目で「こちらを見つめてくる。

何だろ？、この茶番は。

慌てながらも、そう思わずにはいられなかった。

ここに来るまでに、いくらでも個人的に話す機会はあった。

だけどセイレーンさん以外に謝罪はあらか言葉をかけられることすらなかつた。

なのに今さらこんなパフォーマンスをされたつて、遊ばれているようになんか感じない。

ダンジョン内でセイレーンさんとのやり取りを思い出す。

メルチュさんに言われて初めて謝った彼女は、無邪氣であるで小さな子供のようだった。

彼らもおんなじなのかもしれない。

途中から慌てるのをやめ、じつと彼らを見下ろしたわたしに何を思ったのか、コジマさんが声をかけてくる。

「俺からもう一度謝罪させてくれ。

」こつらを止められなくて本当に済まなかつた

さすがに土下座はしなかつたけれど、立ち上がりて深く頭を下げるコジマさんに苦々しい気持ちが沸き上がる。よつてたかってそんなことされたら、もうここによつて言つしかない。

「こりで怒れるほど、胆の座つた人間じゃないのだ。

「ええと、みなさん顔を上げてください。
もう済んだことですし、気にしてませんから。
助けに来ていただきありがとうございました」

複雑な気持ちを押し殺して、にっこり笑つてからこちらからも頭をさげると、嬉しげに笑つて顔を上げる四人組の姿が目に入った。やつぱり、と自分の推測が外れていなかつたことを確信し、肩の力を抜く。

きつと腹を立てても無駄なのだろう。
釈然としない気持ちは消えないものの、そういう人たちなのだと諦めた。

四人組はもう既に立ち尽くすわたしをよそに、コジマさんへと興味を移してしまつている。
ゆづくつ腰を下ろしながら、始まつた次の茶番をぼんやりと眺めた。

「平氣か？」

眉を寄せ小声でわたしを気遣う様子を見せるキーチくんに、やや
くれた気持ちが少し穏やかになる。

大丈夫だと笑つてみせると、舌打ちをしてわっぽを向いてしまつ
たけれど、その気持ちが有り難かつた。

「オヒトヨシ様、ああ、『ジマのことね。
あれの周りはいつもこんな感じ。
オカシイでしょ？』

耳元で囁かれた声にびくりとして振り返ると、妖しい笑みを浮か
べた七海さんがそこにはいた。

「狐と狸には気をつけてね。
可愛い七海ちゃんからのア・ド・バ・イ・スツ！」

いつの間にかゴジマさんと四人組の間に立つて取りなしているシオリさんとギルさんへ曰くありげな視線を投げ呴いた後、七海さんは素知らぬ顔でわたしから離れていった。

しばらくして話はついたらしく、フェアリーの少年が嬉しそうにゴジマさんにぎゅっと抱き着き、メルチエさんに引き剥がされてしまた抱き着いてを繰り返していた。

シオリさんとギルさんは満足そうにそれを眺めている。

もうわたしがここにいる必要も無いように思える。

キーチくんを誘つて退出しようとかと思い始めた頃、七海さんからからかい混じりの声が飛んだ。

「ねえねえ、まだ続けるなら七海、シトロン連れてつらやうよ？
いいよねー？」

その言葉でシオリさんとギルさんが弾かれたよつて動き出し、素早くわたしと七海さんの間に立つ。

「玩具にされるのが分かつて連れていかせる訳がないだろ」

ギルさんが険しい声で七海さんに応戦し、シオリさんが小さく「めんねとわたしに謝った。

きつとさつきの茶番劇の前なら普通に頼もしく感じただろうその行動がなんだか白々しく見えてしまい、その事実に少し落ち込んだ。そこまでわたしはやさぐれでいるのかと情けなくなってしまつ。

だけどどうして、と思わずにはいられない。

ゴジマさんたちの仲直りまでの一連の流れに一人が関わっているのはきっと間違いない。

四人組の土下座まで一人が考えたとは思いたくないけれど、何にも言わなかつたってことはわたしにはそれで十分だつて思つてることじやないだろうか。

今までのやり取りでそう判断されてしまつたなら、わたしも悪かつたのだろうけど少し悲しい。

「すまないがもう少し居てもらいたい。

一人で過ごさざるを得なかつた日々に対する補償をやせじょせい

ゴジマさんにそう言われて、七海さんはあつせり引いた。
別に必要ないとオブラーートに包んで辞退したもの、遠慮していると受け取られ、メルチョさんにまで押しきられそうになる。
このままでは不味いと、心を奮い立たせて今度ははつきりなこと指げた。

「隠し部屋で作れたものもありますし、補償して頂くほど酷い毎日だつた訳じゃないです。

それに、いろいろしてもらつたり、これからプレイが楽しくならないそうです。

お気持ちはありがたいんですが、それだけで十分です

少し強めの口調できつぱり言い切る。

さすがにこれは譲れない。

わたしがこう強気に出ると思つてなかつたのか、シホリさんヒギルさんまでも驚いたようにこちらを見た。

「えー、せっかくだからギルド入るよ！
『おちゃん入れてくれるってゆつてるし。
ソロプレイは大変だよ。」

あ、ボクたちもスキルレベル上げるのも手伝つたげる！」

フ・アリーの少年がゴジマさんの背中から顔だけを覗かせ、無邪
気にそんなことを言い出した。

補償の内容は驚くことに、ギルドへの加入だつたらしい。
どこが補償なんだと呆れないと、シオリさんとギルさんが慌て
てフォローを入れ始めた。

「えつとね、シロちゃん。
ゴジマの『さんふらんしづこ』、加入するのすりごく難しいのつ。
普通はね、いくらゴジマが連れて來た人間でも同盟のギルドに入
るのが当たり前なんだよつ」

「そうそう、こんなチャンス滅多にないぞ？」

『さんふらんしづこ』のメンバーつてだけで余計な揉め事に巻き
込まれなくなるし、守つてだつてもらえる。

有名になつたシロちゃんには、これ以上ない場所だと思つ

一人はわたしがギルドに参加することに賛成なよつで、あれこれ言葉を変えて必死に説き伏せよつとしてくる。
しかしいくら言われても、これだけはわたしの譲れない部分なのだ。

「『やんふらんしす』が嫌なら七海のとこおいでよー。
おつきくないし助け合いもしないけど、樂しそよー。」

途中七海さんも加わってきたが、その提案も遠慮する。
じゃあ仕方ないねとあつさりと言葉を引っ込めた七海さんに笑つてお礼を言つたせいか、シオリさんたちもよつやく口をつぐんでくれたけれど、残念そうな顔でこちらを見つかる。

「本人が嫌だつつてるんだから仕方ないでしょ」

素つ氣なく呟いたメルチエさんの言葉で、更に何か言おうとしていたフェアリーの少年も口を閉じる。

これでひとまずギルド入りは回避出来たようだ。

メルチエさんの思惑がどこにあるようと、助けて貰つたことには変わりない。

ぱちりと目が合ひ苦笑を歯み潰したような表情になつたメルチエさんに、苦笑いして軽く頭を下げるおいた。

しばらく部屋の中に氣まずい沈黙が流れた。
居心地が悪くなり、さつさと部屋を出ようと腰を浮かしかける。
しかしづつと顔を輝かせたフェアリーの少年に、行動を遮られて
しまう。

「じゃあじやあ、せめて一緒にパーティー組んで遊ぼうよ、おひこ
ちゃんも一緒にっ！
たまーにでいいから、ね？」

パタパタと駆けよってきて、膝をついて腕の袖を掴み、上目遣いでこちらを見る少年にどうしたものかと困ってしまう。
この子は本当は女の子なんじゃないかな、と関係無いことを思いながら、慎重に言葉を選んで断りの言葉を述べる。

それを聞いた少年は、悲しそうな顔をして俯きか細い声で呟いた。

「やつぱり許してられないんだ、ボクたちの」と

しょんぼり縮こまつて肩を震わせる少年の姿に、自分がもの凄く
酷い仕打ちをしたような気分になる。

しかしあやんと理由を説明しようと口を開いたものの、また
してもそれは遮られた。

「あつたつまえじゃーん、七海あんな謝り方されたらぜりつたい
に許さないもん。

ほーんと『せんぶらんしき』のトッグ様は甘いんだからあ

めやつめやつと樂しげに喋る七海さん、「ジジマさんが素早く反
応して表情を曇らせ、また頭をトーザやうになつたので慌ててシオリ
さんたちと共に止めに入る。

見当外れの言葉では無いのだが、今そんな援護射撃は欲しくなか
つた。
つい恨みがましくじとつとした目で七海さんを見ると、『せんぶ
とあまり趣味の良くない笑顔を浮かべてわたしを見ていた。
場を引っ搔き回すのが趣味だと云つたシオリさんの言葉は正しか
つたらしく。

「厄介な人たちばかりだと頭が痛くなつたが、とりあえず「ジジマさんたちの誤解を解くべく再度口を開く。

今度は誰にも遮られなかつた。

「ええと、わたし、パーティー組んだ人のステータスが70%も減っちゃう称号持つてるんです。

だから許してないとかじやなくつて、パーティー組む気が無いんですけど、すみません」

建前と嘘をちよつぴり混ぜつつ説明し、ぺこりと頭を下げる。なんだ、じゃあしじうがないね、と残念そうに呟く少年に薄く微笑みながら、さりげなくその手を袖から外す。

「えー残念だよソリ。」

さつと近づいてきてわたしに抱き着いたシオリさんの言葉に曖昧に笑つてみせた。

「ジマさんとメルヒさんとが何やら相談しているのを眺めていると、シオリさんが閃いたとばかりに明るい声である提案をしてきた。

「じゃ、パーティー組みなきゃこいんだよね。

パーティー組まないでも普通に一緒に遊べ……ば……ちょ、キー
チッ！」

しかし突如として田の前に開いた画面に、シオリさんの言葉は途切れてしまう。

プレイヤー：キーチからパーティー申請が届いています。

受理しますか？ YES or NO

驚いて振り返ると、そこには顔を赤くしながらもきっと強い視線でわたしを見てくるキーチくんがいた。

「えと、キーチくん?
パーティー組んだりキーチくん弱くなっちゃうし、いいことない
よ?」

パーティー申請の画面はわたし以外にも見えてしまっているよう
で、部屋中の人の視線を感じながらも小さな声でキーチくんに尋
ねる。

一人でこそこそ狩りをするしか無いと思つていたので、気持ちは
嬉しい。
だけじゃ今までしてもらいつらう義理が無い。

「やうだよキーチつ!
シロちゃんの話聞いてなかつたのつ?
困らせるよくなことしちゃダメつ!」

シオリさんが珍しく声を荒げキーチくんに詰め寄つた。
いつの間にか近づいてきたギルさんもそれに加わる。
しかしキーチくんはそんなわたしたちの言葉を一蹴してしまつた。

「うせえ、そんぐらうどううてことねえし。
と、友達だつたら、協力すんのは当たり前だらう、友達だつたら
う！」

一回も友達だと叫んだキーチくんに、ほわりと気持ちが暖かくな
る。

本当に、不器用でいい人だ。

それが分かるからこそ、これ以上迷惑はかけたくない。

シオリさんとギルさんはまだキーチくんに苦言を呈している。
ぎりと眉を吊り上げているシオリさんのその表情が少し怖い。
ギルさんはシオリさんをたしなめつつも、キーチくんへの文句を
止めようとはしない。

他の人たちもそんな様子を黙つて見守つており、わたしが一人を
止めなけれど焦る。

早く選んでこの場を收めようと、急いで画面に手を伸ばした。
しかしNのを選ぼうとしたその手は、後ろからやんわり止められ
てしまひ。

「シオリちゃんあん、シトロン怖がつてるよお？」

手を握つたまま七海さんがくすくす笑いながら声をかけると、はつとした様子でシオリさんとギルさんはキーチくんから離れ、七海さんからわたしを引き離そつと手を伸ばしていく。

しかし七海さんはそれをひらりとかわし、掴んだわたしの手をキーチくんの手に重ね、何かが書かれた紙をぐるぐると素早く重なった手に巻き付けた。

「キー坊の頑張りにい、感動しちゃつた七海からプレゼントー シトロン、また」

そこで七海さんの声は途切れる。

どうしたのかと振り返れば、やっこには七海さんもシオリさんたちも居なかつた。

代わりに目に飛び込んできたのは、幾つもの建物に満天の星空。

「へ？」

そう、わたしとキーチくんはいつの間にか見知らぬ街に立ち渴んでいたのだ。

明らかに先ほどまで居た街とは違う。
一体何が起こったのかと混乱するわたしは裏腹に、すぐに何かを察知したらしいキーチくんが小声でぶつぶつと悪態をついている。

「あ、キーチくん？」

戸惑つたままキーチくんの名前を呼ぶと、キーチくんはしかめ面でくいっと顎をしゃくった。

その先にあるのは、開いたままのパーティー申請画面。

困つて視線で難色を示すと、キーチくんはゆっくり頭を振つた。

「いきなり70%なんて嘘だろ。

二人パーティーでそんなに減る訳がねえ。

パーティーだと支援魔法とかタゲ取りとか便利なことが増えんだよ。

あ一面倒くせえつ！

後で説明するからとつとと承諾しつけつ！」

最後はがしがし頭を搔きながらもどかしそうに叫ぶキーチくんの勢いに押され、ついぽちっとYESを選んでしまった。

これで良かったのかと思わないでもなかつたが、酷く満足そうに頷いたキーチくんの笑顔に、そんな気持ちは一瞬でどこかへ飛んでいつてしまった。

「改めてよろしくね、キーチくん。
えええっと、それで、ここは？」

辺りをぐるっと見回してもう一度ここが知らない場所だと確認してから、心当たりのありそうなキーチくんに聞いてみる。

キーチくんは囁々しげに舌打ちをした後、一つの店を指差した。

「あそこで説明する。
面倒な横槍入んねえように通信切つとけ」

ぶつきりぱうに吐き捨てるかわいがり出したその背中を慌てて追いながら、メニューを開く。

隠し部屋では見えていなかつた項目が増えていることに驚いたが、設定を開き片っ端から機能をオフにしていった。

「あ、ねえ、連絡つかなかつたらシオリさんたち心配しないかな？」

途中でそれが気にかかり、声をかける。

キーチくんは足を止めて振り返り、むつと眉を寄せて首を振った。

「七海がある程度説明してるだろ。
つづーかお前、腹立たねえのかよ。
あいつらのお膳立てによ

ぶすっと機嫌の悪い声で逆に尋ねてきたキーチくんに、わたしは少し考えて素直な気持ちを告げる。

「んー、感謝してるよ、助けてもらつたし、いろいろしてもらつたし。

でも良く考えたらなんか、ちょっと変だつたよね、全部

思い出して改めて氣づく不自然なこくすつと笑うと、キーチくんは呆れ顔で肩を竦めた。

その大人びた仕草が見た目が少年のキーチくんに似合つていなくて、堪えきれず噴き出してしまつ。

そんな様子をギョッとして見ていたキーチくんだったが、やがて諦めたようにひとつため息をついてゆっくり店へと歩いていき、わたしもそれに続いた。

「七海ちやん、どうこうもりじなのかな？」

シトロネラとキーチの二人が消えた部屋、シオリーナの静かな声が響く。

表情はじつそり抜け落ち、瞳だけが七海をぎらりと強い視線で捉えている。

「あははっ、何か都合悪かつたあ？」

しかし七海は怯んだ風もなく、わざとシオリーナを挑発するような言葉を選ぶ。

一瞬、きりつと悔しげに顔を歪ませたシオリーナは、すぐに平静を取り戻し、大きなため息をつく。

そして部屋中の人間に見せつけるかのように、眉を寄せて弱々しく七海を非難し出した。

「酷いよ七海けやさ、シロけやんやつと離して部屋から出たとい
なんだよ。

なのにこきなつじに飛ばしきりつなんて、悪ふざかしさがだ
よ。

ね、ギルもコジマもレオくんたのむ、やつ迷ひよなつへ。」

そこで一旦七海から視線を外しぐるつと部屋を見回すと、何人も
が頷く姿が目に入る。

「シオリ、駄目だ、シロちゃんにもキーチにも繋がらない

七海を責めるシオリーナの後ろで消えた二人と連絡をつけようと
していたギギアルが、難しい顔で首を横に振った。

「ジマも同じだったようで、僅かに肩を落としていた。

その隣で慰めの言葉をかけているメルチエに気付いた七海が、に
やにやと豊かな笑みを浮かべた。

「丸三日追跡通信不可になる脱出札だから無駄だよ。」
ほらほら、ずつと前にストーカー対策用に作られたやつ。

「ひーかあ、メルたんは知ってたよね？」

急に矛先を向けられて、メルチエはびくっと肩を震わせた。

「どうこういじだ」

反論もせずにむつり不機嫌そうに黙り込んだメルチエだったが、ゴジマに険しい顔で問われると、微かに俯きあつさりとその思惑を白状する。

「考えても『らん、自分を浚つた相手と、その顔見知りに囲まれて、ギルドにまで勧誘されて嬉しいかい？』
『ゴジマは気にせず許しちゃうだろ？』けど、あたしは絶対やだよ。」

だから頃合を見て逃してやるつてそこの問題兎が言つかり、乗つたんだ。

まさかこんな方法だとは思つてもみなかつたけどね

かぶりを振つて力なく肩を落としたメルチエに、ゴジマはそれ以上のお追求はしなかつた。

ただ黙つて彼女の頭をぽんぽんと優しく叩き、何か言いかけたシリーナとギギアルに頭を下げた。

「すまない、俺が焦つて周りが見えていなかつたせ이다。

あまりメルチエを責めないでやってくれ

その姿に一人はしぶしぶ口を開じる。

そして改めて七海に対し、メルチエに対しての文句が不発に終わつた鬱憤を晴らそうとするかのように、ねちねちと遠回しな嫌みを投げかける。

「何で七海ちゃんは言ってくれなかつたの？」

あしたちは中立だしシロちゃんの味方なのになあ

「ああ、せめて俺たちも一緒に飛ばしてくれればよかつたのに。
キーちじゅ少し心配だ」

代わる代わる不満を口にするシオワーナとギギアルの言葉をにっこに笑いながら聞いていた七海は、途中でぐるりと身体の向きを変えた。

そして他人事のようにぽんやり成り行きを眺めつつ、四人でこそ何やら笑い合っている『愉快犯』のメンバーのうちの一人、セイレーンをびしっと指差した。

「はい、セイたん、七海からの質問です！」

シトロンが一番なついていたのは誰でしょうつか？

突如話を振られたセイレーンは驚いて皿をぱぱりぱぱりと落としたが、しばらく考え込む。

「はあい七海せんせ。」

キーチくんとシオリーナちゃんと思います

右手をびしつと耳にあたるよつに挙げてセイレーンが答えるも、七海は首を横に振る。

同じように残りの三人にも訊ねていくが、誰も正解を貰うことは出来ず、珍しく七海が心底呆れたような表情を浮かべた。

「えーってかちょっと見てたらすぐ分かるのに、七海信じらんな
い。

謝つたらシトロンに興味無くなっちゃったの?
んふふ、ねえゴジゴジ、この子たち全つ然反省しないっぽいよ
?」

最後はにやりと笑つてゴジマに視線をやると、彼は頭を抱えてため息をつき、まだ問題ばかりの彼らと向き合つて何やら小言を言い始めた。

四人組はしゅんと顔を俯かせて大人しくそれを聞いている。
メルチエはそんなゴジマを、やれやれと呆れながらも、優しい顔で見守っていた。

完全に注意の逸れたゴジマたちを余所に、七海は更に話を進める。

「シトロンは完全にキー坊しか信用してないっぽかったよ。
あの子たちのパフォーマンスの後にシトロンのフォローに回らな
かつたのは痛かったねえ。

売り込みに必死にな・り・す・ぎつ！
んふふ、ざあんねん、詰めが甘かつたねえ」

一人しか聞いてないからだろ？

七海はわざと思惑を炙り出すような言い回しをもつて一人をから
かう。

ひくりと顔をひきつらせたシオリーナだったが、すぐににっこり
笑ってみせた。

「七海ちゃんが何言つてるのか全然わかんないけど、有り難い忠告
として受け取つとくねっ！」

ここにこと笑顔で見つめ合つ一人から、うすら寒いものが流れる。
ギギアルは少し顔をしかめてその様子を眺めた後、何気ない風を
裝つて一つの心配を口にした。

「で、今回のことなぜぱり記事になるのかな？」

シロちゃんのためにも遠慮しておいて欲しいんだけどな」

別に自分は一向に構わないけれど、とでも言つたげな口調に、七海はわざとじりしへ首を傾げてみせる。

「狐ひやんと狸くんがしばりへシトロンたちひよっかいかけないなら考へてもいいよ？」

具体的には、そだなあ、七海がはるたんとシトロンを引き合わせるまで。

「せ、シトロンのためにもね？」

「ふふと含み笑にする七海をじょりへじつと見つめた後、キギアルはため息をひとつこいて頷いた。

「分かった、だけど勿論連絡はするよ。」

「いいよね」と笑って念を押したギガアルに、七海はワインクを寄越し、ちょつかいかけなきや会つてもいいよ、と呑みのある言葉を囁いて頷いた。

「じゃ、七海はこれで帰るから、あつひは狸くんたちにあげちゃうつ。

あーん七海優しいつー。

けらけらと楽しげに笑いながら軽やかな足取りで部屋を出ていく
その背中を、二人は悔しげな表情で睨み付けた。

「甘かつたわね」

「ああ、キーチの行動が予想外過ぎた」

低い声で互いの認識を交換し合へ。

七海だけならまだ何とかなつたかもしれない。

しかしキーチがあんなにシトロネラに拘るとは思つていなかつた。足止めをすれば言動に似合わず臆病なキーチのこと、後から一人で乗り込んでくることは無いだろうと、例え来たとしても緊張して口クに喋ることも出来ないだろうとタカをくくついていたからこそ、あんな仲直りを優先させた謝罪パフォーマンスを提案したのだ。それがこうも崩されてしまうとは、一人とも想像だにしていないことだった。

「とつあえず、あつちに食い込むわよ

「了解、シロちゃんとは繫がりを維持するだけでいいよな

「ん、隙を見て取り込も。

何となくだけどあの子、まだまだいろいろ釣り上げてくれそうだもん」

手早く反省会を済ませ、まだ揉めているゴジマたちの元へと向かう。

明らかに一人の思惑を見抜いた上で、わざと彼らを揉めさせてか

ら去つていった七海に、それぞれ苦い気持ちを抱いた。

「次は絶対、負けないんだから」

この場を辞してしまった少女にむけてぼそりと呟いてから、シオリーナたちはとびきりの笑顔で双方の間に滑りこんだ。

待ちに待つた食事

じゅりんまりしたその店の中は、がらんとしていて、わたしたち以外の客は居なかつた。

それどころか店員の姿すら見えず、面食らつてしまつ。四人掛けのテーブルが三つ置かれていたがそれだけで、厨房らしき物も見当たらない。

店で話をすると言われたので、てっきり食堂か酒場なのだらうと思つこんでいた。

確かに食事がとれると楽しみにしていたので、少しがつかりしながら、机を挟んでキーチくんの斜め前に腰を下ろす。するとキーチくんは机をトントンと叩き、目の前に画面を出現させ、私にもやつてみるよう視線で促してきた。

訳も分からず、見よつ見まねで同じように机を叩く。

「おお、メニューだ」

そして現れた画面には、食べ物の名前がずらりと並んでいた。ゲーム開始直後から「フォルトで持つてゐる500Gではとても

ガル

手が出そうにない値段の料理が、画面いっぱいに並んでいて思わず腰が引けてしまう。

しかし下の方へ視線を移すと、30G前後のお手軽な値段のものも幾つあることに気づいてほっとする。

どれにしようかしばらく悩んでから105G分、三品の食事を頼むことにした。

ぱちぱちと画面を操作して支払いを終えると、間を置かずさっと机の上に注文したものが現れる。

こんな仕組みなんだと感心していると、キーチくんが驚いたようにこちらを見ていることに気付いた。

わたしもキーチくんの方を見て、皿を丸くしてしまう。

キーチくんの前にあるのは、コーヒー一杯だけ。

対してわたしは、料理の乗った皿が三枚。

明らかに何か勘違いしている自分に、一気に顔が赤くなるのを感じた。

「あ、あはは、何か口にするの、久しぶりだから、つい。
そ、そうだよね、食べながら話つてあれだよね」

恥ずかしくなって取り繕つように笑うと、キーチくんは黙つて再びメニューを開き、わたしに合わせていくつか料理を追加してくれた。

気をつかわせてしまったようだ。

話が終わってから頼るべきだったとがっくり肩を落として反省す

るわたしを余所に、キーチくんは一人でちりちりと食事を始めた。

「 んだよ、 食えよ」

一口食べてから、まだ手をつけてないわたしをちらりと見てそう
言つてくれる。

本当に何かから今まで迷惑をかけっぱなしである。
申し訳なく思いつつも、その心配りに感謝して、そつとフォーク
を手に取つた。

「 うん、 ありがとうございます」

まず口に運んだのはスクランブルエッグ。

□一杯に何かが広がつたが、久しく食事をしていなかつたせいか、
刺激が強すぎてくらべくらしてしまつた。

鼻がつんとして、思わず涙が出そつになつたが、ぐつと堪える。
一口目からは普通に味が分かつた。
優しい卵の味がする。

卵そのものの甘さとほんのり漂うバターの香りを楽しみながら、ゆっくり何度も噛み締めた。

長い間食事を取っていないのに、すぐに普通に食べることが出来ると云ふなところは、やっぱりゲームなんだなと感心しつつ、夢中で料理を口に運んでいく。

安いだけあって一皿の量は少なく、たった五口でスクランブルエッグを平らげてしまい、少々のもの足りなさを感じながら次の皿に取りかかる。

次はポテトサラダだ。

これも非常に少量だったので、より樂しめるように一回に一口で運ぶ量を少なめにした。

ジャガイモとニンジンだけの非常にシンプルなものだったが、私の好みのジャガイモの形を残さず綺麗に潰したタイプだったのが嬉しい。

ひとつとらかなジャガイモの舌触りと、柔らかいながらも噛むと伝わるニンジンのほんのりとした甘さと食感につつどりする。舌を転がして口内のあらゆる場所でその味を楽しみ、ふんっと鼻で息をして抜けていく香りをスペースに、よりその味を引き立てる。

なんて美味しいんだろうとつとつと幸福感に包まれたまま最後の一 口まで味わい、ほうとため息をついた。

まあ次だとまた張り切つてフォークを握り直したところで、はつ

と返つて斜め前のキーチくんに皿をやる。

食事に夢中になりすきで、すっかりキーチくんのことを意識の外に飛ばしてしまっていた。

見ればキーチくんは既に食事を終えており、黙つてわたしが食べ終わるのを待つてくれている。

「う、うめんなキーチくん…。」

慌てて皿を横にじかし、机ギリギリまで頭を近づけて謝った。
せつかく話をするべく連れてきたのに、とんだ醜態を晒してしまった。

あるいはとか一緒に居ることを忘れてしまつなんて、失礼にも程がある。

しかしキーチくんは怒る気にならなか、文句を言おうともせず、むしろ可笑しそうに明るく笑つた。

「はははっ、んなに美味しいのかよ。

いいぜ、ゆっくり食えよ。

俺もそれ食べたくなつたし

その笑い声に驚いて、がばっと顔を上げた。

照れずに声をあげて笑うキーチくんなんて初めて見た。何とも新鮮で、ついまじまじと見つめてしまつた。

言葉通りポテトサラダとスクランブルエッグを注文したキーチくんは、そんなわたしに気づき訝しげな顔をする。

慌てて視線を逸らし、キーチくんの頼んだ料理が気になつている風を装つた。

「それどうもすっごく美味しかったよ」

誤魔化すよひにひづけば、キーチくんはふんと鼻をならして小さく笑う。

「お前が食うの見てりや分かる」

そう言つてやつやと食べ始めたので、私も話をやめて食事を再開

することにした。

残るはソーセージ一本だけだ。

プスリとフォークを突き刺して口に運び、一気にかじりつく。

ふちりと外側の皮が弾けると同時にじゅわりと肉汁が溢れ、豚肉とハーブの味が口に広がり、とけた脂が舌に絡む。

待たせないようになつさと食べてしまおうと思っていたのに、飲み込んでしまうのが勿体なくて、殆ど形が無くなるまで噛み続けたので、結局はたった一口にかなりの時間をかけてしまった。

一口目からは、もう少し余裕を持つて味わい、そこそこ楽しんだ後すぐに飲み込んだ。

多少の形を残していたため、飲み込む際に喉の奥でより味わうことが出来た。

一本目もしっかりと楽しんでから、未練がましく留めていた最後の一囗を「ぐんと飲み込み、はああと感嘆の息を吐いた。

「すういね、このゲーム。

こんなにリアルに味覚が再現されてるなんて。

ああ幸せ、ごちそうさまでした」

丁度同じく食事を終えたキーチくんに、そのまま感動を伝えるとまた笑われてしまった。

「変なことに拘つてるからな。

けどこれでそんなに感動するやつも珍しいだ。

料理スキルで作ったやつはもつと美味しいぜ」

その言葉に思わず目を輝かせる。

こここの料理も十分美味しかったのに、それ以上があるといつのである。

誰かが作ったものをフリマなどで手に入れる」とは出来るだらつが、ここは是非とも自分で取得したい。

現実での料理の腕はさほどでは無いが、スキルならばレベルを上げればより美味しく作れるようになるのだろうか。

それは何とも魅力的だった。

すっかり意識をそちらへと向けてしまつたが、キーチくんの言葉で正気にかえる。

「じゃ、何から説明すつかな」

「——ヒー瞬りぼそりと呟いたキーチくんは、しばらく考え込んだ後に、がしがしと頭を搔いて頬を赤くし、ふるふると頭を振る。一体何を考えているのか気にはなつたが、ちょっと面白かったの

で、声をかけるのはやめて黙つてその様子を眺める」とした。

危なっかしい人

「こんなところに来たのは多分、転送アイテム使われたからだ。
あいつ、七海ってやつが何考えたかは分かんねえけど、お前にと
つてはラッキーだったと思つ」「うう」

やがて口を開いたキーチくんの言葉を聞きながら、七海さんの行
動を思い返す。

みんな警戒していたしそれを分かつた上でおちよくなつてもいたが、
そこまでの不快感は無かつた。

それはおそらくターゲットが私じゃなかつたからだひつ。

「あー、聞いているかもしんねえけど、このイベント、一週間過ぎ
たくらいから、飽きて抜けるやつ增多くんの。
いいタイミングでこの街に避難出来たな」

いきなりぽんと飛躍した話に、つい首を傾げてしまう。さすがにそれから全てを察せるほど、賢くもないし知識も無い。キーチくんもそう思つたのか、詳しく補足してくれた。

「狩り場はさすがに分かるよな。

人が減ると、空いた人気の狩り場に移動するやつが増えんだよ。で、その近くの街に拠点置くやつが増えて、プレイヤーが全然いねえ街が増える。

ここはいねえ方の街だ。

正直拠点にするには微妙、でもお前無駄に知名度上がってるし、最初の街だと絡まれてゲームビックりじゃねえだろ。だからラッキーってこと」

間を置かず一気に喋るキーチくんは少し早口で、ついていくのが必死だったが、一応の事情は飲み込めた。

きっとそれだけじゃなく、あのままじや事あることにコジマさんや誘拐犯の人たちに接触されて、目立つことになっていた氣もある。そういえばセイレーンさん以外の誘拐犯の人たちは名乗りもしなかったことを思い出し、今更ながらむつとしてしまつ。しかしキーチくんが再び説明を再開したので、そちらへ集中した。

「普通は最初の街でチユートリアル受けて自分に会つた武器選ぶんだけどこの街では無理。

ま、まあ、仕方ねえから、お、俺が代わりに見てやるよ。あ、ありがたく思え！」

途中からしじみもじひになりぎつと私を睨み付けながらも、やう言つてくれるキーチくんの気持ちはとても嬉しかった。しかし本当にそこまでしてもらひていいのだろうか。明らかに甘えすぎている。

「あのね、キーチくん、パーティーのことなんだけど」

やつぱつよろしくないと思い、パーティーを解散しようと言つかけたが、一瞬だけキーチくんの瞳が弱々しく揺れた。

それにどきりとしてしまい続くはずの言葉を発するのを躊躇つていると、不機嫌に顔をしかめ、しかしここか拗ねた風にキーチくんがぼそりと呟いた。

「んだよ、今更やだとか言いつもりかよ。
俺じゃ頼りねえってのか、ふん」

刺々しい言い方だったがどこか気落ちしている様子に、すっかり焦ってしまったわたしは、提案するはずだったパーティー解散の代わりに、全く別のこと口にした。

「ええっと、そうじゃなくて。

ステータス、そうそうステータスがね、パーティー組んでどうなつたか聞きたくって！

あ、わたしも確認するね

取り繕つように早口で告げ、そのままメニュー画面を開き、こつ

そりキーチくんの方を伺った。

不自然すぎたかと思つたけれど、キーチくんはそう思わなかつたようで、ほつとした様子でいそいそとメニュー画面を確認していた。わたしが見ていないと思つてゐるせいか、とても分かりやすく嬉しそうに頬が緩んでいた。

ずっとプレイしているキーチくんに新米のわたしが思うのは筋違いかかもしれないが、なんだかこの人はとても危なつかしい。

口調は乱暴だけど、妙に素直だしすぐ顔に出るから分かりやすいし、会つて間もないわたしによくしてくれる。

こんな様子ではそのうち悪い人に騙されるんじゃないか、むしろもう騙されているんじゃないかと心配になってしまふ。

迷惑をかけないように別行動しようと思つたけれど、もしかしたらそうしない方がいいかも知れない。

気づいてないみたいだけど、キーチくんも十分有名人になつて、知らない人に絡まれる可能性が高いのだ。

行方不明の新人プレイヤーと一緒に消えたプレイヤーなんて話題性十分だ。

さすがに掲示板に晒されることはもう無いだろうが、コジマさんやシオリーナさんたちの口から事の詳細が漏れる可能性は少なくないと思う。

失礼かもしれないけれど、誘拐犯の人たちなんて嬉々として喋りそうなイメージがわたしの中には出来てしまつてゐる。

途中で飽きてログアウトする人がいるのなら尚の事、格好の暇つぶしの話になるだろう。

どう考へても上手くあしらえそこに無いキーチくんと、このまま別れてしまうのは不安すぎる。

「おこ、減るどひか5%増えてるわ。
どひこひことだ?」

密かにそんなことを考えていたら、訝しげな声をかけられ、慌てて自分のステータスを見る。

わたしのものも5%上昇していることを確かめてから、称号の効果についての説明を最初から最後まで読み上げた。

キーチくんはそれを聞いてふんふんと頷いた後、わたしに説明するところよりも考えをまとめる風にじぼそぼそ呟いた。

「単純に考えると一人増えると25%減少か、狩り場選ばないとキツイな。

支援で20%は上げられるから、多くても1人、つづーとやっぱこの辺から移動しない方がいいか。

おい、どのステータスが高い?」

開きっぱなしだった画面を閉じながら、器用が抜きん出でてる」とを伝えると、再びぶつぶつと呟き出す。

「どうやらキーチくんなりにわたしのヒューマンリアルプログラムを考えてくれてないようだ。

器用で使えそうな武器どころか、弓や銃が思い浮かぶ。

悪いなあと思いつつ、わたしは密かに決心していた。

思いきってその好意に甘えてしまおう。

その代わり、わたしが矢面に立つ。

わたしとキーチくんの一人が揃つていれば、興味本位で絡まれた時により注目されるのは、きっとわたしの方だ。

せめて絡まるる心配が無いと分かるまで、それくらいはさせてもいいわ。

本心では一緒に行動したかったのだ。

必要だったのは、自分を納得させる言い訳だけ。

それなりの建前が出来たおかげで、罪悪感はなりを潜めた。

あれこれ考えたてみても結局は、キーチくんとまだ離れたくない。自分なりに気持ちに区切りがついてすつきりしたところで、真っ

直ぐキーチくんを見つめる。

「よし、とりあえず武器屋行くぞ」

丁度考えがまとまつたらしくキーチくんと田代が会い、立ち上がり

て店の外へと歩いていくその後を追う。

外に出ると、既に夜明けが近いようで、「うすすら」と空が明るみ始めていた。

地平線が明るく染まる様子ひとつ見とれてしまい、キーチくんに遠くから呼ばれて我にかえる。

「朝焼け、綺麗だね」

駆け足で追いついてしゃべれば、キーチくんはちょっとした顔で足を止め、地平線へと目をやつた。

懐かしそうに田を細め、口元を綻ばせる。

「だよな、やつぱりこよな

うんうんと何度も頷くキーチくんは嬉しそうだった。

そのまま朝日が完全に昇ってしまうまで、黙つて地平線を眺める。現実ではなかなかお目にかかれない光景にしばらく心奪われていたが、どちらともなく視線を合わせ、なんとなく視線をで会話しそのまま武器屋へと歩き出した。

武器を貰ひ

武器屋に足を踏み入れると、壁に飾られた様々な武器が目に飛び込んできた。

しかし、相変わらず店員らしき人影は見えない。

キーチくんは構わず壁から武器を取り外していっている。

どこもこんな風に無人販売の形をとっているのだろうか。

ZPCがどんな反応をするのか少し楽しみにしていたわたしは、

がっかりしながらもキーチくんが勧めてくれた武器を構えてみた。

やはり予想通り、キーチくんが選んだのは『』と銃に偏っていた。あとは鋼糸なんて武器もあるようだが、初心者には難しいらしい。銃の方が扱いは簡単そうだったが、どちらかといえば『』の方がしつくりくる。

しかし途中でふと気になることがあり、構えた『』を下ろしながらキーチくんに尋ねた。

「キーチくんはさ、どんな武器を使うの？」

見たところ何の武器も装備していないキーチくんだが、もしも前衛でないならばわたしがそれを務める必要がある。
二人とも後衛だとバランスが悪い。

「基本は魔法だな、これが武器みたいなもん」

やつ言いながらとつを出したキーチくんの指には、シンプルな指輪が嵌まっていた。

華奢なデザインのそれは、どう見ても敵を殴るためのものでは無むやうだ。

「じゃあ、わたし前衛向きの武器がいいな」

『』を壁に戻しつつやつと言えば、キーチくんの眉がギュウッと寄せられる。

別に器用が必要な武器じゃなくても構わないと付け加えるが、キーチくんはつくり首を振った。

「別に、前衛居なくとも街の近くなら何とかなる。

余計な氣い使うんじゃねえよ」

むすつと不機嫌そうな顔をしながら、戻した弓を再び取つてわたしの方に差し出してくる。

しかし受け取る訳にはいかない。

「キーチくんが嫌じや無いなら、これからも一緒に遊べる武器がいいんだ。

駄目かな？」

こんな聞き方をしたら、優しいキーチくんはまず断れないだろ？
ずるいと思いながらも、訂正はしない。
案の定、キーチくんはつと葉に詰まつた後、渋々ながらも別の武器を選び始める。

「めんね、とその背中に呟いたが、その言葉が届くことは無かつた。

やがてキーチくんが簡単な説明と共に手渡してくれたのは、小さなヨーヨーと扱いが難しいと言っていた鋼糸だった。

鋼糸で攻撃する方法はイメージしにくかったので、ヨーヨーを指に嵌めて、試しに前方に向かって投げてみる。

元々得意という訳でもないのに、投げた後はきちんと手元に戻ってきた。

何度試しても、投げた後に手を引く動作をしなくとも、ちゃんと戻ってくる。

これならわたしでも使えそうだ。

「本当にそれにすんのか。

微妙だぞ、使うやつ少ないからフロマにやらせんなに出回っていない

し

ヨーヨーを握りしめたわたしに、キーチくんが眉をひそめて問いかけてくる。

しかし、変えるつもりはない。

使用者の人が少ないので技があんまり格好よくないからで、使え

なこと武器では無こと予め武器を渡す時に説明してくれたのはキーチ
くんだ。

格好の娘なんだ、Jの際どつでもここ。

しばらくP-A-P-Aのマイナス要素について語っていたキーチくん
だったが、わたしが気持ちを変える様子が無いのを見て、諦めたよ
うにため息をついた。

「Jさんね、でもやっぽつ、前衛やりたいんだ」

Jからを心配しての提案を断つたことと、先ほどキーチくんの性
格につけこむような言い方をしたことに、多少の後ろめたさ覚え頭
を下げる。

しかしこちゃんと自分の意思も添えれば、キーチくんは仕方ないと
薄く笑い、わたしからP-A-P-Aを受け取りつとした。
きょとんとしているJ、再度手を伸ばしていく。

「ほり、金ねえだろ。

買つてやるから寄越せ」

あつそつ語られた内容にわたしは焦つてしまふ。

確かにお金は無い、しかしキーちくんにかかるのは気が引ける。
それなりの店で一番安いものを選びたい。

ギコシとパー三一を握り込んで慌ててみると、不意に見る存在の
ことを思い出した。

「ね、これ、売ってお金にならないかな

魔物笛を一つ取り出し尋ねる。

お礼に渡そうと思つていたけれど、出すタイミングが無く、無駄
に場所を取つていてもの。

多分、タイミングがあつても、あの場ではけして渡すことがなか
つたもの。

キーチくんはわたしからそれを受け取り、しづしづと眺めた後何
故か呆れたような顔になる。

「お前、これどうしたんだよ。

店売りでもそこそこの値段で売れるし、フリマに出せばかなり儲
かるぞ、これ。

つたく、んなもん作ってなんならわしあと出でこよ

そのまま投げて寄越せりとしたので、手を後ろに回して受け取りを拒む。

戸惑ったキーチくんに、へへっと笑つてみせた。

「あのね、それ、本当に作ったの。
まだあるから、キーチくんに一つ受け取つてもらいたいんだけど」

売れるアイテムなら、『ハリセナならないだらう』、邪魔なら売つてくれてもいい。

残りの魔物笛は売つて資金にするとしても、キーチくんにだけは、せめてもの気持ちとして渡しておきたかった。

「馬鹿、折角なんだから売れよ。
売つて金にしろ、礼なんて言つてんじゃねえ！」

ぎりりと田を光らせて声を荒げたキーチくんだが、わたしが次々に魔物笛を取り出してみせ、一つだけだから受け取ってくれと懇願すると、まだぶつぶつ文句を言いながらもしまつてくれた。

ほつとしながら、アイテム売買の方法を教えてもらひ。

フリマで売り手側に立つにはスキルが必要で、キーチくんはそのスキルを持っていないらしいので、欲はかかずに魔物笛は全て店で売ってしまうことにした。

売り買いしたいものを手にとり、ショップと駄けば画面が出ると聞き、ヨーヨーと魔物笛を持ったまま早速試してみた。

小さめの画面が田の前に現れ、品物と値段がそれぞれ表示される。手にしたものだけでなく、店にあるものと自分の持ち物も全て一覧になっている。

いひこう仕組みかとふんふん頷きながら操作する。

ヨーヨーは800G、手持ちの395Gでは半分にも満たない。しかし魔物笛は50Gで買い取つてもらえるようだ。
ギリギリ足りたことに安堵し、ちゃんと払えるのかともさもさしながらこちらを見守つているキーチくんに一つ頷いてから、魔物笛を全て売り払いヨーヨーを手に入れる資金にする。
売買完了の文字に触ると同時に消えた魔物笛に驚きつつ、手の中に残ったヨーヨーをしみじみと眺める。

プレイ十三日目にして、ようやく武器を手に入れることができた。

普通ならば初日でとっくに終えていたはずのことだ。

随分と時間がかかってしまったが、その分感慨もひとしおだ。
嬉しさについ、にやけてしまっていたらしい。

キーチくんが微妙な顔でこちらを見てくることに気づき、慌てて表情を引き締め、三一三一をひやんと装備する。

意識して装備すると、三一三一は指輪へと姿を変え、右手の中指に収まった。

試しに投げるフリをしてみると、三一三一が手の中からじゅんと現れて飛び出し、手の中に戻ると消えてしまつ。

面白がって何度も繰り返していると、急に武器屋の扉が開く。
驚いて振り返るとそこには体格の良い髭のお兄さんが立っていて、
ここに笑いながらひやんを見ていた。

「お兄さんも武器を貰いに来たのかと思い、軽く会釈して場所を譲りうとしたが、お兄さんは扉の前から動こうとはしてくれない。にこにこ笑つたまま、こちらを見ているだけで、他の行動を取る様子もない。

あの、と思いつて声をかけると、お兄さんでなくキーチくんから返事が来た。

「そいつ、武器屋のZPC。

多分武器屋に関することしか反応しない」

どいてる、と腕を引かれ、大人しく後ろに下がる。
代わりに前に出たキーチくんとお兄さんのやり取りを、興味深く見守った。

「今日はここの天氣だな」

「…………」

「『ピーピー』、一つ貰つたぜ」

「おお、お客様、ありがとうございます。」

「他にも何か貰わないかい、お勧めがあるんだ」

そこで一皿言葉を切り、ちらりとこちらを向いて、ビルとなく得意気な顔をしてみせたキーチくんに笑って頷き、続いて為される入り口から退いて貰うための交渉に耳を傾ける。

おそらくわたしにNPCとの会話のコツを理解させるためだろう。こきなり本題には入らず遠回しに話を進め、お兄さんから返事が貰えないこともわざとえいつつ話してくれる。

そこを通してください、といふことを伝えるためだけに、何往復ものやり取りが交わされた。

相手に伝わるよう言い方を工夫するのはパズルのようで面白そうだが、想像していたNPCと随分違ったことに少しだけがっかりもした。

しばりへじてようやくお兄さんが動き出し店の中へと移動してから、ひらひらと手を振つて店を出るわたしたちを見送つてくれた。

その動きは非常に滑らかで、さつきのやり取りが嘘のように人間

くさかつた。

それだけに、あの機械的な受け答えがどうにも物足りなく、残念に思えてしまった。

「お店の店員をみて、みんなあんな感じ?..」

「最初の街のNPCにはもっとリアルで個性もあるぜ、NPC回士で勝手に交流始めちまうから。」

あいつらはプレイヤーの話を聞いて学習して、成長していくんだよ。この街は来るやつ少ねえからな、まだまだ発展途上って訳。

あの武器屋はまあまあ成長してる方だぜ、初期のやつは笑いもし

ねえ」

説明を聞いてよく考えられているなと感心すると同時に、小さな野望がむくりと顔をもたげてきた。

この街は少し寂しい。

鳥の声や木のざわめきは聞こえて来るけれど、人の声が足りない。わたしたちだけで劇的にこの街のNPOの成長を促すのは難しそうだけれど、せめて挨拶くらいはするようになつてほしい。そのためにも、NPOらしき姿を見かけたらとりあえず声をかけてみることにしよう。

キーチくんの話しぶりからして、しばりくじを拠点とするのだろうから、しつこく話しかければ多少の成長は促せる気がした。

他にも急に店員さんが現れた理由を聞いてみた。

どうやら、どこの店も二十四時間開いてはいるのだが、店員さんが居る時間帯はそれぞれ決まっているのだと。

武器屋なら朝の九時から夜の七時まで、昨日訪れたような食堂なら朝の八時から夜の十時まで、といった具合に。

店員さんを通さないと買えない物もあるようだが、基本的にどの時間帯でも品揃えに恵まれ代わりは無いようだ。

しかし店に居ない時はちゃんと家に帰っているようで、個性が出てくれば家族の話をしてくれるようになつたり、入れない仕様になつているNPO用の家にお邪魔することが出来るようになると聞き、わくわくしてしまう。

時にはNPO同士で結婚したり、店の人間が親から息子へと代替わりすることもあると聞き、ますます野望が膨らんでいった。

そんな事を話しながら歩いていると、いつの間にか街の入口に着

いていた。

いよいよ初めての戦闘かと気持ちが高揚してきたものの、キーチくんはそこで足を止めてしまい、腕を組んで何か考えこんでいる。問題でもあったのかとは思つたが、特に聞くことはせずその横顔を眺めながら、キーチくんが口を開くのを待つた。

やがてキーチくんはぽりぽりと頭を搔きながら、気まずそうな顔でわたしをちらりと見た。

「あのよ」

とても言こいくらい、口を開いては閉じ、落ち着きなく視線を迷わせるのを見て、今度はこいつから水を向けてみる。

「どうしたの、何か問題でもあった？」

街の外へ視線をやり、それとなく外へ行かないか促すと、わたしと田舎を合わせないまま、小さな声でぼそぼそとキーチくんが喋り出した。

「考えたらお前、もう宿屋からログアウト出来んだよな。
勝手にいろいろしちまつたけど、別にやめてもいいんだぞ。
あんな目にあつたら続けたくねえって思つても仕方ねえし」

徐々に肩を落としながら、なんとも寂しげな口調でそんなことを
言つので、微笑ましさについ頬が緩んでしまつ。

わたしが仕方なくキーチくんに着いていつてこよつて見えたの
だらうか。

本当はもうゲームを止めたがつてて見えてしまつたのだ
らうか。

もしそうなら、ひやんと誤解は解いておかねばならない。

「あのねキーチくん、本当にびりしても嫌なことは、わたしちゃん
と断るよ」

そう言えばキーチくんは、疑わしげにわたしを見据えた。
そんなに頼りなく見えてたのだろうかと苦笑いしかけたが、シオ

りさんたちにもやう思われていた節はある。

確かに押しには弱いし流されやすい。

だけど何もかも受け入れてしまえるほど、おおらかな人間でもないのだ。

「ほら、ギルドもパーティーも、断つたでしょ？」

あれ、称号のせいにしちゃったけど、断つた一番の理由は嫌だつたからだよ。

もし称号のことが無くても、何か理由見つけて断つてたと思つ

しかしここまで言つても、キーチくんは変わらず訝しげな様子でこちらを見ている。

暗にメッセージを込めたつもりだったんだけど、全く伝わらなかつたらしい。

さすがに言葉にするのは照れるのだが、言わなければキーチくんは疑つたままだろう。

背に腹は変えられないと、覚悟を決めて精一杯の気持ちを伝える。

「だから、キーチくんのパーティー申請受けたのは、嫌じゃなかつたからだよ。

むしろすこいく嬉しかった、一緒に遊べるの。

なのに今更、ログアウトなんてしないよ。
折角これから楽しくなりそうなの」「元

ここまで言えば流石に伝わったようだつた。
キーチくんは勢いよくわたしから視線を外し、耳まで真っ赤にしてぱつかじやねえのとぶつぶつ悪態をついている。
しかし重ねて真意を問つてくるようなことはせざ、せかせかと足早に歩き始めた。

「おひ、 もうあと行くぞつ」

乱暴な口調で怒鳴られたけど、まだ少し赤い顔のせいで照れ隠しにしか見えない。

笑つてしまつと機嫌を損ねてしまいそうだと、にぼれかけた笑い声を何とか抑え、近くにいた門番らしき人影に声をかける。

「行つてきますね」

返事はおろか視線も向けてもらえなかつたが、最初はこんなものだろう。

いつか行つてらつしゃ いつて言わせてやる、と密かに鬪志を燃やしながら、小さくなつたキーちゃんの背中を追いかけた。

街の周りは見渡す限り草原になつてゐる。

遠くに山陰は見えるものの、ビルも見通しが良く、あちこちに敵らしき姿が見える。

ビルから襲つてくるかもしないと緊張しながら辺りを警戒していると、キーチくんにふんと鼻で笑われてしまつた。

「街の周りのモンスターは基本的にアクティブじゃねえし、初心者でも戦えるくらい弱えから。

」ひつちから手を出さない限り襲つてこねえよ

だから力を抜けと言われ、ほつと息を吐いた。

両手両足をぶらぶらさせて緊張をほぐし、何度も深呼吸をする。すぐ近くには兎型の敵が居たが、確かに敵対する素振りは無く、こちらには注意すら向けてこない。

周りのことなどお構い無しに夢中で草を食べる姿は、とても遅らしかつた。

「まづ俺が一匹狩るからそこので見とけ」

そう言つとキーチくんはどこからか杖を取り出し、一番近くにいた敵に殴りかかった。

「ゴン」と鈍い音がして、杖の先端が当たると同時に、ギギギと可愛らしい外見からは想像出来ない耳障りな音を発し、赤く目を光らせた敵がキーチくんに飛び掛かってくる。

しかしフロントを入れることもなく、真っ直ぐ向かってきたところに再び杖を振り下ろされ、白い煙と共にあつさりその姿を消した。

後に残つたのは数枚の硬貨だけで、戦いの跡はどこにも残つていない。

MMOだとしばらく血や体液の跡が残るものもあったので、さほどリニアティーの無い戦いの様子に気が抜けてしまつ。

「ま、こんな感じだな。

あいつ動きが単純だから、お前でもいけるだろ」

ちょっと誇らしげにこちらを見たキーチくんは、杖をしまいながら落ちた硬貨を拾いつつ、新しいターゲットへと視線を移した。

近くで仲間が倒されたといふのに、逃げもせずのんびり草を食べている。

確かにこれなら大丈夫そうだと、ゆっくり敵に近づくと途中でキーチくんに止められた。

「あ、ちょっと待て。
戦う前には解析かけとけ、敵と戦う時の基本な。
格下なら必要ねえけど、かけとくに越したこたない」

言われた通り解析をしようとしたが、今までずっと対象に触れてスキルを発動していたので、やり方が分からず戸惑ってしまう。
とりあえず触ってみるかと敵に手を伸ばすと、慌てたキーチくんに後ろから腕を掴まれてしまった。

「なにやつてんだ、馬鹿かつ！
触つたら襲つてくるつつのー」

お前今まで解析どうやって使ってたんだよ

田を吊り上げて怒鳴るキーチくんに身体を小さくしながらも、落ちていた小石を拾い実際に解析をかけて実際に使ってみせた。

こんな感じで、ともごもじ口じもりながら伝えれば、ため息をついてキーチくんも小石に解析をかける。

「解析指定」

指先を目標に向けてそう呟くだけ。

するとわたしにも見える文字が小石の上に浮かび上がった。

「つたく、なんで知らねえんだって、そつか、チュートリアル受け
てねえんだもんな」

呆れたように呟いたキーチくんだったが、途中ではっとして表情
を改め、一旦敵から距離を取り、草の上にどかりと腰を下ろし胡座
をかいた。

わたしもそれに倣つて地面に座り、なんとなく正座をする。

「あーっと、お前の知識はヘルプ程度つて認識でいいか?」

まずはそう聞かれ、その他に読んだ本の名前を挙げていく。
それに心当たりはなさそうだったが、キーチくんは首を振つてなんとも言い難い、可哀想なものを見るような目でわたしを見た。

「本つて基本的に、一番最初、つまりこのゲームが始まつた時の情報しか載つてねえんだわ。

スキル発現用のやつと生産スキル関係以外は殆ど役に立たねえな

「どことなく言い辛そうにわたしの読書履歴をぱつさり斬つたキーチくんだったが、知つておいて悪いことは無いだろ?と思つてるのでさほど衝撃は無い。」

むしろ役に立たない知識をそれっぽく見せている手の込みような逆に感心してしまう。

それだけに先ほど目にした戦闘の微妙さに違和感がある。

「どうしてかその理由を聞いてみると、やも当然といった口ぶりでキーチくんは答えをくれた。

「VRでリアリティー追求した戦闘なんて20禁プラス精神鑑定に定期診断付きじゃなきゃ無理だろ、常識的に考えて。お前はまだ戦っていないからだろうが、実際相対するところでも迫力ある方だぞ」

なるほど確かに、言われてみれば当たり前のことだつた。
わたしだつて何も、血飛沫が見たいだなんてそんな物騒なことを
考えていた訳じゃなく、ちょっと疑問に思つただけだ。
だからどこか引き気味にこちらを見るキーチくんの視線が痛かつ
た。

それから基本的な戦闘についてのレクチャーが始まった。
まずは解析をかけて敵の状態を確認し、敵の残りの体力を示すバーを出現させること。
かけ方はさつきキーチくんが実践してみせた通り、対象を指差して解析指定と呟くだけ。
例え途中で対象が動いても、ちゃんと視界に捉えていればスキルは発動するらしい。

パーティを組んでいれば誰かが解析すれば全員が敵の体力を見ることが出来るようになるらしく、またメンバーの体力と魔力はパーティの設定を弄れば常に可視化することが出来るというので、早速表示させてみる。

ぽんとキーチくんの上に現れた、赤と青のバーの横にはそれぞれ数字が一緒に表示されていて、体力が812／812、魔力が5623／5623となっていた。

ついでに基本の設定も弄り、自分の体力と魔力も常に視界に写るようにしておく。

イメージすれば頭の中に情報として流れてくるらしいが、慣れるまではきちんと目で確認することにした。

今のわたしの体力は31／31、魔力は17／17となっている。キーチくんのステータスと比べて余りに差がありすぎて、落ち込むを通り越してそのすごさに圧倒されていると、キーチくんは照れ臭げにそっぽを向いた。

「言つとくけど、俺はあんま大したことねえからな。

上位になると5桁なんてザラだし、装備によつちや6桁いくやつもいる」

それを聞いて、驚くよりもあきれてしまう。

ゲームバランスはどうなってるんだろうと思わないでもないが、ここで考えても仕方ない。

逆に考えればどんどんステータスを伸ばせるといつことがあり、そういう意味では悪くないとも思えた。

後は回復アイテムの使い方や、仲間の回復のさせ方、そして敵に狙いを定める方法を聞いた。

応用はまだまだあるようだが、それだけ分かっていれば目の前の敵に対することは出来るだらう。

知識だけ増えていつでもどうしようもないでの、その他のことはおこおい教えてもらいつことにして、まずは戦つてみることにした。

「よし、頑張るぞーっ！」

立ち上がりパンパンと草を払い、近くの敵を見据えながら気合いを込めて叫ぶと、頑張れよと小さな声でキーチくんが呴くのが耳に届いた。

振り返ってその顔を見ると、素知らぬ顔でつんと澄ましていたが、耳が少し赤くなっている。

再び敵の方を向き、抑えきれない笑みを口に浮かべながら、静かに解析の言葉を呴いた。

「やつと動き出したあー。
んもう、キー坊つてば要領悪いんだから」

だだつ広い草原の一角に、何本もの巨木がそびえる場所がある。
その中の一つ、特に背の高い木のてっぺんに、何かを観察する二
つの人影があった。

「こあら、七海つてば、あんまり暴れないの。
これそんなに耐久高くないんだからね」

頂上に作られた足場の上で七海がぴょんぴょん飛びはねると、妙
に身体の線の細い男が口を尖らせて文句をつける。
さわさわと風で木が揺れても足場は全く動かず、空に固定されて
いるように見える。

「もーママひるわあい、今いいとこなんだから」

七海はベートと舌を出して田の前にある画面に視線を戻した。そこにはシトロネラとキーチ一人の姿があり、見られているとは思つてもない様子で、キーチが敵を一匹狩つている場面が写つている。

「つてゆーかなくね?

シロちゃんだけ、防具初期のまんまじやん。

キーチつての氣いきかねーの、そこはプレゼントすうとひでシロ

最後の一人、真っ黒な肌に派手なメイクをした白い髪の女が、画面の向こうのキーチにダメ出しを始める。

短いスカートを履いているにも関わらず、胡座をかけて座つてるので、パンツが完全に見えてしまっていた。

しかし七海とママと呼ばれた男は気にする風もなく、好き勝手にあれこれ口を挟んでいく。

「やうね、アタシもあれはちょつとねえ。

可愛い顔してるけどモテないわね、あの子」

「長ここと母にいたのにね、七海ならもういつへ狩つて出でるよ

れやつれやと楽しげに盛り上がる三人組には、キーチの評判はあまり良くないようだ。

動くたびに逐一厳しい言葉が飛び交う。

「かくれんぼは二口だけなのに」と。

あの調子じや、口クに準備も出来ないかもねえ」

ぐすくすと楽しげに笑った七海に、ビルでも良からぬ二口こ髪の女が声をかけた。

「なんであんな自滅しそうな組み合せにしたワケ?」

「あ、それはアタシも気になるよねえ。
可愛いアタシの七海ちゃんのお願いだから監視してたけど、そんな面白くでもないしね」

ママもそれに乗つて疑問を口にする。

七海はうーんと首を傾げて、頬に人差し指をあて、口を尖らせふくじと頬を膨らませる。

「オヒトワシ様への嫌がらせとあ、狐ちゃんたちの鼻つ柱折るのに一番効果的だつたからなんだけど。

ホントはシトロンだけ飛ばすつもりだつたんだよねえ。

キー坊はあ、んー、その場のノリ?」

さやはつと笑って両手を口にあて、上目遣いで一人を見た七海の頭を、白い髪の女がべしりと叩いた。

「ネカマガブリッヂナ、一ゼー」

心底げんなりした口調でそう呟いた彼女に、七海はわざとじくへ泣き真似をしながらすり寄つていき、押し返されてもめざすに抱き着こうと飛びかかって、また拒絶される。

そんな二人を適当に宥めながら、ママが再び話題を元に戻した。

「七海ちやかもハサウエイさんも、あんまり暴れないでってば。
それで七海ちやかさん、これからのお予定は？」

やけに姫く白い指をした手のひらを一人の間に差し込みつつ、ママが七海にやう囁えれば、すぐに答えが返ってきた。

「それはもう完璧っ！

んとね、三日間は放置して、それから偶然を装おつてハルたんとシトロンを会わせるのねつ。

狐ちゃんたちは七海が遊んであげてえ、オヒトヨシ様のところは別口で仕掛けのつもりっ。

「こないだの仕掛けもまだ尾を引いてるみたいだし、かなり楽しいお祭りになりそうだよ。」

えへんと胸を張りながら得意気に語る様子は可愛らしいものだが、その内容はあまり可愛いとは言に難いものだった。しかし聞いていた一人は当たり前のようすに頷き、好き勝手に自らもその中に組み込んでいく。

「じゃあアタシはハルの手引きに加わっちゃおうかしり。ついでにあの子たちの仲を邪魔しちゃうのも面白うねえなあ。」

「あたしはメルチュで遊ぶわ。
あの女からかうと面白れーし」

きやらきやら笑いながら、シトロネラたちの知らない所で今後の予定が組まれていく。
どんどん話は盛り上がってゆき、それぞれに必要な役者を揃える為にあちこちへ連絡を取り始めた。

「んふふ、久しぶりにギルドみんなで遊べそうだね」

嬉しげに笑つた後、唇の端を上げて薄く微笑んだ七海に、ママとレミもにこっと唇を歪めて応える。

顔立ちには全く共通するところは無い三人なのに、その表情は酷く似通つていて、彼女たちがどういう人間なのかを端的に示していた。

「わあて、今のひかむすびけひの今でね、シトロン」

まるで恋人に語りかけるような甘い声で画面の向こうのシトロネラに囁いた後、七海は一人を残して姿を消した。

「あらせつかちぬ、七海ちゃんたり」

一瞬にしてその場を離れた七海は、まくすつと優しげに笑い、
「ははは、なにがおもしろいんだ？」と鼻を鳴らして画面に視線を戻した。

「あーあ、ちょっと遊ぶくらいこよくな~？」

マジカルアーティストとして画面に向かってシートロネラの姿を吊るしてしまったが、
ママが静かに首を振るとそれ以上何も言わず、片手で別の作業をし
ながら大人しく監視に戻った。

「あらあら、仲良わざわざじゃないな~」

葉を拾い、ママはひびと舌を出して上唇を舐めた。

「 うひつひつて、引き裂きたくなるわよねえ 」

誰に聞かせるでもなく呴かれた言葉は、不穏な余韻を残し、そつと空に溶けて消えた。

マミー」とマシマミーはお姉キャラプレイで知られていて、気さくな性格でそこそこ人気もある方だったが、その本性は七海に近いものがある。

仲の良いプレイヤーたちを見ればこっそり裏からちょっかいを出し、その仲を引っ搔きまわしては楽しむという質の悪い癖の持ち主だった。

レミの方はそこまで歪んではないものの、真面目な人間や大勢に好かれる人間をおちょくつて怒らせることを楽しむといふ、これもまた性格の良いとは言えない人間だ。

一人ともギルド『一発芸』に所属していて、ギルドの中でも七海に次ぐ問題児である。

そんな一人が面白そうな獲物を見逃す訳も無く、完全にシトロネラとキーチの二人組はマークされていた。

シトロネラがキーチから離れるべきでは無いと考えたのは、ある意味では正解だったが、しかしそれだけでどうにかなる相手でも無かつた。

「攻略の鍵は、じつやつと別に気を逸らすかつて山アトカ」

すっかり悪い顔になってしまったママを横田で眺め、ぽつりとレミが呟く。

それは誰の耳にも届くこと無く。

画面の向い側で笑い合つシトロネラたちの姿だけが、明るく輝いていた。

初めての狩り

兔型の敵の名前はラビと書かれていた。判りやすいのはいいけれど、兎だからラビとこののは些か安直すぎる気がする。

ゲームのタイトルもさうだけれど、ネーミングセンスに欠けるなあ、なんてことを考へながら、三一三一の屈く距離まで敵との間を詰める。

体力は30／30と表示されていた。
今のわたしといい勝負である。

攻撃を仕掛ける前にもう一度、わたくしきーちゃんが見せてくれた戦いを思い出す。

ラビの攻撃パターンは真っ直ぐ飛び掛かってくるだけ。

そこに上手くヨーヨーを叩き込めば、無傷で勝つことが出来る。頭の中で自分の勝利をはつきりイメージし、きちんと敵の位置を見定め、いざ右手からヨーヨーを放った。

ぼすんと鈍い音がして円盤部分が当たり、赤い目をしたラビがギギギと耳障りな音を立ててこちらを向く。

向かい合ってみると、思っていた以上に不気味で、つい怯んで逃げ腰になってしまった。

「うわっ、ちよ、待つて！」

そこにどすんとラビに飛び掛かつてこられ、体勢を崩したところに更に連續して攻撃を受けてしまう。
すっかり慌てたわたしは、攻撃することも忘れ顔の前で両手を交差して身を守ることだけに専念した。
次いで攻撃されることを覚悟したが、その前に後ろからラビに火の玉が飛んで来る。

空中に居たラビの全身が火に包まれたかと思うと、次の瞬間にはその姿は消えてしまい、代わりにぽとりと硬貨が落ちた。

「何やつてんだよ」

火の玉が飛んできた方向を振り返ると、大きくため息をつき呆れた顔をしたキーちゃんの姿が目に入る。
どうやらわたしを助けてくれた火の玉はキーちゃんが放つたものらしい。

その姿を見て一気に気が抜け、ぺたんとその場に座り込んでしま

つた。

「おい、大丈夫か」

心配そうにキーチくんが駆け寄ってきて、放心しているわたしの
目の前で何度も手を振る。

「ふ、ふふふふふ」

平氣だと言ひははずだつたのに、口を開けば何故か笑い声が漏れた。
それを聞いたキーチくんはぎしりと固まってしまった。
わたしはそんなキーチくんの手をがしりと握り、そのままぶんぶ
ん上下に振り回した。

「キーチくん、なにあれすごい迫力！」

嘗めてた、わたし完全に嘗めてたよ。

血なんか出なくてすごい恐い、すげい怖いよキーチくんつ！
兎なのに強そつだよつー！」

恐怖ですっかり興奮していたらしい。

田を白黒させるキーチくんをよそに、早口であれこれ捲し立てる。自分の放った言葉にまた興奮して、更にいろいろと喰いてしまいましたが、べしりと勢い良く腕を払われ、一気に頭が冷えた。

「うーじめんねキーチくん」

慌てて何度も謝るが、キーチくんはむすつと不機嫌そうに顔をしかめたまま黙っている。

怒らせてしまつたかと思うと胸がひゅうっと冷たくなつたが、キーチくんがちらちらと放つた腕を気にしているのに気づいて、ほつとした。

怒つている訳では無さうだ。

現金な自分に少々嫌気はしたが、顔には出さず立ち上がる。このままでは役立たずどころか足手まといになつてしまつ。そくならないために、もう一度ラビに挑もうと気合いを入れた。するとキーチくんに後ろから服を引っ張られる。

「お嬢ちゃんはいい子だね！」

前衛は無理だろ、あれじや
「

そのままぐいぐいと街まで引っ張つて行かれそうになり、慌てて足を踏ん張つて抵抗する。

「大丈夫、何かふつきれたり、いける気がしてきたよ！」

ぐつと拳を握つて力説したが、キーチくんは疑わしげにこちらを見るだけだった。

1

しかし掴んでいた服は離してくれ、好きにしようと諦めたように咳

「これは一つ、キーチくんが納得してくれるくらい、ちゃんとしたところを見せねばなるまい。

さつきのような情けない様子を見せる訳にはいかない。
気合いを入れ直し、再度ラビに向かい合ひ。

解析をかけ、改めて間合いを取り、一気に攻撃を仕掛けた。

今度は飛び掛かつて来るのを待たずして連続でヨー・ヨーを打ち込む。途中で攻撃を外し、お腹に体当たりされたが不思議とあまり怖くない。

躊躇つて前衛は無理だと判断される方がよっぽど怖かった。

丁度十回攻撃が当たったところで、よつやくラビの姿が消え、硬貨がパラパラとその場に散らばる。

どうだとばかりにキーチくんの方を見たが、まだその表情は晴れない。

それならばと、近くに居た別のラビに再び挑みかかった。

今度はたつた二回攻撃を当てたところでラビの姿が消えてしまう。いきなり攻撃の威力が上がったことには戸惑つたが、反撃を受けずに倒せたことに気を良くして更に数匹のラビを狩る。

そして硬貨以外のアイテムがドロップしたところで、キーチくんから制止の声をかけられた。

「分かった、分かったからほら、それそろ拾え」

やれやれと首を振り、どこか遠い目をしながらわたしの足元を指差す。

硬貨を拾うこともせず、ただひたすら狩っていたため、あちらこちらに点在していた。

それを一枚一枚拾い手のひら一杯になつたところでアイテム収納を実行する。

更にラビが落としたアイテムを拾つて解析する。

「兎の肉、かあ。

ねね、キーチくん、これ料理出来るかな?」

兎の肉を握りしめ、うきうきとして振り返れば、微妙な目つきでわたしを観察しているキーチくんとばつちり皿が合つた。

「料理、出来るけど。

いきなり吹っ切れすぎだろ、お前

どうやら先ほどの狩りのことを言つてゐるらしい。

何かおかしいだらうかと首を傾げると、納得のいかない様子でしばらくぶつぶつと呟いていたが、やがて自己完結したようで、数度頭を振つてから顎でくいとラビを示す。

「一個じゅ少ねえからな。

もつちゅい狩るだ

そう言つたかと思うといきなり火の玉を手のひらに出現させ、近くのラビに向かつて放つ。

一瞬でその姿は消えて無くなり、後には硬貨だけが残る。

更に続けて火の玉を放つたキーチくんに、遅れてはなるものかとわたしもラビ目掛けで駆け出した。

結局太陽が傾くまで黙々と狩り続けた。

途中空腹によるステータス減少のペナルティーはあつたものの、さほど狩りに支障は出なかつたのでそのままにしておいた。

成果は一人合わせて十一個の肉。

狩ったラビの総数だけで言えば、その二十倍以上、一百匹を軽く超えたことだろう。

それだけ肉はなかなかドロップしてくれず、さすが狩り場として人気の無い場所だと妙に納得してしまった。

肉を手分けして持ち、お金を分配しようとこじらで少し揉めた。

明らかにキーチくんの方が多く狩っていたのに、きつちり一等分しようと主張するキーチくんにわたしが反対したせ이다。

最終的にはキーチくんの言い分を呑み、これからもお金は基本的に山分け、アイテムは物に応じて分配と決まる。

しばらくは負担ばかりかけると申し訳なく思ったものの、こうやつてパーティーならではの決まり事が増えていくのは楽しいし嬉しいことだと密かに微笑んだ。

もつとちゃんとした戦力になることを自分自身に誓いつつ、夕陽を背にし、キーチくんと歩調を合わせ、赤く染まる街へと歩いていった。

恥ずかしがり屋の場合

街に入りました向かつたのは、雑貨屋だった。中には武器屋と同じようにひたすらにここにけ笑っている店員さんが居て、じつとこちらを見ていた。

ここで料理スキルを発現するのに必要な道具が売っているらしい。当面はフライパンさえあれば何とかなるというキーチ君のアドバイスを元に、店員さんに一番小さなフライパンを売つてもらえるよう頼む。

途中で何度も会話は途切れたものの、無事にお金を支払つといふまでじき着ける。

画面越しの取引とは違い、店員さんを介してのやり取りは直接お金を出して支払わなければいけない。

提示された50Gを取り出すと、自動的に10G分が一枚の穴の空いた硬貨に変換されて現れた。

つい感心して、しげしげとその真新しい硬貨を眺めていたが、にこにこ笑う店員さんになんとなく無言の圧を感じ、慌てて手にしたお金を差し出す。

雑貨屋を出たその足で宿屋へ向かう。

途中すれ違うNPCらしき人たちに軽い挨拶をしていたら、キーチくんに怪訝そうに見られてしまつたが、理由を説明するとキーチ

くんも消極的ながら協力してくれた。

声をかけるのでなく、軽く頭を下げるだけだつたけれど、それでも何もしないよりは刺激になるだろう。

誰からも返事が無いのは少し寂しいが、これがZPCの成長に関わるのかと思えばやる気も出る。

宿屋につくまでに、かなりのZPCに声をかけることが出来、わたくしは随分と満足していた。

宿屋の受付には、丸々とした人の良さそうなおばさんが座っていた。

自分で部屋を取るべくおばさんに話しかけようとすると、キーチ

くんに止められてしまつ。

そして30、2、1と続けざまに三つの数字を告げると、おばさんのが一つの鍵を投げて寄越し、無言のまま階段を指差す。

それに従い階段を上り始めたキーチくんの背中を慌てて追うと、一階分上ったところで階段は途切れ、目の前に扉が現れる。

躊躇うこともなくそれに手をかけ、中に消えたキーチくんに続くと、そこにはやたらと大きな円形の空間が広がっていた。

「うわあ、す、ここ、何こ、扉がこいつぱー。」

広いホールの真ん中には一つの机がぽつんと置かれていて、わたしたちが入つて来た扉以外に全部で四つの扉が、こちらとは反対側の半円部分の壁に等間隔で並んでいた。

キヨロキヨロと落ち着かないわたしに、机に座るように勧めたキチくんは自らも席につき、手早く説明をしてくれる。

「この部屋がしばらくの拠点な。

それぞれの寝室と作業部屋、倉庫がついてる。

寝室には自分以外誰も入れねえから安心しろ。

作業部屋は生産なら大体何でも出来る、勿論料理もな。

倉庫は重さ関係無く百個までアイテム置けるから好きに使え」

想像していた宿屋との違いに驚きつつ、キーチくんの説明を聞く。やたらと設備が充実しているので、さぞ高いのでは無いかと心配になり、それとなく尋ねると少し視線を彷徨かせた後、小さな声で呟いた。

「一月で、10000G」

とても払えそうに無いその金額に、一瞬気が遠くなりかけた。

しかしすぐに気を取り直し、詳しいことを聞き出す。

二人で10000Gだと聞き、少しほととするも、それでも今のわたしの手持ちではとてもじゃないが足りそうに無い。

しかし普通に宿屋に泊ると一泊につき100Gで、更に調理場や作業場を借りるのも倉庫を利用するのにもそれぞれお金がかかるらしいので、長い目で見ればお得らしいと聞き、納得はした。

キーチくんが良かれと思つてしてくれたことならば、それが最善なのだとも思える。

俺が全部払うと言い張るキーチくんを何とか言い含め、わたしも半分出すことを納得させたから、ひとまずお金のことは忘れて料理に挑戦してみることとなつた。

作業場に移動し、フライパンに兎の肉を乗せて、中央で燃え続ける焚火らしきものにあてる。

すぐにぴかりとフライパンの中身が光り、ふすふすと焦げた匂いが手元から漂ってきた。

隣で同じように料理していたキーチくんは上手くいったようで、フライパンの中には美味しそうに焼き上がった肉がある。

無言のままそつと新しい兎の肉を差し出されたので、焦げた物体をしまってからもう一度挑戦する。

次は生焼けに近かつたものの、何とか食べられそうなものが出来

たので、その場でむしゃりとかじりついた。

生臭い血の臭いはしたもの、味はそんなに悪くない。

隣で美味しいそうな肉をそもそも食べるキーチくんをちらりと見て、次こそはと闘志を燃やし、ステータスを確認した。

満腹度は52%となつており、ペナルティーが発生する50%をギリギリ超えたところだった。

もう一枚食べておこうと再び肉を焼き、さつきよりは上手く焼けた肉をしつかり味わいながら、増えたスキルをチェックしていく。

ヨーヨースキルは玩具一となつており、既に19までレベルが上がっていた。

使える技も出来たようで、歌一覧とは別のページが新たに発生している。

そのページを開くと、一連撃と二連撃という技の名前前が表示されていて、魔力と引き換えに強力な攻撃が出来るとの説明があつた。そこでふと疑問に思ったことがあり、そもそもと一枚目の肉を頬張っているキーチくんに質問をする。

「ねえキーチくん、技って、どうやって使つの?
もしかして叫ぶ、とか?」

そつだつたら慣れるまでかなり恥ずかしいと思いつつキーチくんを窺うと、苦虫を噛み潰したような顔でゆっくりと頷かれてしまった。

『一三一』を構えて、三連撃と敵に向かつて叫ぶ自分の姿を想像してみる。

いくら現実の自分とは姿を変えているとはいっても、やっぱり恥ずかしいものがある。

これぞブレイの醍醐味だと割り切って楽しむべきなのだろうかと悩み始めたといひで、あることを思い出した。

「でもキーチくん魔法使った時、何も言つてなかつたよね？」

何か方法があるなら教えて欲しいと必死で頼み込んだが、今すぐには無理だと首を振られてしまう。

技の元になるスキルのレベルが上がると、無言というスキルを発現する資格が得られるらしく、キーチくんはそれを利用していること。

今のわたしのレベルではまだその域に達していないようで、それまでは羞恥に耐えて技を使うか、技を封印して通常攻撃で頑張るしかないらしい。

「お前はまだいいだろ、普通の攻撃あんだから」

どうしようかと悩むわたしに、キーチくんは拗ねたように呟いた。
確かに魔法は詠唱しなければ攻撃方法が無くなってしまうだろう。
それに比べたら、選択の余地がある時点で恵まれているとも思える。

何を思い出したのか、遠い目をして心なしか元気が無くなってしまったキーチくんに、急いで慰めの言葉をかけた。

「でも魔法ならかつていいんじゃないかな？」

「ほら、自分の言葉で火の玉が出来るなんてすげー！」

「じゃあお前は、敵を断罪せし清らかな炎よ、とか毎回敵に向かつて言いてえの？」

「……さ、厳しい、かな」

しかしあつさりと言い負かされ、一人で遠い目をしてしまった。
頑張った過去のキーチくんに胸の中でこっそり手を合わせる。
そんな思いをしてまでどうして魔法を使いたかったのか聞きたい
思いもあつたけれど、これ以上余計なことを思い出させるのも悪い。

然り気無い風を装おつて、ステータス画面に視線を移し、何か別の話題は無いかと必死で探す。

「そ、そうだキーチくん、スキルのバランスとか、アドバイスして欲しいなつ！」

何とか糸口を見つけ、多少声を裏返しながら声をかけると、キーチくんはぱちぱちと何度も瞬きをしてこちらを見た後、仕方ねえなと首を振りながら、嬉しそうに頬を緩めて最初の部屋へと移動した。上手く気を逸らせたことにほつと胸を撫でおろしつつ、わたしもその後を追つた。

長い一日の終わり

最初の部屋に戻り、キーチくんの隣に腰を下ろして、ステータス画面を見てもう。画面を見てもう。

今日一日で食事と玩具二と料理、更には防御と鉄人なんでものも発現していた。

一度もお知らせが来なかつたのは、街についてすぐいろんな機能をオフにしたせいだろう。

キーチくんに見てもらひながら、自分でも改めてステータスを見直した。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

称号：独り身

体力：38 / 38 (37 / 37)

魔力：21 / 21 (20 / 20)

満腹度：70%

筋力：5 (5)

知力：19 (19)

耐性 : 9 (9)

精神 : 14 (14)

器用 : 77 (74) + 10

速さ : 5 (5)

運 : 5 (5)

称号でステータス5%増加

睡眠 : 58 (睡眠時回復時間5・8%短縮)

空腹 : 98 (空腹時ステータス10・8%上昇)

読書 : 27 (読書力増加)

速読 : 46 (読書速度増加)

解析 : 34 (アイテムの情報判明)

歌唱 : 30 (歌の効果発現率2・8%)

作曲 : 16 (作曲力増加)

機巧 : 61 (からくり作成)

自然回復 : 34 (自然回復速度増加)

魔力操作 : 36 (魔力操作精度増加)

食事 : 11 (空腹回復率1・1%上昇)

防御 : 1 (防御時ダメージ軽減率0・1%上昇)

鉄人 : 3 (ダメージ軽減)

玩具二 : 19 (器用依存攻撃)

料理 : 2 (食材調理)

いつの間にか器用が凄まじく上がっている。

おそらくだが、攻撃スキルの玩具二を覚えたからだろう。

補助スキルとは比べ物にならないその上昇っぷりに圧倒されてい

ると、真剣な顔でわたしのステータス画面を覗いてしたキーチくんが、一つ咳払いをした後アドバイスをしてくれた。

「スキルの取り方に決まりはねえけど、このままじゃ体力が心許ないな。

耐性と精神は装備で補えるけど、体力装備は少ねえし。

ま、明日は採取するつもりだから、そん時に出るスキルでしばらくはどうにかなんだろ」

具体的なスキル名を出さない簡単なアドバイスだったが、逆にそれが好ましかった。

しばらくはこのままスキルレベルが上がるに任せようと決め、明日の予定をキーちゃんに尋ねる。

「明日は採取とまだ行ってない店に連れてつてやるよ。
防具もそろそろ買えるくらいには金貯まつただろ。
後は本屋と銀行、一応作業場も行つとか」

そこでキーチくんは一皿の葉を切り、再びわたしのステータス画面を見た。

そのまま片手でトントンと机を叩きながら何やら考え込んでしまった。

わたしは邪魔にならないよう黙つたまま、じつそりキーチくんを観察した。

エルフ特有の尖つた耳の美少年といつて差し支えない可愛らしさの姿をしているが、接して出来たキーチくんのイメージとはあまり馴染まない気がする。

誘拐犯のフェアリーの少年はそのまんま子供っぽい雰囲気で、可愛がられることに慣れてそうで、違和感が無かつたけれど、キーチくんは可愛いこと言われて喜ぶタイプには見えない。むしろ可愛いなんて言つたら怒られてしまいそうだ。

面倒くさがつてあまり外装を変えなかつたのだろうか。

不思議に思つてゐるのが顔に出ていたのか、考へが纏まりこなからを向いたキーチくんとばつちり田が合い、ギロリと睨まれてしまつた。

「何だよ」

「いやいやいや何でもないよ」

低い声でそう言われ、慌てて首を振る。

キーチくんは不審気に眉をよせ、チッと舌打ちをしたが、そのまま聞い詰めることはせず、わたしの今後の方針を聞いてきた。

「機巧スキル育てるかそうじゃないかで、やり方が変わる。別に他の生産スキルでもいいけどな。

お前はどうするつもり?」

少々ぶつかりぬけた声色のキーチくんの言葉に、わたしはしばし考え込む。

好きで選んだスキルじゃない。

必要に駆られて仕方なく取つただけだ。

しかし成り行きだったとはいえ、もつすっかり馴染んでしまっている。

わざわざからくり作りのための道具も持ち出してきたし、今さら別の物に鞍替えする気も無い。

「やつだね、機巧スキルは育てるつもつだよ。
面白くなつてきたとこだし」

「ぐりと大きく首を縦にふると、キーチくんは黙つたまま軽く頷いた。

そのまま席を立ち、明日九時な、と言い残して作業部屋へと引つ込んでしまう。

「キーチくん、部屋はどつち使えばいいかなー」

後を追つて中に向かつて呼びかけると、好きにじろとの答えが返つてきた。
少し迷つてから、一番左の部屋に足を踏み入れる。
中には小さな机と、大きめのベッドが置かれていた。
隠し部屋のベッドよりもふかふかしていて、寝心地が良さそうだ。
ぽふんとベッドに勢い良く飛び込んで、その肌触りの良さにこやにしてしまう。

「ナリヤだ、タロウタロウ」

すつかり忘れていたタロウの存在を思い出し、慌てて取り出しへて吐き出して、荒て取り出しへて吐き出させる。

相変わらず間の抜けた顔だったが、しばらく見ていなかつたせいかとても可愛く見えて、ベッドに寝転がつたままつんとタロウをつづく。

「タロウ、外だよーっ！

んふふ、すいこよね、ひやんと出られたよ

上機嫌でタロウに話しかける。

もう自分でタロウの代わりに喋ることはしなかつたが、長い一日のことを順を追つて話していった。

微妙な気持ちになつたことや、キーチくんが親身になつてくれていること、話すことは沢山あって、あらかた話し終えてようやく満足した頃には、随分と時間が経っていた。

「明日も、乐しい一日だといいね」

最後に、タロウの腕を握つて、勢いよく身体を起こした。そのままメモニーを開き、ブログを書き始めた。これも隠し部屋では使えなかつた機能が沢山増えていた。いろいろ試したくなる気持ちを抑えて、先ほどタロウに話したことそのまま文字にしていく。

公開と非公開が選べたので、詳しく書いたものは非公開にして、公開用には簡単に、隠し部屋を出られたことだけを書いてアップした。

雑記帳にステータスを書き込み、ついでにブログにもその内容を[写すこと]にする。

一曰、まとめ、思い出したことをつけ加え、途中でしんみり感傷に浸りつつ昨日までの日記を完成させ、非公開にする。既に日付は午前0時を跨いでいた。

急いでアラームを八時にセットして、身体をベッドに横たえる。

「おやすみ、タロウ、キーチくん」

夢は見れないけれど、気持ちよく眠れそうだと、幸せな気分で目を閉じた。

十四田畠。

田覚め田に飛び込んできたのは、隠し部屋よりも随分高い天井だった。

改めてあの部屋を脱出出来たのだと実感出来て、じわじわ嬉しさが沸き上がってくる。

すぐに飛び起きて部屋を出るが、キーチくんはまだ起きていよいよだつた。

今のうちに部屋の中を探索しておこうと、まずは作業部屋に向かう。

作業部屋は昨日料理をした焚き火を中心として、時計の文字盤のように十一の区画に分かれている。そのうちの一つは今入ってきた入口に充てられている。

まずは朝ごはんだと、真ん中の焚き火で兔の肉を焼く。

じんがりて良い色に仕上がり、試しに端っこをちょっととかじってみると、じゅわっと肉汁が溢れてきて、口に広がる肉の甘さにうつひとつしてしまつ。

スキルレベルはまだまだ低いのに、こんなに美味しく作れるとは驚きだ。

これならば確かに、レベルを上げていろんなレシピを覚えれば、

店で食べたものより美味しいものが作れそうだ。

そのまま片手で肉を掴み、むしゃりと豪快に噛みちぎって口いつぱいに頬張りながら、分かれた区画を一つずつ確認していく。

都合の良いことに、手には肉汁はつかず、全く汚れる素振りもなかつた。

そういうえば部屋に風呂は無かつたし、隠し部屋でずっと過ごしたのに髪もべとついていない。

リアリティーはあるけれど、そんなにじゅはやつぱりゲームなんだなと思いながら、ゆっくり部屋の中を廻った。

昨日はあんまりゆつくり見る時間が無かつたが、改めて覗くとそれぞれが簡素なパーテーションで仕切られていて、小さな部屋のようになつていることが分かつた。

一つ一つ中にあるものは違い、魔女が笑いながら中身をかき回してそうな大鍋で占領された場所に、鍛冶炉と金床のある場所、他にもぱつと見ただけでは一体何に使つているのか分からない場所まであり、様々な生産が出来るようになつてているようだつた。

そのうちの一つ、試験管や秤の置いてある場所はキーチくんが使っていくようで、カラフルな液体や粉が無造作に散らばつていた。

それ以外の場所には全く手がつけられていなかつたので、からく
り作りに良さそうな場所が無いかと思ったものの、わたしが隠し部
屋で作つたような道具が置かれている場所が無い。

一つは何も無いただの空間となつていたので、とりあえずそこを
使わせてもらおうと作業台を取り出して真ん中に置き、その上に他
の道具を並べていく。

全て並べるとそれだけで台の上は埋まつてしまい、作業するスペ
ースが残らない。

もう一つ台が欲しいなと考えてみると、部屋の扉が開きキーチく
んが入ってきた。

「お、お！」

「お、お！」

わたしが居るとは思つていなかつたのか、一瞬びくつと身体を震
わせたキーチくんだったが、すぐにこちゅうこちゅうくつ近づ
いてくる。

「よくわかつたな、機巧スキル向きの場所が」

並べた道具を興味深げに眺めながらそんなことを言われ、曖昧に笑つて頷く。

消去法で選んだだけなので、讃められても胸を張つていいいのかわからない。

「あー、見た目で何の部屋かわからんねえとこ入つたらまず解析な。解析スキル持つてんならとりあえずなんでも解析かけてみろ」

わたしの表情に何かを察したらしいキーチくんにそうアドバイスされて、この場所に解析をかけてみると、その他の部屋と浮かび上がりってきた。

「宿屋の作業部屋は備え付けの施設が必要なのと取つてるやつが多いスキルに有利な効果付きの場所と、それ以外に分かれんで。その他の場所は一律で全部の生産スキルの成功率が上がるようになつてる筈だ」

文字を指差しながら丁寧に説明してくれたキーチくんは、そのままぐるりと一角を見渡し、腕を組んだまま足りないな、と呟いた。

「ん、何が？」

「椅子やら机やら、何もかも足りてねえ」

やつ言つとキーチくんは、他の使つていな区画から背の低い小物の椅子を一つ運んできて、作業台の前にぽんと置いた。

「え、いいの？」

「俺は薬しか作んねえからな、使わない場所のもんは好きにしていい」

そのままキーチくんは自身が使つて いる場所に行って、何やら作

業を初めてしまったので、わたしはわたしで他の場所から適当なものの見繕つこにした。

鍛冶炉のある場所からは材料を入れるような大きめの箱を、大きな机のある部屋からはルーペや彫刻刀の入っていた道具入れりしきものを、最後に魔女の鍋の部屋から踏み台を持ち出して、それぞれを適当に配置する。

道具入れには小さな作業道具を收め、踏み台の上には大きめの道具を並べ、隅に箱を設置すれば、随分とそれらしい部屋になつた。

機巧師の部屋と名付けても違和感の無い仕上がりに、満足しているんな角度から部屋を眺めていると、作業を終えたらしいキーチくんに後ろから声をかけられる。

「やあやあ出るわ」

短く告げてそのまますたすと入口に向かうキーチくんの背を小走りで追いかける。

部屋を出たところでちゃんと立ち止まって待っていた姿に、にやけそうになるのを必死でこらえて、歩き出したキーチくんの少し後ろを澄まし顔でついていった。

宿のおかみさんは変わらずにこにこ笑顔で、いつてきますと言え
ばきちんと反応してくれた。

いつてらつしゃいの言葉を噛み締めながら、やっぱり宿は来る人
が多いからだろうかと上機嫌なまま考えていると、すぐに一つ田の
目的地に着いた。

しつかりした煉瓦作りの建物の前で足を止めたキーチくんは、建
物を指差して銀行など亥いた後、中に入らざるのまま別の場所に歩
を進める。

少しゆっくりめの速度にすぐに追いついて、隣に並ぶと立ち寄ら
なかつた理由を話してくれた。

「銀行は宿を長期で取つてる場合は殆ど使わねえんだ。

預けたものは別の街でも受け取れるから、移動する時に預けるく
らいか。

一回につき手数料が50Gかかるから、試しに預けてみると
にもいかねえだろ」

確かに、50Gは大きい。

手数料なんかで消費するくらいなら、何か美味しいものを食べる
方がいい。

説明を聞いた限り普通のMMOでの銀行と大差は無さそうだった

ので、知らなくても大丈夫だろつと自分の中では結論づける。

次にたどり着いたのは、銀行とは違った木で作られたやたらと大きな建物の前。

ここも中に入ることは無く、作業場だけ紹介される。

どうやら中に入る時にお金が必要なようで、中身は宿屋のものと大差無いと説明され、納得する。

お金に余裕が出来たら見学に来てみようといつそり思いながら、次の目的地に向かうキーチくんについていく。

道中すれ違う人に声をかけるが、やつぱり反応は無い。

宿屋のおかみさんのようにはいかないかと、少々がっかりしていると、前をゆくキーチくんから遠回しなフォローが入った。

「店とクエストのNPC以外のやつは、普通話しかけられない分成長早えから。」

「その、まあ、あれだ。」

「挨拶くれえなら、そのうち返つてくる」

照れくさいのだろう、後ろからでも耳が赤くなっているのが分かる。

優しい気遣いに感謝しながら、そんなに落ち込んでないことを示すために、元気良くなれ違うNPCの人たちに声をかけてゆく。何度かキーちゃんが小さな声で挨拶していたのは、何とも微笑ましかつたけれど、態度には出さず気づかないフリで通した。

次に着いたのは小ぢんまりとした建物で、キーチくんは今度は素通りせずに中へと入っていく。

続いて入口を潜ると、中には鎧や兜を着せられたマネキンがずらりと並べられていた。

重そうな金属の甲冑から、下着のよひに露出度の高いものまである。

あくは普段の生活では目にしないような「デザイン」で、物珍しさに近くのマネキンの着ているものをぺたぺた触つてその質感を確認した。

見た目には着心地の悪そうなものが多くたが、裏地はしっかりとして意外にも肌触りが良い。

つい頬擦りしてその感触を楽しんだいふと、躊躇いがちにキーチくんに声をかけられる。

「あー……とりあえず、昨日稼いだ範囲で買えそくなやつ見繕つたけど。

その、それはちょっと、やめといった方がいいと思つぜ!」

そう言われて、頬擦りしていたものがラメ入りのキラキラした紫の服であることに気づき、慌ててマネキンから距離を取る。あはははと恥ずかしさを取り繕つように笑いながら、キーチくんが選んでくれたものを手にとった。

昨日稼いだ分と使ったものも合わせて、今の所持金は500Gと少し。

何かあつた時のためにある程度残しておくとすれば、使つのは400Gが限度だろう。

まず目についた皮の胸当ては、いかにも防具らしくて良さそうだったが、取引画面を開いて確認すれば300Gと少し高い。一つにつき込むくらいなら、安めのをいろいろ買って、お洒落したい気持ちも多少ある。

今のがたしの格好は初期装備のままで、上は布のTシャツ、下は布の長いズボンになつていて、上下ともにベージュ色をしている。Tシャツはシンプルなデザインが割と気に入っているのだが、下は微妙だ。

お腹のところで紐で結んだだけの、裾がぶかぶとした寝間着のようなデザインはいただけない。

そこでまず、カーキ色のショートパンツを選ぶ。

防御が2しか上昇しないせいか100Gと安めだった。

ついでに布のリボンと革のブーツを選ぶと、350Gとなつた。

新しい服に着替えられた」とわくわくしながら店員さんを呼ぶ。

すみません、では店員さんは反応してくれなかつたが、具体的に商品の名前を挙げるとマネキンの中から金色のスーツを着た髪の長いお兄さんがこちらへ向かつてきだ。

てっきりマネキンの一体だと思っていたものがいきなり動き出したので、ぎょっとしてしまつたが、にこにこしながらこちらの言葉を待つてゐるようだつたので、おずおずと商品一式を差し出す。成長具合は武器屋の店員さんと似たり寄つたりで、愛想は良いけれど防具の売り買いに関する以外には答えてくれない。

しかし、そんな状態でこんな派手なスーツを着こんでいるところからして、自由に喋るようになつたら非常に個性的な人になりそうな予感がする。

その時が楽しみだと思ひながら、無事に買い物を終えた。

そのまま防具屋の中で、買つたものを身につけてゆく。

装備するには手にとつて装備しようと思えばいいので、どこかへ引っ込まざにその場でぱつぱと変更した。

しかしショートパンツ身につけても、元からつけていた布のズボンは外れずそのままだつた。

布のズボンの上からショートパンツを履いてゐるといつ、非常に情けない格好になつてしまつてゐる。

ブーツは初めから履いていた木靴とちゃんと入れ替わつたので、やり方が間違つてゐる訳ではないらしく。

「体の上と下は、五つまでは重ね着出来るから。

脱ぎたきや頭ん中で脱いだ自分の姿イメージしながら、脱ぎたいやつに触れ」

キーチくんからそんなアドバイスを受けて、ショートパンツだけになつた自分を思い浮かべながら布のズボンに触ると、するりと床に脱げ落ちた。

そのままズボンをつまんで店員さんへ渡し、ついでに一緒に木靴も合わせて、全部で15Gで引き取つてもらひ。

せつかく重ね着出来るといつことなので、50Gの黒いスペッツを購入し、ショートパンツの下に身に付けた。

最後に肩まである黒い髪を買つたばかりのリボンで束ねてみる。

「どうかな、似合つ似合つ?」

すつかりはしゃいで、くるりと回つてみせたが、キーチくんからはつけない反応しか返つて来なかつた。

しかしそれで気分が沈むことは無く、るんるんと浮かれて結んだ
髪に手をやる。

さりと手に当たる感触は現実の自身の髪の毛の質感と似ていた。
すぐつたような切ないような、そんな気持ちがきゅっと胸を
締め付ける。

浮わついた気持ちは一瞬で落ち着き、なんとなくしみじみしてしまった。

現実ではさほど時間が経っていないことはいいえ、もう随分と長く家
を空けているような気持ちになる。

旅行先でふと軽いホームシックにかかるような、そんな感じだ。

「ほら、次行くぞ、次」

急に大人しくなったせいが、キーチくんが少し焦ったような口調
でわたしを店の外へと追いたてる。

はいはいと苦笑いしながら従つと、後ろからありがとうございま
したとの声がかかる。

振り返ると、店員さんが深々とお辞儀しながらわたしたちを送り
出してくれていた。

たったそれだけのことセンチメンタルな気持ちは吹き飛んでし
まい、また少しこの作り物の世界が好きになる。

こちらこそ、と店員さんに向かつて大声で叫んでから、意氣揚々
と次の場所に向かつた。

次の目的地は本屋で、町の小さな古本屋のよう~~に~~店中にぎっしきつと様々な本が並んでいて、通路は人一人が通れるギリギリの幅しか無い、そんな店だった。

買わないまま立ち読みすることは出来ないらしく、試しに手にとつてみたものの開くことは出来なかつた。

「機巧スキルに関するもののピックアップを頼む」

わたしが色んな本のタイトルに目移りしている間に、キーチくんが店番のお婆さんに話しかけていた。

お婆さんはそれに軽く頷いて応え、さつと右手を翳す。

すると店の本棚のあちこちから本がすつと抜け出て、お婆さんの前に飛んで行き、その前の番台に積み上がりていった。

幻想的な光景にほうと見とれでいるど、キーチくんに確認するよう~~に~~言われる。

狭い店なので、一度店を出てキーチくんと場所を入れ替わり再び中に入り、積まれた本のタイトルと値段を取引画面で確認した。

全部で六冊あり、その中には『ごみ図鑑』も含まれていたが、10000Gと高くすぐに手が出そうな値段では無かつた。

一番安いものでも600Gしたので、今すぐ入手という訳にはいかなさそうだ。

残念だと思ひながら店を出でようとした、キーチくんは戻る
られる。

「いらっしゃい、吉井さん

ぽんと手のひらに硬貨を出現させながら「んなことを言ひついで、
慌てて店を出よ」とする。
しかしキーチくんは頑固にもその場を動いてくれない。
どうしたものかと困った顔をすると、キーチくんはさきつと田尻を
吊り上げた。

「今から採取すんのに必要なんだよ。

機巧スキルなんて掲示板に情報殆どねえしよ」

「いや、でも基本材料は分かるよ、糸と金属板と木材、それに針金
と歯車。」

わたしも負けじと声を張り上げ対抗すると、キーチくんはぱつぱつ

つと向やら騒いた後、何も買わないまま店を出してくれた。

ままだ。

せつかくの好意を無下にしたよつて、悪いとは思つてつも譲れな
い一線について伝えておへ。

「あのねキーチくん、わがままかもしれないけど、わたし身の丈に
あつたプレイしたいんだ。

だから、自分で買える範囲で買い物したいなーって、あれ?
いやいやいや、宿屋とつてもらつちやつた時点でこんなこと言ふ

た義理じやないよね。

むしろキーチくん付き合はせてくれたにせよ、ひだり、やっぱ
いわたし超図々しい!

自分のことだけ考えてた、キーチくんのプレイスタイル考えてな
かつた!

そうだよね、のろのろプレイに付き合いつて言つてると回じじ
やん、うわ、恥ずかしい! 「

しかし途中で自分の主張の身勝手さに思い至り、かつと頬が熱くな
る。

互いの効率の良さを考えるならば、厚かましい云々は横において、
先にお金を借りてしまつて装備を揃えて後から色をつけて返す方が
よっぽどいい。

結局わたしの主張は、自分のプレイを優先させた故のものだ。

キーチくんにたかるよつで悪いから、なんて言い訳をつけたせいで、じこまで気づかなかつた。

わたしのやり方を通すと、それだけキーチくんを格下の狩り場に引き止めることになる。

そこを考えていなかつた自分が情けなくなる。

今からでも別行動を申し出るべきか。

しかしそうしたらキーチくんを側で守れない。

一体どうすれば良いのかわからなくなつて、頭が真っ白になる。

「……い、おひつ、シトロネラ、シロツー。」

大声で名前を呼ばれ、はつと我に返ると、困つたように眉を寄せるキーチくんとばつちり曰が合つた。

その表情にまた迷惑をかけていくとがくつと肩を落とすと、もじもじと歯切れ悪く、しかし言葉を濁すことなくキーチくんがぽつぽつと喋り出した。

「ああ、もう、やり方が陰湿…」

ギルド『せんぶらんしすー』の会議室にて、メルチエが苛立った様子でバンと荒々しく机を叩いた。

部屋の中に居るのは、幹部の四人のみで、そろそろジマの姿は無い。

「メルチエ、腹立てたら負けよ。
冷静になつて、ほら、深呼吸」

そうメルチエに声をかけたのは、三十代半ばの外見年齢に相応しいしつとりした肌の質感を持つ、切れ長の瞳をした人間の女性だ。その外見に相応しく声色も落ち着いていて、全身から怒氣を発するメルチエをやんわりと宥める。

十代から二十代前半の外見をした女性キャラクターが圧倒的に多いゲームの中で、珍しく三十代の外見を選択し、大人の女性が醸し出す色氣と母性を言葉や行動の端々から滲ませる彼女、アルローネは、ババアと悪態をつかれることも多かつたが、一部の層から密やかにしかし熱烈に支持されている。

「ま、うんざりもするわな、つたく厄介なやつらだよ」

アルローネに続いて口を開いたのは、全身が赤い鱗で覆われた年齢不詳の男性。

生々しい鱗の質感や、爬虫類を模したその顔があまりにもリアルなため、いまいち人気の無い竜人キャラクターの彼、捻り鉢巻きこと通称ネジは、ちろちろと細い舌を覗かせながら、煙混じりのため息をつく。

「年少組へのフォローは終わりました。

噂の出所はNPC、かなり面倒なパターンです」

そんな三人の言葉を余所に、画面を操作しつつどこかへとひっこりなしに連絡を取っていた、黒豹の獣人の青年が口を開く。

耳や尻尾のみが獣あとは人間と同じというタイプの獣人とは違い、獣をそのまま一足歩行に適応させ、顔だけが獣と人間を合わせたようになっているタイプの獣人で、どこか不気味な外観から竜人と同じくらい人気が無い種族だ。

現に青年、サリュが、瞳孔を極限まで細くし薄く開いた口から牙を覗かせながら画面を操作する様は、禍々しさすら感じさせるような迫力があり、迂闊に声をかけたら喰われるのではと思わせる雰囲気がある。

しかしサリュ以外の人間は氣後れする様も見せず、黙つて続きを促した。

「プレイヤーとNPC同時進行で火消ししないと再燃します。
ギルド戦捌くのはそれから、ですかね。
多少ポイントが削られるのは諦めましょう、今、結構まずいです
から」

「画面から目を離さないまま語られた内容に、サリュ以外の三人は
頷きつつ、各々が何事か考え込んだ。

事の始まりはつい先日。

ギルド員の間で、ゴジマがギルドを解体して引退するつもりらしいという噂が流れていることが四人の耳に入つた。

もちろんそんな予定など無く、何を馬鹿なことをと四人それぞれが笑つて否定したため、噂はそれで落ち着いたかのように見えた。しかし一旦落ち着いた噂はいつのまにかギルドの外でもまことしやかに囁かれるようになり、それを耳にしたギルド員がまた不安があるといった悪循環が発生していた。

『愉快犯』のことでゴジマが随分と落ち込んでいたことも噂に信憑性を持たせる結果となつたらしい。

結果、ギルド員へのギルドからの勧誘が殺到し、解散される前の記念にどギルド戦の申し込みが急増することとなつた。

ギルド戦は一定期間内に相手に返事をしなかつたり、格下のギルドからの申し込みを蹴ると地味にギルドポイントが減るので、数が多くなればその影響は少なくない。

だがそのペナルティを受けても、今は噂の収束が先だとサリュは主張している。

普段なら対応出来る人間を外から呼んで、分担して事にあたることも出来ただろう。

が、今は生憎イベント中で、人が減ることはあっても増えることは無いのだ。

それでもシトロネラのことが無ければ、十分に対処出来た範囲内だつた筈だ。

しかしゴジマへのフォローと、シトロネラの捜索に気をとられた結果、幹部四人がその噂に気付いたのは噂が十分に広まってしまった後だった。

そしてシトロネラが救出された今は、事の詳細を問い合わせる声とシトロネラの現在地を知りたがる野次馬もそこに加わり、救出後も不自然な程収束を見せないギルド解散論と共に、四人を悩ませることとなる。

「はあ、こんなこと言いたか無いけど、ほんとあのシトロネラって子、鬼門だわ」

椅子の背に寄りかかり、天井を見上げたままメルチエが呟くと、苦笑いしながらネジが肯定とも否定ともとれる言葉を返す。

「その子が悪いんじゃ無いがなあ。
確かに相性悪いわ、俺らとは」

そんな二人を笑顔でやんわりたしなめたアルローネは、サリュに

向かつて大まかな役割分担を提案する。

「私はギルドの子たちのケアに廻るわね。

ほら、志保ちゃん、あの子気にしちゃつてるのよね、噂聞いてすぐにおたちに伝えなかつたこと。

サリュは情報集め、メルチエたちはNPCの火消しが妥当かしら」

そつと手を頬に添えながら、微かに首を傾げるアルローネに、サリュは微動だにせず応えた。

「いえ、NPCはアルが良いでしょ。NPCの中のキーパーソン数人に接触してそれとなく噂を否定してください、分からなければ後でリストを送ります。ついでにギルドの子も連れていけばケアにも役立つでしょうし、そこはアルに任せます。

メルチエはゴジマについていてください。

これ以上何かあると不味いです。

場合によつては敵を作つても構いませんから、ゴジマをガードしてください」

それを聞いてメルチエは少し嬉しそうに笑い、すぐに表情を引き締め続く言葉に耳を傾ける。

「嫌かもしませんが、『ジマ』と『愉快犯』は引き離さない方向でお願ひします。

『愉快犯』は抑えておきたいですからね。

ネジは各ギルドの幹部以上にあたつてください。

ギルド戦のハンデをちらつかせても構いませんから、ギルド内で噂を否定してもらえるよう交渉を。

あとは、そうですね、七海をマーク出来る人間も欲しいといふですが

そこまで喋つたところで、初めてサリュは画面から視線を外し、天井を見上げて大きなため息をついた。

「せめてリョウキがポロが居れば良かつたんですが。本当に間が悪いというか、やり方が汚いというか」

普段滅多に感情を表に出さないサリュが、珍しく苛立ちを滲ませた言葉を呴いたことに、他の三人は軽く驚いてみせ、互いにさつと目配せをしてから、各自行動を開始するべく会議室を後にしようと立ち上がった。

「あ、そうだ、あのシトロネラって子たちがどうある? 一応気にかけとく?」

一番に扉に手をかけたメルチエが、振り返りつつ氣乗りのしない様子で三人に問うと、サリュがにやつと牙を見せて笑つてみせた。

「それは僕にお任せを、勿論七海の相手もね。
メルチエたちは、一切気にする必要ありませんよ」

それはサリュが敵と見定めたものに向ける表情だ。
メルチエはその反応に満足気な顔で外へとかけてゆき、アルと

ネジは苦笑いして肩を竦めるも、特に反論することもなくメルチエの後に続いて部屋から姿を消す。

「恨みは無いんですけどね」

一人残された会議室で、ぽつりとサリュが呟く。
かちかちと、どこからか取り出したキーボードを使って誰かにメールを書きながら、表情の抜け落ちた顔で、目の前の画面を見つめる。

「知らぬは罪、たとえ悪気が無くても。
せいぜい、役に立つてください。」

僕たちの身代わりとして、囮、としてね

たん、と一際大きな音を響かせ、ビームがヘッドメールが送信された。
後に残つたのは静寂だけ。

その中でまたサリュは、黙々と別の工作を始めるのだった。

採取します（前書き）

難産でした。

話を進めたいので無理矢理捻りだし。
そのうち書き直します。

採取します

「俺、いつまで誰かとプレイしたことあるまいねえんだ」

「机の上に直接見る」とはせぬし、わざわざ地面を蹴りつけながらキーチくんは懺悔するかのじとへ弱弱しげ顔で言葉を紡いでいった。

「だから加減が分からねえ。

どこまでやつていいのかも、どうすればいいのかも。
どうやつたら一番いいのかも、全部分かんねえの。

別にお前に付き合つのは嫌じゃない。

プレイ最初のこと思い出すから、むしろ、た、たの、楽しい、し。
あああ、だから、お前は好きにやつやいいんだよつ！
んで嫌なことさせつたり言や二いんだ。

俺も、やつするし

途中で照れくさくなつたのか、急に声を張り上げ、せりとひから
を睨み付けながらそんなことを言つてゐる。だから、落ち込んでいたこ
とも忘れふふふと笑つてしまつ。

キーチくんはむつとしたよつて眉をひそめ、口を尖らせて何事か
言おうとしたので、先にひからが言つたことを言つてしまつ」と
にした。

「ほんとひ、ほんとに嫌な」とせりとひ。

キーチくんがわたしに会わせる必要なんて無いんだし。

調子乗んなつて叱つてくんないきや、わたしますます調子に乗るか

らね

割と本気で言つたことだつたのだが、今度は逆にキーチくんにふ
んと鼻で笑われてしまつた。

「別に、嫌んなつたらひからに置いてく」

せりとひが言われたものの、あつとそんなこと出来ないだろ？

と思ひ。

わたしが自分でうまく迷惑の度合いをコントロールしなければ、キーチくんは黙つて受け取るだけな気がしてしまつ。それをキーチくん本人に告げたところで、反論されるだけだらう。つまり、そこはわたしが上手く見極めなければいけないのだ。

「じゃあキーチくん、今日も一日よろしくお願ひします。
えつと、本は無くても大丈夫?」

かしこまつて深々と頭を下げつつ、先ほど頑なにわたしがいらなりと言い張った本について話を向けると、少し悩んだ後にキーチくんは首を振つた。

「今日は採取した後はまた狩りに行くつもりだしな。
んで、金貯めて自分で買え」

それで良いだろと言いたげにわたしの方を少し見たので、結局こちらの主張を通してしまつたかと思いつつも素直に頷いた。

わたしの反応を見て満足げに笑ったキーチくんは、くるりと踵を返してさっさと街の入口に向かって歩いていく。

急いで追いかけると、その背に追いつくか追いつかないかのところで、再びキーちゃんが喋りはじめた。

「これは一人言だ。

あー、初心者プレイなんぞ一回しか出来ねえ。

新キャラ作つて新しく始めたつて、知識は残つたまんまだ。それをもう一度、疑似体験出来るんだ、初心者の隣で。面白くない訳がねえだろ

途中でつい話に割り込みそうになり、最初に一人言だと前置きしていたことを思い出して、慌てて口を閉じる。

「俺なりのチュートリアル終わつたら、そつからば口出しねえ。
好きなようにやりやいい。

ただそれに俺がついてくだけだ、それが今の俺のやりたい」とつてこつた

一人言の割に随分と声が大きくて、おまけに誰かに話しかけているようだけど、反応はせずに耳をすませる。

ほんのり耳が赤くなっているのも、気づかないふりをする。

ゲームを始めてから、ついていないことの連続だった。

腹の立つことも無かつた訳じゃない。

だけど今この瞬間、ゲーム内の幸せ不幸せの総量を天秤にかけて比べたら、圧倒的に幸せの方へと傾くんじゃないかと思う。

「ありがとう、あ、一人言ね、一人言」

うふふと笑いながらキーチくんの背中にそっと言葉を投げ掛けたら、ぴくりと肩を震わせたあと、歩くスピードを早めてしまった。その後ろをついてゆくわたしの姿を見ていたのが、NPCの人だけなのは幸いだった。

きっと、すごくやけてしまりの無い顔をしていただろうから。

街を出る前に雑貨屋に立ち寄り、使い捨ての採取道具一式を購入して、いざ採取へと向かう。

道具自体は20G前後でさほど高くなかったのだが、鍬にツルハシ、斧に鎌の四種類もあつたので所持金ギリギリだった。

ここはお金を稼ぐためにも、張り切って採取しようと思っていたが、スキルレベルが低いせいかなかなか上手くいかない。

一番最初の採取場所、ヨモギの群生地でキーチくんを見倣つて鎌を振るうも、三回に一回程度の割合でしか、手元にヨモギが残らない。

失敗した時ははらりと小さな粒になつて、どこかへと飛んでいつてしまつ。

それでも鎌が壊れるまで振るつた結果、20個のヨモギを採取することが出来た。

店で売ると1Gにしかならないらしいけれど、薬を扱うプレイヤーには5G程度で買い取つてもらえるらしい。

なんて説明と共にキーチくんから取引を持ちかけられ、100Gとヨモギ二十個を交換することになった。

交換の際、キーチくんが少し嬉しそうにしていたので、きっと本当に必要なものだったのだろうが、今のわたしにそれを判断する知識は無い。

互いに気を遣いすぎることなく遊ぶためにも、もつと色々自分で勉強しなければと思いながら次の場所に向かつた。

鍬は誰が管理しているのか分からぬ、畑に実ったキャベツヒジヤガイモらしき野菜を掘りおこすのに使つた。

勝手に収穫して良いのかと思つたけれど、鍬をふるつていの最中、収穫し終わった場所から新しいキャベツがぬつと生えてきたのを見

て、なんとなく仕組みを理解した。

農業スキルを使って作った野菜と、フィールドに自生している野菜は形は同じでもその効果は全く違うらしい。

質の面で自生はスキルで作ったものに大きく劣り、店でも低価格でしか引き取つてももらえないようだが、料理には使えるようだ。

キヤベツもどきとジャガイモもどきと、兎の肉と組み合わせた料理が幾つかあることを教えてもらい、早速帰つたら試してみようとほくほく顔でアイテムをしまつた。

次の採取場所は少し街から離れた場所にあった。

少し間をあけて背の低い木と高い木が混じつて群生する林は、薄暗く不気味な雰囲気が漂つている。

奥に行くとアクティブモンスター、こちらを認識すると攻撃しながら襲つてくるタイプの敵が居るということなので、林の入口で斧を振つた。

木を斬り倒すと、自動的に枝を切り払われ、幾つかの丸太に分かれた状態で目の前に転がり、しばらくすると切株からによきによきと新たな木が生えてくる。

早送りで木の成長する様子が再現され、ほつと見とれつつ、転がつた丸太をしまつ。

丸太はさすがに重量があり、メルシェさんに貰つた小さな袋を駆使しないと、収納しきることが出来なかつた。

しかしどんぽん小さな袋に丸太を放り込んでいると、キーチくん

に見咎められ、その出所を訊ねられる。

素直にメルチュさんに貰つたのだと答えると、キーチくんはもう「ぐく不満そうに顔を歪めた後、小さな袋より一回り大きな袋を取り出し、ぐいとこちらへ押し付けてきた。

受け取れないと首を振り、返そつとするが、拗ねたようにぱいつとそっぽを向いてしまつ。

「……んで、メルチュはよくて、俺は駄目なんだよ」

そんな風にぽつりと呟く姿があんまりにも可愛らしくて、つい流れ受け取つてしまつ。

しまつた、とは思つたけれど、満足げに笑つたキーチくんの表情を見て考え方改めた。

わたしも、魔物笛を受け取つてもうえなかつたら、がっかりしていただろう。

そう置き換えてみたら、頑なに拒むのも違つ氣がする。

お礼を言つて、早速貰つた袋に丸太をせつせと移し変えつつ、あまり意固地になりすぎないようにしようとして密かに反省した。

休憩、後、狩り

最後に向かつたのは、草原に点在している人の背丈より少し大きめの岩の所だ。

鉱石の採掘が出来るらしく、試しにツルハシを数度振つてみると、岩肌が削れ、周りとは色の違う石が姿を現した。

そのまま何度も続けて振ると、黒い煙が一瞬石の回りを取り囲んだかと思うと、しゅわしゅわと音を立てて霧散し、その姿を消してしまつ。

どうやら失敗したらしい。

気を取り直して再度挑戦してみたものの、また失敗だった。

「採掘は他の採取より成功率低いからな。

石が見えたならその周りを削るイメージで掘ると多少上手くこきやすい」

負けるものかとツルハシを大きく振りかぶったわたしに、隣で同じく採掘していたキーちゃんからアドバイスが投げ掛けられる。見れば既に足元に三つほど鉱石を散らばっていて、四つ目の石

をがりがりとツルハシの先端で削つているところだった。

その動作を一通り観察してから、慎重にツルハシを動かす。

一度目はまた失敗してしまったけれど、二度目は小さいながらもちゃんと鉱石らしきものが取れた。

嬉しくなつて、地面に転がつた鉱石を拾い、解析をかけてみる。

浮かんで来たのは、銅鉱石の破片との文字。

きちんとした鉱石で無いのは残念だけど、ヨモギ摘みや野菜の収穫に比べて達成感があるのは、その姿が見えない所から石が現れるからだらうか。

「そついえばキーちゃん、採取スキルいろいろ持つてるんだね」

採掘も先の三つの採取も、近くで一緒に行なつていたことを思い出し、次の鉱石を掘りにかかりつつ何気なく話しかける。

「ああ、基本の採取は全部20ちょい上げてる。

買つ」とが多いけど、いつもイベント中の気分転換用にな

たまに採掘イベントもあるしな、と呟きながら、また一つ鉱石を掘り当てる。

見た目からして銅鉱石っぽい。

わたしはまた失敗して、黒い煙を発生させてしまう。

「採取と金属精錬スキルは一通り覚えておくと便利だな。

フリマはどこにでもはねえし、店では品切れなども少なくない。

調合したい時に出来ねえのは、不便だろ」

キーチくんも今度は失敗したようで、しゅわしゅわと手元から音をさせている。

20ちょっとあつても失敗するんだと思いながらキーチくんの言葉に頷き、またツルハシを振るった。

結局、ツルハシが壊れるまでに掘れたものは、銅鉱石の欠片が五個に銅鉱石が一つだけだった。

今ひとつはかばかしくない成果だったが、キーチくんによれば悪くないらしい。

そんなものかと納得しつつ鉱石を袋に仕舞い、ついでにステータスで満腹度を確認する。

いつしか太陽はてっぺんから少し傾いている。

こんな時間まで、朝から昼食を取らずひたすら採取に励んでいた

せいか、既に50%をきりかけていた。

兎の肉は何枚か持つたままだけど、残念ながら調理していない。

一応食材だからそのままでも食べられる気はするけれど、逆に満腹度が減つてしまつたら困る。

試しにちょっとかじつてみようと、肉を取り出すのと同時に、いつの間にか離れたところに移動していたキーチくんに呼ばれた。肉を握つたまま小走りで近づくと、地面が円上に剥き出しになつている場所の中心で、小さな焚き火が燃え盛つていた。

「休憩、と食事な」

そう言いながら、キーチくんは焚き火の周りに散らばつていた枝を拾い、ぐるりと肉を巻き付けて、火の側の地面にふすりと挿し、どつかりと腰をおろす。

わたしもそれに倣い、肉を焼き、その前に陣取つた。

「フィールドには、こんな焚き火のポイントがある。
焼くしか出来ねえけど、敵も近付いて来にくいから休憩には向いてんな」

肉はすぐに良い匂いをあげて色づき、ほたほたと肉汁を垂らし始めた。

キッチンが手を伸ばすの一緒のタイミングで取り、むしゃりとがぶりつく。

「んん、あれ、なんかあんまり美味しいよつな」

見た目はフライパンで焼いた時より美味しい仕上がっているのに、口に含んでみるとあまり汁気がなく、少しづつせぼしていた。

「ああ、外での調理は精度落ちるからな。
調理器具使わねえと更に落ちる」

「くんと口の中を飲み込んでから、キッチンがそんな説明をしてくれる。

ふむふむと納得はしたものの、外の焚き火で焼いた肉というわくするシチュエーションに見合わない味に落胆しながらもそもそも口を動かしていると、見かねたらしのキーチくんにスキルレベルが上がれば味も良くなると慰められ、調理スキルレベルを率先してあげようと密かに決意した。

「後は狩りしていくか。

兎一発で行けるなら、ちょっと上の行くぞ」

肉を食べ終わると、休憩もそこそこにキーチくんは立ち上がり、街とは逆の方向に歩いてゆく。

昨日はずっと街道の付近で狩っていたのだが、道からも外れ、ずんずん進んでいった。

周囲にはちらほらとラビの姿が見えていたが、進むにつれ次第に別の姿も混じつてくる。

ラビの姿が完全に見えなくなり、縞馬模様の小さめの牛と、ラビより少し大きな栗鼠ばかりになつたところで、キーチくんは足を止めた。

まずは牛と栗鼠、両方に解析をかける。

牛のほうはカウル、栗鼠はチップといふ名前で、ラビと同じじくあ

まり捻りがない。

意外なことに体力は双方とも似たようなもので、ラビの二倍弱程度だった。

これなら楽勝だうと、キーチくんのお手本も待たずにカウルに挑もうとするが、ぐいっと後ろから服を引かれた。

「カウルには気をつけるよ。

近くで敵倒すと襲ってくる。

俺はもう少し奥に行くから

そう言い残し、キーチくんは少し背の高い草が生えた場所をがさがさと音を立てて進んでいく。

変な人に絡まれないだらうかと一瞬心配になつたが、キーチくんの向かう先には絶壁の岩肌がそり立つてゐるがうつすら見え、よつぼどのことが無い限りそちらから人が來ることは無いだらうと判断し、改めて敵に向かうこととした。

まずは、カウルの側に居ないチップの姿を探す。

ざつと見た感じ、カウルよりチップの数の方が多い。

おかげですぐに孤立したチップを見つけることが出来た。

草を食べるでもなくその場に立ち尽くし、何かをじつと見つめて

いる一匹のチップに近づき、改めて解析をかけて体力を表示させる。
50／50と表示されたバーを確認して、ヨーヨーを構えたまま
じりじりとその距離を詰めていった。

狩りも終わり

ギリギリまでチップに近づき、狙いを定めてから、勢いよくヨー
ヨーを投げつけた。

どすんという鈍い音がすると同時に、体力表示のバーが半分強
減少して、目を赤く光らせたチップがこちらに向かってぐるると低
い声をあげる。

ヨー ヨーを手元まで引き戻し、再度攻撃を仕掛けようとするも、
その前にチップが小さな石らしきものをこちらにぶつけてくる。

避けたつもりだったのだが、私の身体の動きに合わせて石の軌道
もぐにやりと曲がり、お腹でがつんと受け止める羽田になってしま
った。

避けた筈の石に当たつたことで一瞬頭が混乱しかけたが、もう一
度チップにヨー ヨーを投げ、止めをさした。

消える身体と引き換えに、その場に残された銅貨を広いながら、
先ほどの現象について考える。

確かに、あの時わたしは避けた筈だった、にも関わらず、身体の
中心に石を当てられてしまった。

もしや敵の持つスキルが関係しているのかもしれないと思いつつ、
ステータスを開いてみると、新しく回避スキルが発現していた。

回避：1（回避確率0・1%上昇）

避けるのもちゃんとスキルがいるらしいのは、現実での経験による差を出にくくするためだらう。

そんなに運動が得意では無いので、嬉しい配慮といえばそうだけれど、せっかく避けたのにその動作が意味を為さないのは少しつまらない。

今度はそんな不満を感じないためにも、反撃を受ける前に倒してしまつべく、技を取り入れてみることにした。
すぐ近くに居たチップに近づき、少し躊躇つてから、小さな声で咳く。

「ハ、ここここー、つー連撃」

照れ臭さを我慢して思い切って口にしてみたのに、ヨーヨーはぴくりとも動いてはくれない。

自棄になつてもう一度、最初より随分大きめな声で技の名前を叫ぶと、今度はきちんと反応があつた。

構えたヨーヨーの先端がふわりと浮き上がり、皿にも止まらぬ早さで一度、チップの身体を打ち据えた。

一度だと分かったのは、音で辛うじて判断出来たからで、視覚的には何が起こったかさっぱり分からぬ。

生憎それだけではチップを倒すには届かず、反撃を受けながらもう一度ヨーヨーを打ち込み、完全に息の根を止める。

技のエフェクトが地味で今一つと言つていたヨーヨーだけれど、そんなに悪くなかったように思つ。

光つたりキラキラしたり、派手な効果音がついたりはしなかつたけれど、あの速さは格好良かつた。

すっかり気を良くしたわたしは、次のターゲットにも技を使う。一連撃より上の、三連撃である。

多少吃りながら技の名前を叫ぶと、殆ど一連撃と変わり無い動きでヨーヨーがチップの身体へ打ち込まれ、その一撃であつさりと倒せてしまった。

それで調子に乗つたわたしは、すぐ近くのチップに向かつて、ノリノリで叫ぶ。

しかし少し格好をつけて叫んだにも関わらず、ヨーヨーは何の反応も見せてくれず、ただわたしの声だけが空しく空に響くだけだった。

誰かが聞いている訳じゃないけれど、何の反応も示さないチップを見ていたら、急に自分の行動が恥ずかしくなって、一気に頬が熱を帯びるのが分かる。

おかしいなあ、なんてわざとらしく首を捻り、ぱたぱたと手づちわで火照った頬を扇ぎながらステータスを開こうとして、自身の魔力がごつそり減っていることに気づいた。

どうやら技を発動させるだけの魔力が足りなかつたらしい。

早めに気づいていればあんな醜態はさらさなかつたのにと一頬悔しがつてから、もう一度敵に向かつ。

今度はまず、普通に一撃、通常攻撃を行なつてから、間をおかず技を使ってみた。

ヨーヨーの先端がチップの身体を捉えた瞬間、二連撃を発動される。

この流れは思いの外上手くいき、反撃を受けることなくチップを倒すことが出来た。

逆の流れも試してみたが、技を出した後通常攻撃する場合は、一度手元にヨーヨーを引き寄せてから再度投げねばならないため、こちらはあまり上手く行かず、あたふたしているうちに一度も反撃をくらってしまった。

技を一回続けて出す場合は、一連撃一度だと、一度目の技の後すぐに対応してくれなかつたが、一連撃と三連撃の流れだとすぐにヨーが動いてくれる。

そんな風にチップ相手にあれやこれや試行錯誤していると、いきなり後ろから何かに突き飛ばされ、思わずバランスを崩して地面に膝をついてしまう。

一体何事かと首だけで振り返つてみると、ふんふんと荒い息を吐きながらこちらを睨み付けているカウルの姿があつた。

わたしが体勢を立て直すのを暢気に待つてくれる訳もなく、再び勢いよく向かつてこられ、そのまま数メートル程吹っ飛ばされてしまつ。

一度に受けるダメージ量はそこまで多いわけじゃないけれど、このままだと反撃する前にやられてしまう。

次に吹っ飛ばされる前に、転がつてなんとか身体の向きを反転させ、カウルと向かい合つた状態でもう一度攻撃を受けた。

左手で顔を庇っていたせいか、今度はダメージは受けたものの飛ばされずに済む。

すかさず立ち上がりカウルに駆け寄り、通常攻撃と一連撃を続けて打ち込んで、ようやく倒すことが出来た。

半分近く削られた体力を見て、途中で立て直せたことにほつと息をつき、他にこちらを狙っているカウルはいないか確認してから、自然回復がらアイテムを拾つてゆくことにした。

ドロップアイテムはまだ一つも出ていないけれど、お金はラビに比べたら少し増えていて、一撃で倒せるようになつたら随分と狩りの効率が上がりそうだ。

魔力が満タンまで回復したところで、技の試し打ちはやめ、狩ることに専念し始めた。

基本的には通常攻撃と「連撃の組み合わせで、魔力が切れかけたらアイテムを拾いつつ、ひたすら狩り続けた。

途中で器用が増えたか玩具」のスキルレベルが上がつたか、「連撃一発でチップもカウルも倒すことが出来るようになった。

アイテムは、チップからは毛皮、カウルからは牛の肉と牛の角が取れたが、その量は少ない。

狩つては拾い、狩つては拾いのローテーションを繰り返し、陽が傾き地平線の向こうへ沈みかけたころ、戻ってきたキーチくんと合流し、道すがら敵を狩りながら街へと戻る。

わたしはいちいち銅貨やらアイテムやらを拾つて居たのだが、途中からキーチくんが取り出した袋を辺りにかざすと、掃除機のようにアイテムが袋の中に吸い込まれていったので、目につく敵を狩るのに専念した。

特定のクエストをクリアしたらもらえるアイテム収集用の袋、らしい。

羨ましいなあと呟いたら、そのうち取りに行こうぜとか得意気な様子で笑ってくれる。

その表情は幼い外見にぴたりな、まさに年相応なものだったのでは、可愛らしくて頬が弛んでしまいそうになる。

そんなにやつきを防ぐためにも、街の入口にたどり着くまで、黙々と敵を狩り続けた。

真つ直ぐ宿屋に向かい、部屋で戦利品を山分けする。

キーチくんは熊を狩っていたようで、お金の他に数枚の熊の毛皮と肉をいくつか手に入れていた。

昨日より狩っていた時間は短かつたものの、ラビより強い敵を相手にしていたおかげか、収入自体はむしろ増えていて、二人合わせて2000G程度になつた。

わたしが稼いだのは600Gと少しだけなので、一等分にするのは申し訳無い。

しかしキーチくん曰く牛の角はドロップしにくいためにそこそこの値がつくアイテムで、ついでに薬の調合にも使えるというので、手に入れた一本を無理矢理受け取つてもうつ。

後は熊の肉と牛の肉を何枚か交換して、残りのアイテムは各自が狩つたものを取り分することで落ち着いた。

ほつと一息つき、料理を作つてみよつかと食材を幾つか取り出し眺めていると、キーチくんからぽんと何かの本を投げて寄越される。

「基本レシピ。」

攻略サイトに載つてゐやつぱつかだかひ

わたしが口を開く前にそれだけ言つて、さつさと作業部屋に引つ込んでしまつた。

せつかくの好意なのでありがたく受け取り、ゆづくページをめくる。

それは売つてゐる本ではなく、わたしの雑記帳と同じくキーチくんが独自に書きためたノートのようで、低レベルで作れる料理のレシピが幾つも載せられていた。

手順や必要な材料、気をつけるポイントまで丁寧に書き込まれている。

兎の肉とキャベツを使ったレシピを見つけ、早速試してみるべく作業部屋に移動する。

キャベツを千切つてフライパンに敷き詰めてゆき、底が見えなくなつたところでその上に兎の肉を乗せ、火にかける。

しばらくすると手元が光に包まれ、キャベツと細切れになつた兎の肉が炒められたものが現れた。

つまんで口に放り込んでみると、キャベツの甘さと肉の旨味がじわりと口の中に広がり、美味しさについつい田尻が下がる。

続けて食べようとするも、さすがにこれを手づかみで食べるのには抵抗があり、箸かスプーンは無いかとフライパン片手に各部屋を漁りにいく。

「どうした。

ああ、成功したか

「ハハハとあかこちを漁つているとキーチくんが様子を見に出てきて、わたしの手にある料理に気づき嬉しそうに微笑んだ。

「うそ、レシピ早く分かつやすかつたよ、ありがとう」

搜索の手を中断して、わたしも微笑み返す。

キーチくんは満足そうに領いてから、ようやくじいぢいの行動を不審に思ったのか、軽く眉を寄せ首を傾げた。

「食わねえの?」

なんとなく手づかみで食べにくいとは言ひびらぐて、あははと笑つて誤魔化すと、キーチくんは不思議そうにしながらも、深くは追求せず自分の場所に戻つていった。

誤魔化せたのは良いが、どうしたものかとフライパン片手にその場に立ち尽くす。

と、不意に今田丸太を採取してきたことを思い出し、急いで機巧の部屋に駆け込み、丸太を一本取り出した。

この端を薄く削り出して鏝で整えれば、箸として使えそうだ。自分の思いつきにすっかり機嫌をよくし、フライパンを脇に置いて鋸で丸太を切り出す。

少し太めになつてしまつたが、鏝で削るとそれなりに形になつた。細かいものは摘まめなさそつだが、普通に食事をするには十分だらう。

手にとつて数回空を摘まむ動作をし、ついでに試しどばかりに、機巧スキルを発動してみることにした。

左、右と順に作業台の上に箸を並べ、魔力を放出する。

「えーっと、箸、でいいかな」

遊び半分、きつと発動しないと思っていたのに、ぼそりと呟くと、一本の棒はきらきらと光に包まれ、少し動搖してしまつ。光の中から出てきたのは、紛れも無く箸で、さっきよりも表面が

滑らかになつており、ほんのり丸みを帯びていた。

「うわー、成功しちゃった

明らかに完成度の上がった箸をじねじね眺めていると、再びキーちゃんが覗きにきた。

「せっかから何やってんだ

「あ、キーチくん、みてみて、箸が出来たよー」

出来上がったばかりの箸をひらひら振ると、キーチくんは少し田を見開いた後、微妙にわたしから視線を逸らしながら、言ひこくいうに口を開いた。

「あー、食器な、受付で聞いたり書いたりされたるだ

告げられた内容に、ちやんと聞いてみるべったりと肩を落としつけるが、気にしてない風を装つてそのままフライパンの中身をつき、キーチくんにも差し出してみる。キーチくんは少し躊躇つてから、ビニからか箸を取り出しこの口へ運んでくれた。

「ん、うまい」

なんとなく漂つていた氣まずい空気はその言葉で和らいだ、キーチくんも心なしかほつとした様子で箸をしまう。

「食器、借りたやつは外に持ち出せねえし、作つても全への無黙つてことはねえから……多分

最後にフォローらしき言葉を残して、またそそくさと元の場所に戻つていった。

全くの無駄では無いけども、効率は良くないんだがうな、とはちらりと思つたけれど、とつてつけたようなフォローが面白くて、さほどがっかりせずにすんだ。

フライパンの中身をもしやりもしやりと咀嚼しながら、暇つぶしにステータス画面を開くと、また新しくスキルが発現していた。採取は道具!」とスキルが設定されているようで、四種もスキルが増えている。

一つに纏めれば良いのにとは思つけれど、細々と分かれているのも膨大なスキルの中から選択する楽しみのためと考えれば、これはこれで良いのかもしない。

他には戦闘中に発現した回避スキル以外にも、機巧設計スキルなんでもものいつの間にか獲得していた。

「機巧設計……ああ、箸!」

どうやらキーチくんの言つた通り、全くの無駄ではなかつたらしい。

いきなり設計と言わても、からくりの仕組みを理解している訳ではないので、ハードルが高い。

しかもししかしたら、木材や歯車はわざわざ本を買わなくても作れるかもしないと思い立ち、残つたフライパンの中身を一気にか

きじんでから、早速丸太を切り出しにかかる。

隠し部屋で散々木材に触っていたおかげで、大体の大きさは覚えていたものの、正確ではない。

きちんと測つておけば良かつたのだが、今さら後悔しても遅い。一枚目は質の悪いものでも、大きさが分かれれば良いかと割りきつて、適当に形を整えた後に、さっさと仕上げにかかる。

魔力測定器を右手にはめ、ゆっくり魔力を注ぎながら名前を呟くと、たつた2で光の色が変わった。

慌てて手の向きを変え、光が收まるのを末と、所々虫食いの跡がある木材が現れた。

すぐにその大きさを測り、作業台に直接数値を書き込んでから、次はそれに近づくように丸太を切り、丁寧に鏝で磨いていく。最終的にはそのまま木材として使えるのではと思うくらいに綺麗に仕上がった。

果たして機巧スキルを使う必要はあるのかと思つたけれど、解析をかけるとアイテムの名前が切り出した丸太となつていたので、一応魔力を注いでスキルを発動してみる。

現れた木材は、見た目はわたしらしが仕上げたものからほぼ変化がなく、変わつたのはアイテム名のみとなつていた。

「んんん、丸太のままじゃ駄目なのかな」

出来上がった木材を田の前に翳し、うむむと考え込む。

しかし考えて答えが見つかる訳でも無く、実際使って見なければ違いは分からないだろうと結論づけ、次の材料作りに取りかかる。とし、ふと視線を感じて振り返る。

すると物陰からこっそりこちらを伺っていたキーチくんと、ぱつちつ田が合つてしまつた。

機巧スキルの使い道

「どうしたの、キーチくん」

気づかないふりをするには無理があるので、手にしていた木材を作業台に置いて尋ねると、キーチくんはせわしなく視線をさ迷わせて分かりやすく慌てた。

悪戯が見つかった子供みたいな反応だったので、重ねては問わず、少し視線を外して落ち着くのを待つ。

しばらく経つて、むすりとしたしかめっ面を作ったキーチくんは、よしやく口を開いてくれた。

「何か、困つてねえの」

どうやら心配して見に来てくれたらしい。さつきの食器の件があつたせいだらうか。

その気持ちはとても嬉しかったけれど、今のところはまだキーチくんの手を借りなければいけない程に行き詰まつてはいない。

「大丈夫だよ、ありがとう」

感謝の気持ちをこめてにつこり笑ってみせると、一瞬しかめられた眉がへによりと下がり、残念そうな表情を覗かせた。

その顔を見て、失敗したことを悟る。

じゃあいいと言つて、そのまま去らうとしたキーチくんの背中に、慌てて声をかけた。

「あ、やつぱり、聞きたいことが!」

何も思いついてはいなかつたけれど、とりあえず引き留めると、キーチくんは少し嬉しそうな様子でこちらに近づいてきた。じつと期待のこもつた目で見つめられ、内心たじろぎながらも、必死で頭を働かせる。

「うん、えっとね、ほらあれ、採取道具！
採取道具つて壊れちゃったけど、武器とか防具は壊れないのかな」

昨日今日とでかなり使用しているのに一向に壊れる気配の無いヨ
ーハーのことを思い出し、聞いてみる。
ヘルプでは確か摩耗するとあつた氣はするけれど、よく考えたら
耐久度を確認する方法が分からぬし、戦っている最中に壊れたら
困る。

咄嗟にしてはなかなか良い質問だと心の中で自分を褒めつつ、キ
ーチくんの答えに耳を傾けた。

「ああ、壊れるや。

物によって耐久度は違つけどな」

そういや言つてなかつたなと呟き、キーチくんは一本の杖を取り
出した。
形は同じに見えるが、片方は微妙に色がくすんでいゝような気が
する。

わたしに見比べるよつに促して、再び話を続ける。

「残りの耐久知るにはまた特別にスキルがいるんだけど、壊れかければ微妙に色が変わる。

完全に壊れると武器は消えちまうから、捨てるつもりがなきゃそのままの状態になつたら使うのはやめた方がいい。

防具は消えねえけど、防御力とか加護が全部消えてただの服になる

ふんふんと頷きつつ、手を振つてヨー・ヨーを出現させて眺めてみたが、比較対象が無いといまいちよくわからない。

「修理も金かかるし、レベル低い武器だと買い換えた方が安上がりだから、最初は消えるまで使つても問題ねえ。

代わりの武器は用意しどかねえと困るけどな。

防具はまあ、なんとかなるけどな」

確かに戦つている最中にいきなり武器が消え、素手となつたら非

常に困る。

格闘系のスキルもあるだらうナビ、器用スキルでは役に立たないだらう。

明日早速武器屋で予備の武器を買おうと思つが、少々お金が心許ない。

何か作って売るにも、今のところ出来た材料は木材だけだ。と、そこで、さつき作ったばかりの箸の存在を思い出す。

「ねね、キーチくん、これって売れるかな？」

フライパンに乗せたままの箸を指差すと、キーチくんは黙つて首を振つた。

「素材はよっぽどレアじゃなきゃ売れねえよ。
加工した素材は引き取つてすらもらえない」

「違う違う、これ、切り出しただけじゃなくて、ちゃんと機巧スクリ使つたから、もつ素材じゃなくなつてる箸だよ」

「どうやらキーチくんは、わたしがただ丸太を切つて箸の体裁を整えただけだと思つていたらしい。

少し驚いたように目を見開いた後、離れた場所からわたしの作った箸に解析をかけ、ちょっと目を輝かせた。

「本当だ、ちゃんと道具になつてるな。

あんまり高くなれば売れねえけど、丸太から作れる割合考えたら結構効率いいんじやね」

機巧スキルってなかなかいいじゃんと、何故かキーチくんが嬉しそうに微笑んだ。
なるほど、初心者がお金を稼ぐにはつづつつけの職であるような気がする。

しかし作業部屋に専用部屋が無いから、そこまで人気のスキルでもなさそうだ。

果たしてどれくらいの機巧スキル人口はどれくらい居るのかと興味本意で尋ねてみると、その答えは殆ど居ないというなかなかシビアなものだった。

「機巧はなあ、戦闘に使えるの少ねえイメージだから。

ステータスの伸びも良い方じゃねえし、地味だし、NPCにも人気なさそうだし」

「NPCに人気とかあるの？」

人気が無いのもステータスが伸びにくいのも残念だが、それよりも最後が気になつて、そこに食いつく。

「ああ、NPCが成長するつつたる。
そういう街で露天開いてるとたまにNPCが買いに来ることもあ
るし、薬とか結構売れるぞ」

それはなかなか面白そうだ。

同時に図鑑に載つっていたいろいろな道具を思い出す。

あまり実用的なものは少なかつたが、枕やドライフラワーはNPCにはウケが良さそうに思える。

逆にプレイヤーには全く売れなさしだけれど。

イメージが先行して人気が無いのかなど考えていると、キーチくんが慌ててフォローをしてくれる。

「でも結局は自分に合つか合わねえかが大事だし、ステータスは他ので補えばいいし。

俺はいいと思つ、その、機巧」

別に落ち込んではいなかつたので、氣を回せてしまつて悪いとは思いつつ、素直に礼を述べる。

他に聞きたいことは、と無言のまま視線で問われるものの、既に箸を作ることに気がついていて思いつかない。

どうしようつと内心焦つていると、キーチくんから何も無いなら機巧スキルを見せて欲しいと言われ、喜んでそれを受けた。

さつき木材を作った時に余つた木切れから適当な長さのものを一本選び、軽く鏝で整えてから順に作業台に並べ、魔力を注いで名前を呼ぶ。

じつと手元に視線を注がれているのは恥ずかしかつたけれど、失敗することなく完成させることができた。

「出来たよキーチくん」

はい、と完成した箸をキーチくんに差し出すも、その視線はわたしの手に固定されたままだつた。

「それ、何だ」

箸を通り越してぴつと指差されたのは手に嵌めた魔力測定器で、外して手渡すと興味深そうに眺めている。

「結構あつさり作れるんだよ、それ」

あんまりに熱心に見つめているので、少し照れくさくなり、えへへとおどけながら説明すると、ぱつと顔を上げてちらりと見たキーチくんに、キラキラした眼で見つめられた。

「これ、俺にも作ってくれないか。

勿論金はひやんと払うから」

今まで一番興奮しているキーチくんの姿に驚き、何度も「ぐく」と首を縦に振りながらも、あんなにあっせり作れたものにこんなに興味を示すことを少し不思議に思つ。

「魔力測る機械つて無いの？」

「いいや、ある」

聞けば即座に否定され、では何故と更に疑問が募る。

そこではつと我に返つたらしいキーチくんは、恥ずかしそうに視線をさ迷わせながらも、説明してくれた。

「あるんだけど、設置型だから使いにくいんだよ。

俺がやつてゐる無言詠唱、魔力のコントロールが結構纖細だから、手袋だとすっげえい

照れくわいひしながらも、その手にはぎゅっと手袋を握つたま
まだ。

あまりに微笑ましい様子に、つい表情が緩んでしまう。

「ん、いいよ。

材料無いからすぐは無理だけど、雑貨屋に売つてたかな」

すぐに期待に応えたくて、雑記帳を捲つて材料を確認する。
歯車五個と針金一本で、最悪金属板があれば作れそうだ。
その旨を伝え、早速雑貨屋へ行こうとするが、キーチくんが代わ
りに俺が行くと、止める間もなく飛び出してしまった。
その素早さにぽかんと呆気にとられたが、すぐに可笑しくなり、
ふつと吹き出してしまつ。

「かーわいいなあ、キーチくんは

くすくす笑いながら、丸太を削つて箸を作る。

質の良い魔力測定器を作るべく、機巧スキルのレベルを少しでも上げる努力をしながら、キーチくんの帰りを待つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500v/>

ひとりヴァーチャルリアリティー

2011年10月7日02時16分発行